
怪獣咆哮

ムク文鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪獣咆哮

【Nコード】

N0997V

【作者名】

ムク文鳥

【あらすじ】

1999年7月、人類の前に怪変異性巨大獣、略して怪獣が現れた。

何故、いきなり怪獣が現れたのかは誰も知らない。だが、人類の前に怪獣が現れたのはまぎれもない事実であった。

そして怪獣出現より数年後、主人公・白峰和人は、ある日の授業中に怪獣の襲来を告げる警報を聞いた。

そして怪獣が現れた混乱の中で、和人は二人の少女と出会う。

一人は和人に結婚を迫り、もう一人は和人を主と呼ぶ。

二人の少女と出会ったことで、和人の人生は大きく動き出す。
なんか、ハーレム展開っぽくなってきたなあ、と思う今日この頃。

プロローグ

奴らはある日突然現れた。

奴らは海から、地中から、空から現れた。

奴らは魚のような、虫のような、カエルのような、トカゲのような、鳥のような、獣のような姿をしていた。

だが、奴らは決して虫でも、魚でも、カエルでも、トカゲでも、鳥でも、獣でもない。

色々と差異はあるが、決定的に違うのはその大きさ。

奴らの体長は小さなモノでも3〜5メートル、大きなモノになると50メートルを超す個体も存在した。

奴らは人間たちの前にいきなり現れると、破壊の限りを尽くした。町を、村を、都市を。それは瞬間に灰燼に帰さしめた。

町の中にある静かな住宅街。村に広がる豊かな田園。都市に並ぶ高層ビル群。人類の叡智と繁栄の象徴とも呼べるそれを、奴らは牙で、爪で、尾で破壊した。

なぜ奴らが破壊を繰り返すのか、誰にも分からなかった。

ある学者は、奴らには破壊衝動しかないからだと言う。またある学者は、驕り高ぶった人類に対する自然からの報復だと主張した。

そんな奴らの前には、人類の兵器群は殆ど役に立たなかった。

拳銃はおろか重機関銃クラスの火器では、奴らの頑強な皮膚や鱗を貫くのは容易ではなかったのだ。

戦車の主砲、戦闘機のミサイルクラスの兵器を用いることで、ようやく奴らに有効打を与え得ることが可能なのであった。

奴ら。

昆虫のようで昆虫ではなく、魚類のようで魚類ではない。両生類に似ていても両生類とは言いがたく、爬虫類や鳥類といくつか類似点があるものの、決して爬虫類や鳥類ではない。そして勿論、ほ乳

類でもない。

突如人類の前に現れた、動く災厄とも言える奴ら。

『かいへんせいそんな奴らの事を人類はこう呼んだ。怪変異性巨大獣きょだいじゅう』

『かいじゅう怪獣』と。

略して

プロローグ（後書き）

現時点で、自分のもう一つの執筆である「虹風のアルカンシエ」が完結を迎えていないというのに、もう一つ連載を立ち上げてしまう愚かなムク文鳥です。

この作品もそんなに長くはならないと思いますが、取り敢えず本格的に始動するのは「アルカンシエ」が終わってからになると思います。

どうぞよろしくお願いします。

01 - 咆哮

教室の前、黒板の上に設置されているスピーカーが、突如けたたましい異音を放った。

「け、警報だっ！！」

クラスの誰かがそう叫ぶ。

その声に弾かれるように、白峰和人は教室の窓から海の方を眺めた。

和人の視線の先、校舎から数キロ程離れた何もない海岸線の更に奥、蒼く輝く海が異様なうねりを見せていた。

その光景を和人は見たことがある。いや、和人だけではない。この街 S 県城ヶ崎市の住人なら、幾度となく見て来た光景である。それはとある現象の前ぶれ。正に災厄が訪れる嵐の前の静けさ。奴らが再びこの城ヶ崎市に上陸しようとしている前兆だ。

ざわざわとざわめく教室に、教師の声が響き渡る。

「怪獣警報が発令された！ 至急避難シェルターに移動しなさい！ 大丈夫、怪獣が上陸するまでまだ時間がある！ だから焦らずに

」

そう。

奴ら 怪獣が再び城ヶ崎の街に上陸しようとしているのだ。

初めて怪獣が人類の前に姿を現したのは、1999年の7月だった。

真夏一步手前、梅雨も明けきっていない蒸し暑いある日、そいつはいきなり海から太平洋に面した本州のとある都市に姿を現した。

当初気象庁では、それを津波だと判断した。

その都市の沖合いの海流が突如乱れたかと思うと、うねりを生じさせながら陸に向けて押し寄せたのだ。この時点で政府は津波警報を発令、該地域の住民の避難勧告を出した。

だが、結果的には遅かった。

それは津波とは思えない速度で押し寄せ、あっという間に陸地に到達した。そして津波と思われたうねりの中から、そいつは姿を現したのだ。

直立歩行する巨体は全長40メートルを遥かに超えていた。その巨体を支える脚は太く短く、全体のバランスを取るためだろう長く伸びた尻尾。

脚同様太短い腕の先には、鋼鉄をも引き裂く鋭い爪を備え、同じような硬質の輝きは大きく開かれた口から零れる牙にも見て取れた。背びれの如く背中に並んだ無数の刺。硬く、それでいて柔軟性に富んだ表皮は、戦車の装甲以上の防御力を持ち、全体に赤茶色の身体の中で、そこだけは白く爛々と狂性を秘めて輝く双眸。

後に『ベルゼラー』という呼称を与えられる第一号怪変異性巨大獣、略して一号怪獣はこうして人類の前に姿を見せた。

「どうやら本当に怪獣が来たみたいだぜ、毅士？」

海から教室内へと視線を戻し、和人は後ろの席に座っている友人に告げる。

以前に怪獣がこの街に現れたのは1年半程前だった。

「ふむ どうする？」

毅士 青山毅士は、縁のない眼鏡を指でついと押し上げながら逆に問い返した。

「勿論！ 行くに決まってるんだろ！」

毅士の「どうする」という問いに和人は即答する。何を？ となど聞くまでもない。

毅士との付き合いは古い。この古くからの友人が何を問うているのかなど解りきっている。

その毅士は、期待に目を輝かせている和人を改めて見詰める。

170センチちょっとの身長に、引き締まった体付き。この友人の将来の夢が、兄と同じ自衛官になって怪獣と戦う事だと毅士は知っている。

おそらくその夢のために、それなりのトレーニングをしているのだろう。

対して自分の将来の夢はというと、怪獣の研究者となる事だった。だからだろうか。幼い頃から怪獣に興味を持ち、「怪獣博士」と周りから呼ばれた自分と、自衛官を目指すこの友人が妙に気が合ったのは。

毅士は和人にやりと笑って一つ頷くと、教師の指示に従って避難の準備を始めた。

いや、避難のフリの準備を始めた。

ベルゼラーは上陸するなり破壊の限りを尽くした。

ビルをなぎ倒し、家を踏みつぶし、そして 人間を喰らった。

これは後に判明する事だが、怪獣は人間を喰らう。

今、地球上で最も生息数の多い生物は何か？ それは人間である。勿論、生息数で人間を超えている生物はいくらでもいる。だがその殆どは昆虫のような小型の生物であり、怪獣の捕食対象に成り得る程の大きさの生物で、最も数の多いのは間違いない人間であろう。地球上のあらゆる場所に人間は生息している。極寒の土地だろう

が、灼熱の大地だろうが多かれ少なかれ人間はいる。

怪獣にとつてどこに行つても存在する人間は、格好の捕食対象なのだ、と現時点では考えられている。

突然現れた怪獣を見て、人間は驚愕のあまりパニックに陥った。いきなり全長40メートルもの大型生物が海から現れたのだから、無理もない事ではあつたが。

この前例のない事態に際して、防衛省の反応は鈍かつた。

なんせ相手は怪獣である。これまで他国の軍隊を想定した訓練はしてきたが、怪獣相手に戦うなんて思つてもみなかつたのだから。

怪獣相手にどのような装備で、どのような作戦行動を取るのか。

自衛隊上層部は明確な答えを出すまで時間がかかり過ぎた。いや、出せなかつたと言つたほうが正確であろう。

そして暴れ回るベルゼラーを斃すため、何とか部隊が動き出したのはベルゼラー上陸後、実に4時間も経つた後であつた。

そして自衛隊は何とかベルゼラーの打倒に成功した。

作戦時間2時間47分5秒。

投入された戦力は90式主力戦車8両、F-15イーグル2機、

F-2支援戦闘機5機、AH-1S戦闘ヘリ4機。作戦参加人員は総数約450名。

自衛隊はこれだけの戦力を投入して、ようやく1匹の怪獣を斃すことができた。

この作戦における自衛隊側の被害は、戦車大破3両、中破1両、軽破4両。

航空機はF-15が1機撃墜、F-2が3機撃墜。

ヘリに到つては4機とも大破もしくは撃墜という被害を被り、戦死した自衛官は3桁にまで昇つたという。

これに民間人の犠牲者を含めると、実に1000人を超える被害者が、7時間に満たない短い間に1匹の怪獣の犠牲となつた。家屋や道路などの被害は、もはや挙げたらきりが無い。

これが歴史上初の人類と怪獣との邂逅であつた。

基地内に緊張が走る。

怪獣出現の報は、ここ怪獣自衛隊城ヶ崎基地にも勿論届いていた。基地内に流れた緊急事態発生コールに、白峰しらみね明人あきと三等怪尉さんとうかいは思わず駆け出そうとした。

「待ちなさい、白峰三尉！」

そんな明人を、凜とした声が呼び止める。

「ですがカーナー博士！」

自分に向かつて声を上げる明人に、シルヴィア・カーナーはその碧瞳に強い意思を乗せて睨みつける。

「今、あなたが出て行ったとして何が変わるというの？ 例えあなたが自衛官として優秀有能であっても、人間一人の力なんて怪獣にとっては微々たるものだという事ぐらいあなたも知っているでしょう？？」

現在の直属の上司たるシルヴィアにそう言われて、明人は拳を握り締めながらも彼女の言葉に従った。

「今のあなたには、あなたにしかできない大切な役割があるのよ」

シルヴィアにそう言われて、明人は黙ってそれまでいた場所に戻るべく歩き出す。

明人が先程までいた場所。そこには幾何学的で不可解な模様が床一面に書き込まれていた。その模様が、一定のリズムで明滅を繰り返す。

返している。

「さあ、始めるわ。魔方陣の中央に立って」

シルヴィアが視線でその場所を示す。彼女が頭を巡らせた際、肩で切り揃えられた美しい金髪がさらりと揺れる。それに合わせて、彼女の胸元で激しく自己主張をしてやまない双丘も同様にゆざりと揺れた。

180近い身長の人より頭半分程低い身長　おそらく165センチ程はあるだろう。その身長に見合う身体のメリハリは、白衣を羽織っていてもよく判ってしまう。

明人は敢えて彼女の胸元で揺れる双子山を意識から外して、彼女が魔方陣と呼んだ模様の中心に向かう。

魔方陣。

彼女は床に刻まれた模様を確かにそう呼んだ。

その後、世界各地で怪獣の出現の報告が相次いだ。だが、なぜ怪獣は突然現れたのか？　それは誰にも解らなかった。

他にも疑問は山ほどある。

1999年にベルゼラーが現われるまで、怪獣はどこに潜んでいたのか？

一体どうしてあれ程の巨体を持ち得るのか？

生態は？　知能は？　生殖は？

それよりも最大の関心は、どうすれば怪獣は倒せるのか？　という事であった。

30メートルを超す大型怪獣ともなると、重機関銃クラスの火器を寄せつけない。

それ以上の兵器　ミサイルなど　を以って、初めて有効打と

成り得るのだ。

だが、怪獣が現れる度にミサイルを湯水のように使用しては、コストがかかり過ぎてしまう。

そこで人類は対怪獣用に新たに兵器の開発に着手した。これに率先して携わった国は、何故か怪獣の出現数が異様に多い日本だった。この期に及んで、防衛費がどうの憲法がどうのと言う者は誰もいなかった。

なんせ怪獣はいつ、何処に現れるか判らないのだから。

他国もこの兵器開発には全面的に強力を申し出た。怪獣の危機に晒されているのは日本だけではないからだ。

開発成功後、その技術を提供するという条件の元、日本政府はその協力を受け入れた。

低コストで尚且つ、巨大な怪獣に対して有効な兵器。

そのコンセプトに基づき、対怪獣用兵器の研究は進められていった。

そして一号怪獣出現から5年後の2004年、対怪獣用兵器のプロトタイプが完成する。

そのプロトタイプを見て、関係者は呆気に取られたという。何故なら、そのプロトタイプは、全長40メートルほどの鋼でできた巨人 所謂巨大ロボットだったのである。

何故、対怪獣用兵器が巨大ロボットなのだっ！？

居合わせた関係者の一人が叫ぶ。

それに対して開発責任者は、「怪獣の相手をするのは鋼の巨人か、善良な巨大宇宙人のどちらかと相場が決まっているでしょう」と、しれっと答えたという。

この話が本当かどうかは定かでないが、ともかくその後も鋼の巨人の研究は進められていった。

怪獣に痛打を浴びせるだけのパワーと、怪獣からの打撃を防ぎき

る装甲。この2つの課題は容易にクリアできたのだが、最後に厄介な問題が持ち上がった。

動力源である。

当初から巨人の動力には電力を、と開発者たちは考えていた。

しかし、全長40メートルを越す鋼の塊を動かすためには、如何ほどの電力を必要とするだろうか。

試算によると、鋼の巨人一体を動かすためには、実に街一つを賄うほどの電力が必要になるという。

この現実の前に、電力を動力として用いるという案は廃棄されることになった。

では、代案は？ と聞かれて関係者たちは皆頭を悩ませる。

関係者の中には原子力を、と言い出す者もいたが、これは速効で却下された。

ちよつと考えれば判るだろう。万が一巨人が怪獣に倒された場合、もしくは深刻なダメージを追った場合、放射性物質が漏れたりしないのか？ という不安があったからだ。

結局、動力源がなかなか見つからないまま時間が過ぎていく。

そんな時、開発責任者が一つのアイデアを提供した。歴史の影に葬り去られた古の技術を用いてみよう。

その古の技術こそ、魔術と呼ばれるものであった。

02・少女(前書き)

『アルカンシエ』を投稿したついでに『怪獣咆哮』も投稿します。

02 - 少女

和人と毅士の2人は、シエルターに避難する途中こっそり抜け出して、海に向かってバイクを走らせていた。

本来、和人たちの通う高校はバイク通学を禁止していたのだが、怪獣が現れた際の緊急移動手段としてバイクを校内に置いておく事は許されていた。

そのため、以前はバイクの免許の取得に否定的だった学校側だが、最近ではバイクの免許取得に肯定的となった。

そんな訳で和人も毅士も、中型自動二輪免許をしっかりと取得している。

2人が今乗っているバイクも、毅士が学校に置いておいたSUZUKIスカイウェブ250である。

主だった道路は警察や自衛隊により、海方向からの避難用として交通規制されているだろう。そんな道路を海方向に逆走でもしようものなら、あつという間に止められるに決っている。

だから2人は裏道を選んで海を目指していた。この街で生まれ育った2人にとって、裏道は自分の家の庭のようなものだった。

「今度の怪獣はどんな奴だと思う？」

リアシートに座る和人は、バイクを運転している毅士にそう問いかける。

「確か、一年半前に現れたのは10メートルに満たない小型だったな。果たして今回はどのような奴が現われるやら。しかし、怪獣が現れることを期待しているとは、俺たちは不謹慎もいいところだな」
「あははは。全くだ。兄ちゃんに何て言おう」

2人はヘルメットに仕込んだ通信機を通して会話をしていた。自衛隊員である和人の兄、明人あきこの同僚の整備班員が、廃棄処分となる旧式の通信機を改造して造ってくれたものである。

廃棄処分の旧型とはいえ元々軍用として開発されたものであり、和人たちには充分実用に足りる。

2人はそんな話を話しながらも、どんな怪獣が現れるのかわくわくしながら裏道を走り抜けて行った。

元々は小さな漁村でしかなかったここ、S県城ヶ崎市。

だが、近隣の都市のベッドタウンとして発展し、田舎ではないが都市でもないといった規模の街にまで成長した。

だが最近では、城ヶ崎市はまた違う姿を見せている。

一号怪獣ベルゼラーが初めて人類の前に姿を現し、そして斃された日より僅か数日。ここ城ヶ崎市にまたも怪獣が出現した。

城ヶ崎に現れた怪獣はベルゼラーのような直立歩行型ではなく、シーラカンスによく似た魚に八本の脚を生やしたような姿をした怪獣だった。大きさもベルゼラーより遥かに小さく、20メートルにも満たない中型に分類されるサイズであった。

この魚型怪獣、後にシーラカンスに似ているからという理由で『シーラカンス』というひねりも何もない呼称を与えられる怪獣は、瞬間に城ヶ崎市の漁港を壊滅させた。

そして漁港を蹂躪したシーラカンスは、都市部に向かって移動を始めた。

シーラカンスは口から溶解性の泡を吐き出して建築物を溶かし、逃げ惑う人間を長い舌で捕えては咀嚼していった。

怪獣上陸から約1時間、ようやく近隣の基地より自衛隊の先発隊が到着し、シーラカンスと交戦を開始。

中型のシーラカンスには、大型のベルゼラーのようにミサイルクラ

スの兵器でなくても通用した。

さすがに9ミリや45口径程度では効果はなかったが、12・7ミリクラスの重機関銃でも通用したのが幸いであった。

その後、遅れて到着した戦車隊の戦車砲の斉射によりシーランスは斃されるのだが、上陸から斃されるまでの2時間弱で、城ヶ崎市は漁港部壊滅、都市部も3分の1が破壊されるという被害を被った。

「やれやれ。まさか、いきなり怪獣と遭遇するとはね」

呆れ口調で少女は呟いた。

彼女は街を一望できる岬の上から荒れ狂う海を眺めていた。この岬に来る途中、関係者以外立ち入り禁止という看板があったが、少女はそんな事には頓着していなかった。

「まだ住む所も決ってないのになあ……本当にボクについてないよ」

「そんな事言ってもやるのだろうか？ 茉莉？」

その声に、茉莉と呼ばれた少女は大きく頷いた。

今、この岬には少女の姿しかない。

少女以外にこの岬にあるものといえば、少女の物と思われる大きなめめスポーツバッグが一つ、彼女の足元置かれているくらい。それなのに声は確かに二種類存在した。

一つは少女自身の声。その身に宿る若さを含んだ張りのある声。年齢は15、6歳ぐらいだろうか。艶やかな黒髪は肩甲骨辺りまで伸ばされ、先端にやや癖が見受けられた。その髪が岬を吹き抜ける風に靡いている。

真っ直ぐに海を見詰めるその瞳は、強い意志を秘めて黒曜石のように陽の光を受けて輝いている。

着ているものは、着古したデニムのジャケットと同色のスラックス。ジャケットの下は黒のトレーナーという活動的なもの。そんな活動的なファッションが、この少女にはよく似合っていた。

そしてもう一つの声。その低い声には高い知性と冷静な性格を思わせる響きが含まれていた。

声の質から男性のものだと思われるが、その声の主と思われる姿は茉莉と呼ばれた少女の周囲にはない。

いやもう一つ。確かに姿は、ある。

それは少女の肩。その小さな肩に、鳥のような生物の姿があった。

「聞くまでもないでしょ、ベリル。それが私の決意なんだから」

少女は肩に止まった鳥のような生き物に語りかける。

「そうであったな。怪獣を倒す。それが茉莉の誓いであったな」

ベリルと呼ばれた鳥のような生物が、先程と同じ低い声で少女に応えた。

そう。少女と会話していたのは、この妙な生き物だった。

「そういう事。怪獣が姿を現したら 行くわよ」

「心得た」

妙な生き物とそう言葉を交わした少女は、一度周囲を見回して誰もいない事を確認すると、何故かその場でいきなり服を脱ぎ始めた。

裏道を走り続けてきた和人と毅士は、一度も咎められる事なく海の近くまで来ていた。

「そう言えば和人。お前はあの噂を聞いたか？」

バイクを運転しながら、毅士が不意に和人に尋ねた。

「噂？　どんな噂の事だ？」

「何でも、人間の味方の怪獣が現れたのだそうだ」

毅士の言う噂。それは2ヶ月程まえの事だった。ここ城ヶ崎市よりさほど遠くないある街に、突然地中から怪獣が出現した。

地中から現れた土竜もぐらによく似た怪獣が、今まさに街を蹂躪しようとしたその瞬間、空から一匹の鳥に似た怪獣が飛来した。

土竜型は20メートル程の中型。対して鳥型は40メートル近くもある大型だった。

「ああ、その話ならニュースで見ただぞ。鳥型が土竜型を掴んで飛び去ったんだろ？　アナウンサーは鳥が土竜を獲物と思って襲ったんじゃないかって言ってたな」

毅士の話聞いて、和人は記憶を掘り起こしながらそう答える。

「その通りなのだが、今まで怪獣同士が争いを起こしたという話なぞ聞いた事がない。だから怪獣と戦う人間の味方をする怪獣が現れたのでは、という噂になったようだな」

「ふーん。でもさ、それって単に怪獣と怪獣が喧嘩しただけじゃないのか？」

「確かにその通りかもしれん。怪獣同士だって喧嘩することもあるうからな。まあ、あくまで噂にすぎんよ。人間の味方をする怪獣など想像もできん」

「それもそうだな……って、おい毅士っ！！　あそこっ！！」

突如叫んだ和人の指差す方向、そこには、人気のない裏道をとぼとぼと泣きながら歩く、5、6歳ぐらいの男の子がいた。

「どうやら逃げ遅れたか、保護者とはぐれたかだな」

「どうする毅士？」

「……致し方あるまい。まさかあの子をこのまま見捨てる訳にもいかん」

毅士がバイクと停止させると、和人が飛び降りて男の子に駆け寄る。

「どうした？ 迷子になっちまったのか？」

和人はしゃがみ込んで男の子に話しかける。泣きながら話してくれた事によると、やはり避難の途中で親とはぐれて迷子になったらしい。

「よし、もう大丈夫だからな。俺たちがシェルターまで送ってやるから」

そう言っって男の子の頭をやや乱暴になでると、和人は立ち上がって毅士を見やる。

「恨みつこなしの一回勝負だぜ？」

「よかるう。受けて立つ」

その言葉と同時に、毅士は拳を握って和人に向かって突き出す。対して和人は開いたままの掌を、同様に毅士に向けて勢いよく放つ。

「よおおおっしっ！ー！ー！ー」

「ふ……不覚……っ!!」

毅士のグーに対して和人のパー。何の事はない、単なるジャンケンである。

「それでは毅士くん、この子を無事送り届けてくれたまえ」

「不本意だが承知した。それよりも和人、写真を撮るのを忘れるな？ 後から写真と合わせて委細を聞かせてもらおうぞ！」

そう言い残すと、毅士はバイクのリアシートに男の子を乗せ、渋々ながらUターンして近くのシエルターに向かった。

「さて、と」

遠ざかる毅士のバイクの排気音を聞きながら、和人はこれからどうするか考える。

「そうだなあ。どこか海がよく見える場所は……」

少し考えて和人は、ここからさほど遠くない所に絶好の場所がある事を思い出した。

「あそこからなら間違いなくよく見えるな。よっし！」

そう一言呟くと和人は、現われるであろう怪獣がよく見える場所海に着き出した岬を目指して駆け出した。

02・少女（後書き）

作中に自衛隊の装備について少々出て来ますが、自分、自衛隊についてはあまり詳しくありません。もし詳しいがおられましたら、色々と指摘して頂けると幸いです。

今後ともよろしくお願いします。

03 - 巨人（前書き）

なんとかチエックが終わったので、もう1話追加で投稿します。

03 - 巨人

「怪獣と戦う怪獣……ですか？ 単なる怪獣同士の争いではなく？」

最近直属の上司となったばかりの女性、シルヴィア・カーナーの言葉に、明人は思わず聞き返した。

「おそらく違うと思うわ。尤も、怪獣の生態なんてまるで判っていないのだから、断言はできないけど」

シルヴィアは設置された機械やらノートパソコンやらと水晶玉やら魔方陣やらという、ハイテクなんだかレトロなんだかよく解らない器材をいじりながら明人に言う。

シルヴィアの言う通り、怪獣の生態は殆ど解明されていない。

生きたまま怪獣を捕えるなどまず不可能だし、死んだ後でも怪獣の体は爆発したり溶解したりして、解剖する事もできないからだ。

「第一号怪獣が出現して以来、怪獣同士で争ったという報告は聞いた事がないわ。確かに、複数の怪獣が同時に現れた事例もないけどね。でももしも、怪獣を何らかの方法で手懐けたり、コントロールすることができるとしたら、それは人類にとって極めて強力な戦力となるわ。勿論、対怪獣という意味以上に、対人類という意味でもね」

「なるほど。もし怪獣を自由に操れば世界征服も夢じゃないってことですか」

「そういうこと。もしそれが本当に可能なら、それは極めて危険な事でもあるわ……さて、これでよしと。じゃあ、リンクを始めるから服を脱いで」

「 は？ ふ、服を脱ぐ…… んですか？ 」

余りにも想定外ことをさらりと告げる上司に、明人は再び問い返した。

「 そうよ。早く脱ぎなさい 」

シルヴィアは相変わらず器材を注視したままそう言葉を続ける。そんな上司の言葉に、明人は躊躇いながらも服を脱いだ。

「 あ、あの博士…… 脱ぎましたが…… 」

「 あ、そう。じゃあ始めま 」

ようやくシルヴィアが器材から顔を上げて明人の方を振り向く。その途端、シルヴィアの顔が、ぴしりという音と共に凍りついた。

「 あ、あのー博士？ 」

「 い、言われた通りに脱いだんですが えっと…… 」

「 ど、どうしたんですかシルヴィア博士？ 」

「 そ、その そんなにもじーっと見つめられると、自分も恥ずかしいのですが 」

「 だ 」

「 は？ 」

「 誰が全部脱げと言ったかああああああああああつ！？ 」

シルヴィアは手近にあつた直径30センチくらいの水晶玉を、思いつきり明人に向かって投げつけた。

水晶玉は見事に、全裸で立っていた明人の頭に命中した。すこーんと勢いよく。

「う、うとう上だけ脱げばいいのよっ！！ ま、全く、何てモノ見せるのっ！！」

「そ、それならそうと言ってくださいよっ！！ こっちだって恥ずかしいんですよっ!？」

水晶玉の当たった頭を押さえながら、明人はいそいそと下着とスラックスを身につける。

「うとう、全部見られてしまった。もうお婿に行けない……」

「この非常時に何馬鹿な事言ってるの？ 裸を見られたぐらいでお婿に行けないって、何時の時代よ！ 何なら私が引き取ってあげ

」

先程自分で投げつけた水晶玉を、再び器材に接続していたシルヴィアの手が不意に止まった。

振り返れば、魔術だ研究だと好きな事に一心不乱に打ち込んできたが、気付けば自分ももう28歳。

周囲の友人たちの殆どは片づいてしまっていて、最近何となく焦りを覚えているのも事実である。

ここまで考えてシルヴィアは、改めてこの数日前から部下となつた青年を見る。

背は女性としては長身の自分よりも頭半分は高い。

顔だちもやや幼さが残っているものの整っていると言えるだろう。更にあれのパイロットに選ばれる程の素質の持ち主でもある。今後はあれを駆って怪獣を倒していけば、自衛隊の中でもどんどん出世していくだろう。

しかも国家公務員で収入も安定している。思った以上にこの目の前の青年は買ひ物件かも知れない。

この時明人は確かに見た。自分を見詰めるシルヴィアの眼が怪し

くきゅぴーんと光ったのを。

「ねえ、白峰くん。あなた確かご両親はもう亡くなっただって言うていたわよね？」

「は、はい。自分の両親はシーランスが現れた際、命を落としております。現在自分の家族は高校生の弟が一人いるだけです。それが何か？」

何となく背筋に冷たいものを感じながら、明人は上司の質問に答える。

「そう……そうなの……小煩い姑もないのね……ふふふふ……これはますます……うふふふ」

（こ、恐えっ！！ に、兄ちゃん、この人が何故か途轍もなく恐えよ和人お……）

雄の本能が警報を鳴らしまくっているが、だからといってここから逃げる訳にもいかない。

自分には大切な役目があるのだ。自分にそう言い聞かせて、明人は目の前の妖気すら放ちそうな上司に声をかける。

「そ、それですね、博士。自分たちは一体、何をしていますか？ 今行っている作業があれと関係しているということは解るのですが……」

「え、え？ あ、ああ、これはね」

ふと正気に返ったシルヴィアが、こほんと咳払いを一つすると改めて説明を開始した。

「あなたの持つ魔力の波動パターンを解析して、あれのコアになっ

ている『賢者の石』とリンクさせて、より大きな魔力へと変換するのよ」

そう説明しながらシルヴィアは、背後のガラスの向こうに視線を向ける。明人も彼女に釣られて同じ方を見る。

二人の視線の先、背後にある大きなガラスの向こうの格納庫、そこには真紅に彩られた鋼の巨人が静かに佇んでいた。

「これこそが科学と魔術の融合、歴史の表の技術と裏の秘術の結晶、対怪獣用特殊戦闘兵器『魔像機』の実戦配備第一号 『騎士』よ」

『魔像機』。

5年の月日を費やして開発された対怪獣用の鋼の巨人。それから3年に渡って改良され、魔術を導入する事で更に発展させた対怪獣用特殊戦闘兵器である。

そして今、明人の目の前にいる女性こそ、プロトタイプであった鋼の巨人の開発チームの責任者にして機械工学の世界的権威、更に歴史の影で代々と魔術を伝えてきた魔術師たちの末裔でもあるシルヴィア・カーナーその人なのである。

「魔術の強化呪詛を施す事によって、同じ強度ながら遥かに薄く軽量の装甲。これによってコストの削減と軽量化によるスピードの高上に成功。両腕に内蔵したガトリングガンも弾丸に同じく魔術処理をする事で貫通力を大幅にアップ。30ミリクラスの口径でも、大型サイズの怪獣に充分通用するわ。でもこの『騎士』の主武装は、その名に相応しく手にした剣よ」

実戦配備型第一号魔像機である『騎士』の外見はその名が示す通り中世の騎士を模していた。

全身を真紅の鎧で覆い、右手には巨大な剣、左手には楕円形の楯。正に騎士の装いである。

「あの剣には装甲同様強化呪詛を施してあるわ。あの剣の質量に魔像機のパワーが重なれば、いかに怪獣の皮膚が強靱であろうとも斬り裂く事が可能よ。そして左の楯。あれには耐火と反炎の呪詛が刻まれているの」

「耐火と反炎？ ああ、そうか。怪獣の中には炎を吐くやつが多いですからね」

明人の言葉通り、炎を武器とする怪獣は多い。中には吹雪を起したり、雷を放ったりする怪獣もいるが、今まで現れた怪獣の約6割が炎を吐いたという記録がある。

「そういうこと。現在炎以外にも対応した楯を製作中よ。それが完成すれば、相手に合わせて楯を持ち替えるだけでフレキシブルに対応可能になるわ」

「なるほど。これもまたコストの削減って訳ですか」

「そう。剣を主武装にしたのも同じ理由よ。この剣には「強化」の他にも、「修復」の呪詛も施してあるから、一度の戦闘で使い物にならなくなることもないわ。勿論、自ずと限界はあるけど」

「確かにこいつなら怪獣とも互角に渡り合えそうですね」

「ええ。開発者としてもそこには自信があるわ。でも『騎士』には……いえ、『魔像機』には致命的な欠点があるの」

「聞いてます。誰でも操れるという訳ではないってことですね？」

「そう。それに『魔像機』の動力の源は、魔力を精製する賢者の石と呼ばれる鉱石なの。この賢者の石の数が少なくて、大量に『魔像機』を造る事ができないのも欠点の一つね」

賢者の石と呼ばれる鉱石は、世界中でも稀にしか発見されない稀

少な魔道鉱物である。

この鉱石の特徴は、莫大な魔力を生み出すことであろう。更に、所有者の魔力を増幅する作用も確認されている。

「石そのものの魔力と操縦者の魔力。その二つがあって始めて『魔像機』はその真のパワーを発揮する。そのためには、操縦者の魔力が高ければ高いほどいい。……それがあなたがパイロットに選ばれた理由よ白峰くん」

「博士はそう言いますが……本当に自分には魔力なんて有るんですか？」

魔力は誰にでもあるものではない。魔力を有することは、生まれついた資質であって後天的にどうこうできるものではないのだ。そして『魔像機』を動かせるだけの魔力を宿す者は、世界中でも数人しか確認されていない。

「ええ、あるわ。それもかなりの資質を秘めている。おそらくこの国中を探しても、あなたを超える魔力の持ち主はまずいないでしょう。そしてそれこそが、『騎士』がここ　怪獣自衛隊城ヶ崎基地に配属された理由。この世界最大の怪獣の「通り道」である城ヶ崎市にね」

シーランスの出現から数年の間に、城ヶ崎市では10回近くに及ぶ怪獣の上陸があった。

何故か、怪獣が現われる場所には偏りがあった。怪獣は世界各地で出現したが、その中でも何度も出現が重なる場所が何ヶ所か存在する事が判明し、後に研究者たちはこの度重なる出現ポイントを、「通り道」という名で呼ぶようになった。

そんな怪獣の「通り道」の一つが城ヶ崎市であり、数ある「通り道」の中でも、最も出現数の多いのもまた城ヶ崎市なのである。

ベルゼラー出現より3年、城ヶ崎市で4度目の怪獣の上陸が記録された年に、日本政府は怪獣対策専門の自衛隊設立を宣言。これが怪獣対戦特務自衛隊、略称怪獣自衛隊である。

そして初の怪獣自衛隊の基地が置かれたのが、最多出現数を誇るここ城ヶ崎市であったのは極めて当然な事であろう。

これにより城ヶ崎市の街並みは一変する。

それまでベッドタウンとして発展してきた城ヶ崎市だが、何度も怪獣が出現したため街はめちゃくちゃになってしまった。

ベッドタウンとして利用していた会社員などは早々に他所に転居、古くからの住民にも市や国が転居を勧めた。

その代わりに移り住んできたのが、怪獣自衛隊の自衛官やその家族たち、そして怪獣も恐れない肝の据わった、自衛官やその家族を商売相手とした多種多様の商人たちだった。

古くからの住民の中にも、「怪獣なんかには故郷を奪われてたまるか」と、頑に転居を拒んでいる人たちもいて、人口的にはシーランス出現前とさほどの変化はない。

ちなみに和人と毅士の家も古くからの城ヶ崎市の住民であり、毅士の実家は何代にも渡ってこの土地で商売を続けてきた「青山青果店」という八百屋であったりする。

和人の両親はシーランスの犠牲となり帰らぬ人となったが、奇跡的に家そのものは無事で、今もその家で兄と二人暮らしをしている。

「自分が城ヶ崎基地の配属になったのは、やはり『魔像機』が配備される予定があつたからですか？」

「さあ？ そこまでは私が関与する事ではないから判らないわ」

「まあ、いいです。結果的にここに戻れたんですから」

「やっぱり弟さんが気になった？」

「そりゃあなりますよ。今ではたった二人の家族ですから。長い間一人暮らしをさせちゃいましたからね」

明人と和人の両親がシーランスの犠牲になったのは8年前。その時明人は18歳、和人は9歳であった。

幸い両親が生命保険などに入っていてくれたお陰で、生活はさほど不自由することもなく、高校生であった明人もそのまま無事卒業することができた。

だが、いくら保険金がある程度あるとはいえ、弟はこれから中学、高校、大学と学費がかかる。

だから当時大学受験を希望していた明人は、急遽志望大学を変更した。

それまで近場の大学を目指していた明人が、次に目標としたのは防衛大学校であった。

この防衛大学校は、大学の生徒でありながら国家公務員でもあるという特殊な学校である。

学費などがかからないどころか、国家公務員として僅かながらも給料も出れば、ボーナスの支給もあるのだ。

だから明人は迷わずここを選んだ。

だが、防衛大学校を選んだことで問題もあった。

防衛大学校のある神奈川県は、城ヶ崎市からかなり遠かったのだ。そのため大学の4年間と、その後の幹部候補生学校の1年の5年間、まだ幼い和人は一人になってしまふ。明人はそれが心配だった。

結果としては、和人の面倒は近所の人や友人である毅士の両親などが見てくれる事になった。兄の前では気丈に振る舞っていた和人だったが、両親を亡くしてすぐにまた、明人も遠方の大学に行ってしまうのだ。淋しくなかった訳がないだろう。

「一人にさせてしまった割には、真っ直ぐに育ってくれましたからね。ちよつと安心しました」

「この国の言葉で何と言ったかしら？ 確か……『親はなくても子は育つ』？」

「その通りです。ところで今更ですけど……どうして脱ぐ必要があ

「つたんですか？」

「勿論理由はあるわよ。魔力というものは、人の身体の表面から出るものなの。だから魔力を使用、つまり魔法を使う時は肌の露出面積が多いほど効果が上がるのよ。ほら、よく魔法師のイメージで、ゆったりとしたローブを着ていたりするでしょ？ あれは事実で、あのローブの下は何も身に付けてないものなの。白峰くんの場合、魔力はあっても魔力を扱うことは素人だから、極力肌を晒した方が効果的なもの」

「それなら、やっぱり全部脱いだ方が良かったのでは？」

「そりゃそうだけど……さすがにそこまで強要できないでしょ？」

結局誰かさんは脱いじやったけど」

「うぐう……あれ？ という事は、ひよっとして『騎士』に乗る時も裸で乗るんですか？」

「それなら安心して。『魔像機』操縦用の魔力伝達性の高い専用スーツがあるから」

「なら、初めからそれを着れば良かったんじゃないですか？」

「あ」

思わず生暖かい目で上司を見詰めてしまう明人。機械工学の天才にして希代の魔法師は、どうやらうっかり属性の持ち主らしい。

一人の少女が街を見下ろしていた。

警察や自衛隊による市民の避難が続いている。その流れを三階建ての建物の上からゆっくりと見詰めて、彼女のその朱金の瞳は目的のものを探し続ける。

「……何とも人の多いことよ。この中から我と契約を交わす者を探すのは少々骨よの」

腰よりも長い銀に輝く髪を揺らしながら、少女はゆっくりとそう
呟く。

「だが近い……感じる……我と契約する者……我が主となる者は近
くにいる……」

少女の意識が自己というものを感じてからはや1000年以上。
ようやく己の半身といえる者に出会える。その事が歓喜として少女
の身体を流れる。

そして少女は海を見る。荒れ狂う波の中にいるモノを。

「あやつもやはり己が主を探しているのだろうか」

そう呟くと、少女の身体はふわりと飛翔した。

建物の屋上を足場に、何度も跳躍を繰り返す。少女の目指す先、
何も無い海岸線が広がる海へと。

怪獣が出現する以前に比べて人口的にはさほど変化しなかった城
ヶ崎市だが、外観は大きく変化した。

かつては多くのビルが並んでいた都市部だが、今では背の高い建
築物を建てる事は条例で禁止されている。これは怪獣が出現した際
の被害を少しでも少なくするためだ。

建築物の背が高かろうが低かろうが、怪獣が現れれば破壊され
るという点に相違はない。だが、破壊された瓦礫の大きさが違って
くる。大きな瓦礫が道路に転がれば、それだけ避難が困難になるし、
自衛隊の特殊車両の通行の妨げにもなる。そのために設けられた規
制だ。

そして道路も戦車などの特殊車両の通行を考慮に入れ、主要道路
は道幅も大きくされた。

電線などはすべて地面に埋設し、特殊車両の通行によって電線が切れたりする事故を防いでいる。

信号や道路標識も、道路にはみ出さないよう注意されているし、市内の各所に避難シエルターを設置、住民は怪獣出現の際にはそこに避難するようになっていく。シエルターへの避難をスムーズなものとするため、月に何度か市が主催する避難訓練も行われている。

そして最も変化したのが港湾部である。

この街に出現する怪獣は海からやって来る。怪獣の中には地中から現れたり、空から飛来するものもいるが、過去城ヶ崎市に現われた怪獣は全て海からやって来た。

そのため怪獣自衛隊の基地も港に設置されたし、かつては漁港として利用してきた港湾部を何もなかったの広大な砂浜に変えた。

これは怪獣の上陸を湾部で食い止めるためだ。現れた怪獣を湾部で仕留め、都市部にまで入り込ませないようにする。

そうする事によって被害の拡大を防ごうという怪獣自衛隊の措置である。

だから湾部には余計な建築物を建てずに、遠慮なく戦闘行為が行えるように敢えて何も無い海岸線を作ったのだ。勿論、普段からこの湾部は関係者以外立ち入り禁止区域である。

そんな立ち入り禁止区域に、一人の少年の姿があった。

「やっぱりこの辺から立ち入り禁止になってるか……迂回するのかなり遠まわりだしなあ……」

立ち入り禁止と書かれた看板を前に、少年　和人は腕を組んで考える。

「ま、誰も見てないよな」

にやりと笑うと、和人は看板の横の有刺鉄線の下を器用に潜り抜

けた。

「兄ちゃんごめん。俺はどうしても怪獣が見たいんだ」

この場にはいない兄に手を合わせて誤ると、和人は岬の先端を目指した。途中、兄がいるであろう怪獣自衛隊の基地へと視線を移した時、その光景が和人の眼に飛び込んできた。

「か……怪獣……」

思わず立ち止まってその光景を凝視する和人。

彼の言葉通り、うねり、荒れ狂っていた海の中から、その巨大な異形が姿を現した。

その姿は4つ足歩行の獣型。敢えて言うならアルマジロに似た姿をしている。

ずんぐりとした身体。その身体を支える太くて短い四肢。その四肢の先には人間と同じぐらいの大きさの鋭い爪。鼻先にはサイのような角が突き出し、口元には鋭利な日本刀のような牙がずらりと並んでいる。顔つきは犬科の動物に似ているが、体毛の代わりに全身を覆うのは、アルマジロの甲羅のような装甲。

余裕で40メートルを超える全長を振るわせて海から浜辺へ上陸すると、その怪獣は己の存在をアピールするかのよう大きく咆哮した。

03・巨人（後書き）

全部で20話ちよっとの予定です。

最後までお付き合いしていただければ嬉しい限りです。

よろしくお願いします。

04 - 巨鳥

基地内はより一層緊張を増した。

「目標出現！ 目標出現！ 戦車隊は発砲準備！ 戦闘ヘリ隊は緊急発信！ 医療班、整備班は緊急事態に備えて待機！ 繰り返し！」

目標出現

基地に流れる放送が何度も危急を伝える。その放送を聞きながら白峰明人^{しほみね あきと}三等怪尉は、専用の魔力伝達スーツに着替えていた。

「急いで白峰くん！ そのスーツに着替えたら『騎士^{ナイト}』のコクピットに向かつて！ コクピットの中で最後の調整を行うわ！ それが終われば行くわよ！ 覚悟はいいわねっ！？」

更衣室の外からがなりたてている上司の声を聞きながら、明人は着替えを終えて更衣室から飛び出した。

更衣室の前でシルヴィアと別れ、明人は格納庫の紅い騎士の元へと走る。

ものの数分で格納庫に辿り着いた明人は、その勢いを殺すことなくキャットウォークを駆け上がる。そのキャットウォークは静かに立ち尽くす巨人の胸の辺りへと伸びていて、その巨人の胸には一人が通れるくらいの孔が開いていた。この奥こそ、『騎士』のコクピットなのである。

そのコクピットに飛び込んだ明人はちょっと驚いた。彼はロボットのコクピットなのだから、SFや漫画によくあるようなステイックやペダル、そして数多くのスイッチ種類が狭いコクピット内に整然と並んでいるとばかり思っていたのだ。

だが彼の目の前には球状にぼっかりと開いた空間と、その空間の

中央にある身体を固定するためシート、そしてそのシートの前方シートに座った時に丁度両手がくる位置にある二枚のパネルがあるだけだった。

この時になってようやく明人は、戦車や戦闘機の操縦訓練は受けたが、ロボットの操縦方法など何のレクチャーも受けていないことを思い出した。

「ど、どうやって動かすんだ？　こんなシロモノ……」

呆然と立ち尽くす明人の耳に、どこからともなくシルヴィアの声が届く。

「何してるの白峰くんっ！！　早くシートに身体を固定して！　固定し終わったら手前にあるパネルに両手を乗せるのよ！」

「か、カーナー博士っ！？　何処から喋っているんですかっ！？」

「『魔像機』と司令室は魔道パスで繋がっているわ。そのパスを通して会話が可能なの。それより急いで！」

「りよ、了解！」

明人は言われた通り身体をシートに固定する。彼が身体を固定し終わると、球状の壁面から何本ものコードが伸びて来て、魔力伝達スーツの各所に設置されたコネクタと接続された。

「『魔像機』と白峰三尉とのリンク完了！」

「賢者の石、魔力精製開始！」

司令室では、シルヴィアの傍らに控える二人のオペレーターが明人と『騎士』の状況を次々と報告していた。このオペレーターたちはシルヴィアの弟子とも言うべき存在で、れっきとした魔術師である。

「白峰くん！ これから最終調整に入るわ！ いい？ しつかりイメージして！ あなたの内側にある魔力を外へ引き出すの。そうね、井戸の水をポンプで汲み上げるようなイメージよ！」

魔術とはいわば、イメージを具現化させる技術である。つまり想像の産物にしか過ぎないものを、現実に出現させるのだ。

この際、イメージを固定させるために必要とされるエネルギーが魔力である。

魔力を引き出すと言われても今ひとつ要領を得ない明人であるが、何とか言われた通りにイメージする。やがて明人の意識は、自分でも気付かないうちに己の内側へと入り込んでいった。

自分の中へと入り込んだ明人は、不意にあるものに触れた。それはまるで巨大な岩のように硬く、重く、どっしりと彼の内側に存在していた。

その岩に触れた途端明人は瞬時に悟った。この岩こそ、自分自身の魔力であると。

先程シルヴィアは、ポンプで井戸水を汲み上げるイメージだったが、明人はこの岩をポンプで汲み上げる訳にはいかないような気がした。だから彼は、その岩を削り取るようなイメージを心の中に描いてみる。

「白峰三尉より魔力の放出を確認！」

「白峰三尉の魔力量、徐々に増大しています！」

「な、何よ、この数値……」

明人が放出する魔力が表示されているモニターを見て、シルヴィアは驚きを隠せないまま震える声でぼそりと呟いた。

「こ、この数値……とても今日初めて魔力を扱う人間に出せる数値

「じゃありません！」

「し、白峰三尉って一体……」

シルヴィア同様、二人のオペレーターたちも驚愕に目を見開いていた。

「白峰くんの才能が飛び抜けているのか、白峰くんが内包する魔力が予想以上に大きいのか……どちらにしても、これは嬉しい誤算だわ」

歡喜に顔を綻ばせながら、シルヴィアは傍らに立っていた壮年の男性に振り向く。

「権藤司令！ この数値なら 行けます！」

彼女の言葉に、この怪獣自衛隊城ヶ崎基地司令官、こんどう しげあかししょう権藤重夫怪将はゆっくりと頷いて口を開く。

権藤は、低く、腹に響くような渋い声で騎士の目覚めを告げる。
そしてその言葉に従って真紅の騎士が今、目覚める。

「現れたわね！」

服を脱ぎ終えて全裸になった茉莉は、海から現れた怪獣に厳しい視線を向けると、そのままの姿で岬の先端へと走り出した。

「行くわよベリルっ……！」

茉莉は走る自分と並行するように飛んでいる、鳥のような奇妙な生き物にそう叫ぶと、そのまま岬から海へと身を踊らせた。

海へと真っ直ぐに落下する茉莉の白い裸身。だがその身体は海に届く前に、碧の光に包まれた。

碧の光球は、重力に逆らうようにふわりと浮び上がると、そのままぐんぐんと速度を上げて飛翔する。今正に海岸線に上陸を果たそうとしている、四つ足の怪獣へと。

海岸線に展開した戦車隊は、姿を現した怪獣に向かって攻撃を開始した。

だが今回現れた怪獣は、特別外皮が分厚いタイプらしく、戦車砲の集中砲火もさほど効果がないようだった。

「な……何だよ、あのアルマジロモドキ……戦車砲が通用しないのか……？」

岬の先端に向かう途中、和人は思わず立ち止まってその光景を見詰めていた。

和人の視線の先、次々と浴びせられる戦車砲を煩わしく感じたのか、怪獣は一度咆哮を上げるとその大きく開いた口を戦車隊へと向けた。その口の中、僅かな光がちらりと輝いたのが、遠く離れた和人からも確かに見えた。

「ま……拙いっ！！ 炎を吐く気だっ！！」

勿論その行動は戦車隊も気が付いた。戦車隊は慌てて散開して逃げようとするが、機動性に劣る戦車では回避は間に合わなかった。

ごうごうという音と共に、真紅の炎が怪獣の口から吐き出された。

炎は真っ直ぐに伸び、逃げ惑う戦車の一台をその灼熱の腕を伸ばして捕える。熱い抱擁を与えられた戦車はあっという間に真っ赤になり、どろりと飴のように溶けたかと思うと、轟音と共に爆発した。

怪獣は大きく息を吸い込むと、再び炎の洗礼を与えるべく逃げ惑う獲物に狙いを定めた。

羽虫の羽音のような音とともに、その騎士は目を覚ました。それまで暗く閉じたようだったその瞳に光が宿る。

それと同時に、それまでただ球状の空間でしかなかった明人の周囲に、格納庫の光景が映し出された。

「成る程……全方位モニターってやつか。原理は解らないけど、視界は良さそうだ」

その騎士の中で和人は、自分の周囲を見渡しながら呟く。

「いい？ 白峰くん。今から『騎士』の動かし方を説明するわ。『騎士』とあなたの魔力の波動パターンのシンクロは既に完了。後は実際に動かすだけよ」

「了解！ で、どうやればいいんですか？」

「さっきも言ったでしょう？ 魔力はイメージよ。自分の動きを『騎士』が追従するイメージを描きなさい！」

明人は言われた通りにイメージする。自分が足を動かして歩くとその動きを『騎士』がトレスするようなイメージ。すると『騎士』は実際に足を上げて一歩前へ踏み出した。

「……全く、信じられないわね。こんなにもあっさりとイメージを展開できるなんて……」

ゆっくりと歩き出した『騎士』を見て、シルヴィアは驚嘆の溜め

息を吐く。

シルヴィアは実際に『騎士』を起動させても、数歩歩く事ができれば良いだろうと考えていた。明人には出撃するよう匂わせたが、実戦など以ての外だと思っていたのだ。

イメージを展開すると言うは容易いが、それを行うとなるとそうはいかない。人間の脳は目で見た「現実」を重要視するようにできているので、その「現実」を「想像」で書き換えることは極めて難しいのである。

その「現実」を「想像」で書き換える事こそが魔術なのである。

だが、明人はそれをあつさりとしてのけた。

ぎこちなく、よたよたと歩いている『騎士』を見詰めながら、シルヴィアは明人の秘めた才能に驚きを通り越して呆れていた。

もし明人が本格的に魔術の修行を行うなら、おそらく自分をも凌駕する魔術師となるだろう。それだけの才能と資質を、シルヴィアは明人に感じ取っていた。

「シルヴィア師！」

そんなシルヴィアの耳に、オペレーターの切羽詰まった声が響いた。

「か、怪獣がもう一体現れました！」

炎の第二射が放たれようとした時、碧の光球が横から猛烈な勢いで飛来して怪獣に突っ込んだ。

怪獣と衝突する瞬間、碧の光は一際大きく輝き弾けた。そしてその弾けた光の中から姿を現したものがあつた。

全体的なイメージは鳥だ。だが鳥を連想させるのは半身のみ。この半身は獣のようだった。

前半分は白い羽毛に包まれた猛禽。前足も猛禽のそれであり鋭い爪が見て取れ、肩の辺りからは鷲か鷹のような純白の翼が広がっていた。

そして後ろ半分は獅子。力強い後ろ脚は薄茶色い獣毛に覆われていて、先端に房のように毛の生えた尻尾が風に靡くように揺れていた。だが中でも最も特徴的なのは、エメラルドグリーンの双眸だった。

「な……何だよ、あれ……怪獣がもう一匹現れたのか……？」

呆然と眺める和人。彼が見詰める中、二体の巨獣は激突した。海から現れた獣型の怪獣は40メートル級の大型、そして突然出現した鳥型も同じぐらいの大きさだった。

その二体が激突し、獣型はふつとばされて海に倒れ込み巨大な水柱を築き上げる。

一方の鳥型の方は上空へ舞い上がり、大きく弧を描きながら旋回する。

そしてこの光景を見ているのは和人だけではなかった。怪獣自衛隊城ヶ崎基地の面々もまた、二体の怪獣が激突している光景を呆気に取られながら見守っていた。

「白峰三尉っ！！ 『騎士』の出撃は見合わせるっ！！ 指示有るまでそのまま待機せよっ！！」

よたよたと『騎士』を歩かせていた明人に、城ヶ峰基地司令官の権藤が響くような声で待機命令を出す。

「ど、どうしてですか司令っ!？」

「状況が変わったのだ。新たにもう一体の怪獣が出現し、先に現れた怪獣と交戦状態に入ったのだ」

「何ですってっ!?!」

「とにかく、これは命令である。指示あるまで待機だ」

「くっ……了解しました」

明人に指示を出した権藤は、続いて他の部隊にも指示を飛ばす。

「展開中の戦車隊に後方へ下がるように伝えろ! あの鳥型が何のつもりで獣型に襲いかかったのか知らんが、取り敢えず出方を見るへり隊の離陸も見合わせる! 代わりに観測用のへりを飛ばせ! 周囲の状況に充分に注意をしてだ! くれぐれも鳥型の起こす突風に巻き込まれるな!」

権藤の指示により、緊急発進を急いでいたAH-1Sに代わって偵察用のOH-6Dが離陸の準備に入る。

その他にも細々とした指示を出すと、権藤は隣に控えるように立っているシルヴィアに意見を求めた。

「カーナー博士はどう思われますかな? あの鳥型について」

「もしかして例の件ですか? 数ヶ月前より数例報告されている、怪獣と戦う怪獣が現れたという」

このシルヴィアの問いかけに、権藤は黙って頷いた。

「本当かどうかは断言できませんが……今の鳥型の行動は、怪獣の火焰から戦車を守ったように私には見えました」

「うむ……やはり博士にもそう見えたか……」

「勿論、偶然の可能性も捨て切れませんが……それより司令、私にはもう一つ気になることがあります」

「ほう。それは一体何かね?」

シルヴィアのこの言葉に、権藤は興味深そうに彼女の顔を覗き込む。

「あの新しく現れた鳥型……あれが西洋の伝説に登場するグリフォ
ンそのままの姿だということですよ」

05 - 激突(前書き)

拙作をお気に入り登録して下さった方がおられました。

ありがとうございます。とてもうれしいです。

今後も頑張っつて書きを書いていきたいと思ひます。感想などもいただけると、更に感謝です。

05 - 激突

上空を舞いながら、茉莉は眼下の海に倒れた怪獣を見下ろしていた。

彼女の意識は今、空をゆっくりと旋回する鳥型怪獣の中にあつた。

（あれで終わり……な訳ないよねベリル？）

（勿論だ。あの程度で倒せるようなら苦労はない）

自身の意識に直接語りかけるようなベリルの声に、茉莉も頷く
尤も、彼女の肉体はベリルと融合しているので頷いたつもりだけ
だが。

そして一人と一体の考えが正しい事を証明するように、獣型が起き
上がったその首を空を舞うベリルに合わせるように巡らせる。

そしてその口を開くと、ベリルに向かって火焰を吐きかける。

（炎が来るわっ！！ 避けるわよベリルっ！！）

（承知）

茉莉の指示通りにベリルが動く。茉莉の指示とベリルの動きには
タイムラグはない。茉莉と融合しているベリルの身体は、茉莉の思
い通りに動いてくれる。

（このまま急降下して、すれ違いざまに爪で切り裂いてやるわ！）

（だがあいつの表皮はかなり厚いぞ？ 爪では有効打に成り得ん）

（やってみなくちゃ解らないでしょっ！！）

ベリルは茉莉の言葉通り急降下を開始する。次々と吐きかけられ
る火焰を躲しながら、茉莉とベリルは猛スピードで獣型に接近する。

獣型とやや距離のある地点に急降下すると、ベリルはその速度を殺す事なく海面すれすれに水平飛行に移り、そのまま獣型にぐんぐん迫る。

(これでもくらえっ!!)

ベリルは獣型とすれ違いざまにその鋭い鉤爪を揮う。だがその鋭い爪も、戦車砲の集中砲火にも耐えた獣型の表皮を僅かに削ったに過ぎなかった。

(かったいわねっ!! どういう身体してるのこのアルマジロモドキはっ!?)

(だから言っただろう)

(こんなに硬いなんて思わなかったのっ!!)

再び上昇しながら、茉莉は次の手を考える。

(こっとなつたら、雷弾しかないけど……)

(だがこんな場所で雷弾を使えば、周囲の海にどんな影響が出るか判らんぞ?)

(そつよねえ……)

ベリルの最大の武器である雷弾。だが、身体の半分が海の中にある獣型に雷弾を使えば、海に電気が流れてどんな影響が出るか想像もつかない。

港に停泊中の怪獣自衛隊の艦艇にも何らかの被害が出るだろう。茉莉が考えている間も、獣型怪獣は次々と炎を浴びせかけてくるが、上空を旋回するベリルには届かない。

(ねえベリル……あいつを持ち上げる事できる?)

(ぐ……うううう……！)

背中に走る激痛を茉莉は歯を食いしばって堪える。ベリルと融合している茉莉は、ベリルの受けた怪我や痛みをも共有してしまうのだ。

(も……げんか……い……)

翼を支える筋肉が悲鳴を上げる。背中に受け続けている傷も無視できる程軽いものではない。

(ベリル……っ！！ 今からこいつを放り投げるから……いいわねっ！？)

(承知)

ベリルは上空で大きく身体を揺ると、獣型を放り出す。当然獣型は重力に引かれて落下を開始する。

(海に落ちるまでに決めるわ！)

茉莉の言葉が終わるより早く、ベリルの周囲の空気が帯電を始める。

ぱりぱりとアルミホイールを丸めるような音が響き、電気が徐々にベリルの前方の空間に集中する。

集まった電気は球状になっていく。その電気の球が一定の大きさになると、ベリルは落下している獣型目がけてその電気の球 雷弾を打ち放った。

正に雷鳴。轟音と共に獣型に飛翔する雷弾。だがその雷弾が獣型に命中する直前、獣型に変化が生じた。

ぱきりという音と共に獣型の背中が割れる。そしてその割れ目か

らばさりと広がるものがあつた。

それは翼。まぎれもない翼だつた。獣型は蝙蝠のような翼を広げると、すうと空を滑って飛来する雷弾を回避した。

いや、それは正確には翼というよりはムササビの飛膜に近いのだらう。獣型の翼には自身を支えるだけの力はなく、空を自由に飛ぶというよりは滑空するのが精々のようだ。

(う……うそ……あんなのあり?)

(まさかあのような翼を隠し持っていようとはな)

(感心しないで追うわよ!)

(いや……それは無理だ)

(どうし……うぐうっ!)

突如思い出されたように背中に激痛が走つた。先程獣型に切り裂かれた背中への傷は、このまま飛行を続ける事が困難な程のダメージを与えていた。

茉莉が痛みを堪えているうちに、獣型の怪獣はゆうゆうと空を滑り、城ヶ崎市の沖合いの海に着水すると、そのまま海底深く沈んでいった。

「偵察ヘリより通信。獣型怪獣の反応、消滅したそうです」

オペレーターの声に、権藤はむうと一声唸る。

「逃げたようだな……アルマジロンは」

「あ……あるまじ……ろん……?」

権藤の零した言葉に、隣に立っていたシルヴィアの眉が不満げに寄せられる。

「あ、あの司令……その『あるまじろん』というのはもしや……」
「ああ。先程の獣型のことだよカーナー博士。あのごつごつとした外皮がアルマジロみたいだっただろう。以後、先程の獣型怪獣をアルマジロンと呼称する。気に入らんのならアルマジエーロにするが？」
「……アルマジロンで結構です……」

権藤重夫怪将。第一号怪獣出現以来、数々の怪獣と戦ってきた誰もが認める歴戦の勇者。

だがそんな歴戦の勇者のネーミングセンスは、ちよっぴり斜め上にずれているようだった。

怪獣の呼称の命名権は、現れた土地の管轄の怪獣自衛隊の最高責任者になるので、これには誰も文句を言えないのだ。

「ところでカーナー博士。先程あのバードンが西洋の伝説上の怪物とそっくりな事が気になると言っていたが、それはどういう意味かね？」

「グ・リ・フォ・ン、です、司令」

シルヴィアは、権藤の『バードン』という単語を否定するようにわざと強く誇張するようにゆっくりと言う。

「私気がなったのは、今まで現れた怪獣は現存する生物と似通った箇所はあるものの、見た事も聞いた事もない姿をしたものばかりでした。それなのにどうしてあのグリフォンだけは、想像上とはいえ既存の怪物の姿をしていたのでしょうか？」

「では博士はあのグリフォンが、他の怪獣とは違う存在であると考えてるのかね？」

「推論でさえない思いつきに過ぎませんが。ですが先程の行動を見

て、あのグリフォンは明らかに他の怪獣と敵対していると私には思えるのです。司令はどう思いますか？」

「……少なくとも現時点ではあのグリフォンは、何らかの理由で他の怪獣と敵対していると考えていいだろう。だが、いくら現時点で他の怪獣と敵対していようが、いつ何時人間にその牙を向けるか判らん。軽率に噂のように味方と考えるのは危険だな」

「そうですね。あのグリフォンがどうしてもして他の怪獣と敵対しているのかが判ればいいのですが……」

「今度現れたら、話しかけてみるかね？」

「あら、悪くありませんわね、その提案」

二人は顔を見合わせてくすくすと笑う。

「それよりどうだね？ 『騎士』……いや、白峰三尉は？」

「ええ、彼の素質ははずば抜けています。もう少し魔力を扱う修行を行えば、『魔像機』を自在に操れるようになるでしょう」

「それでは引き続き、博士には白峰三尉の指導をお願いします」

「はい。了解しました」

敬礼をしながらそう答えたシルヴィアは司令室を後にする。彼女の足は、再び騎士が眠りについた格納庫に向かっていた。

獣型 後にアルマジロンと怪獣自衛隊が呼称を発表 が消えた海を和人は呆然と眺めていた。

「何だったんだ、あの鳥型。あいつが毅士が言っていた、人間の味方をする怪獣って奴なのか？」

そう考えた時、和人はある事を思い出した。

「し、しまったっ！！ 毅士に怪獣の写真を撮るように言われてたっけ。やべえ、二匹の怪獣の戦いに夢中になって写真撮るの忘れちゃった！」

写真という「研究資料」を得損ねた毅士が、静かに、そして深く怒る姿を想像して和人は思わず震え上がった。

「やべえぞ……あいつ滅多に怒らないけど、こと怪獣が絡むと人が変わるからなあ」

そう言って辺りをきよろきよろと見回す和人。写真の変わりに何か、毅士の「研究資料」になるような物がないかと思ったのだ。

そんな和人の視界の隅を、何かが横切った。

「何だ？ 今の……」

改めて和人が振り向けば、それは小さな光だった。碧に輝く小さな光が、こちらに向けて飛んで来るようなのだ。

「何だあれ？ UFOか？」

和人が注視していると、その碧の光は間違いなくこちらに飛んで来る。碧光は徐々に近付いてくると、ふらふらと空を漂いながら岬の先端部分に降りたようだった。

「……何だろあれ……ひよっとすると、何か毅士が喜ぶようなものが手に入るかも知れないな……行ってみるか」

和人がそう思って駆け出そうとした時だった。彼の目の前にふわりと舞い降りたものがあった。

「 見つけた 」

和人の眼前に舞い降り、そう呟いたのは一人の美しい少女だった。年齢は和人と同じか、少し年下といったところだろうか。

腰よりも長く伸ばされた月の光を集めたかのような銀の髪が、海から吹く風にゆらゆらと揺れている。

そして驚く和人を見詰める朱金の瞳は、喜びに打ち震えるかのようには潤んでいた。その細い身体をチャイナ服のようなデザインの黒い服で覆い、その黒い服から覗く手足は服と対象するかのようには白かった。

「 ようやく見つけた 我が半身よ。 我が主よ 」

震える声が再び零れた。その震えは間違いなく喜悦によるものだ。

「 あ、う、え、ええっ？ 」

混乱する和人の前で、その少女は片膝を着いて頭を垂れた。

「 今日この時より、我が身、我が命、我が魂、如何なる時も主と共にあるであろう。主の命あらば我は如何なる敵をも打ち砕こう。主が求めるならば我は全てを捧げよう。さあ我に名を与えよ。さすれば契約は交わされん 」

謳うように言葉を続ける少女に、和人は戸惑いながら話しかけた。

「 あ、あのさ、人違いじゃないかな？ 俺はそんな大層な奴じゃないし 」

「 いや、人違いなどでは決してない。我は汝と出会うため、千余年

という時を待ったのだ」

間違いない。電波だ。目の前の少女は何処かから電波を受信している。

飛び切りの美少女だというのに何と勿体ない……和人はそう考えて、深く関わるのは止めた方が良さそうだと判断した。

「あ、お、俺、急ぐから。それじゃ！」

それだけ言って、和人は駆け出した。先程碧光が降りた岬の先端を目指して。

「あ、待つがよい主よ！ ええい、こら、待てと申すに！」

電波少女は走る和人の後を追いかける。しかも少女の走る速度は、普段から早朝に走り込みをしている和人よりも速かった。

「どうしてついて来るんだよっ！？ ついて来るなよっ！！」

振り向きつつそう叫ぶと、少女は不意にぴたりと走るのを止めた。

（ど、どうやら諦めたみたいだな。何だったんだあいつ？ まあ、いいや。それよりも……）

立ち止まった電波少女を後にして、和人はそのまま先程碧の光が降りた地点を目指した走り続けた。

05 - 激突（後書き）

本日の更新。

今週は毎日更新する予定ですが、週末の土日は諸用のため更新できなと思います。

今後もよろしくお願いします。

06 - 求婚

「も　だ……め　」

もう少しで岬に着地する直前、碧の光は弾けた。

そして光の中から、全裸の茉莉まつりと小さな姿に戻ったベリルが現れる。

一人と一体の背中には、酷い傷が刻まれており、放り出されるように着地した茉莉は、そのまま突っ伏すように倒れ込んだまま力尽きて気を失った。

倒れた茉莉の背中からは、赤い鮮血が溢れ出して周囲に広がっていく。

「いかな。このままでは……」

同じように傷付きながらも、ベリルの方にはまだ余裕がありそうだった。

ベリルは何とか茉莉の身体を移動させようと努力するが、今のベリルのサイズでは人間を動かす事は不可能のようだ。

「拙いな。このまま放置しては茉莉は……む？」

その時ベリルの知覚は、この場所に近付いてくる存在がある事に気付いた。

「どうやら人間がやって来るようだな。ならばその人間に任せるてみるか……傷自体は、私が茉莉の内側から癒せば回復も早まるっ」

ベリル小さな姿がすうと消え去る。そしてベリルが姿を消してし

ばらくすると、一人の少年が岬に姿を現した。

「え、え、ええええええええええええつ!?!」

思わず和人は叫び声を上げた。岬に到着してみれば、そこには何故か素っ裸の少女が血塗れで倒れていたのだ。

「ど、どうしたら……こういう場合はどうすればいいんだっけ?」

おろおろと狼狽える和人。

「ちくしょう。こんな時に毅士がいれば何か良い案を考えてくれるのに。どうしてこういう時に限っていないんだ、毅士の奴」

この場にいない友人の愚痴を零した時、突如電子音が辺りに響き渡った。

「な、何だ　　つて、俺の携帯か……!　　こ、この呼出し音は毅士つ!?!」

丁度今考えていた友人からの電話に、和人は慌てて携帯を引っ張り出す。

「た、毅士っ!?!　丁度良かったっ!!　怪獣と怪獣が戦って、碧の光が飛んで来たと思ったら電波な女の子が現れて、岬に辿り着いたら裸の女の子が倒れて血塗れなんだよっ!!」

『昼間っから何夢見ているのだ、おまえは?』

相変わらず冷静な毅士の声を聞いて、和人はようやく落ち着きを

取り戻した。

「い、いやだから、夢じゃないんだよ！俺の目の前で裸の女の子が瀕死なんだ！ どうしたらいい？」

『取り敢えず、状況を説明しろ』

毅士の言われて、和人はこれまでの事を説明した。

「きゅ、救急車とか呼んだ方がいいかな？」

『いや、それは拙い。おまえは今、立ち入り禁止区域に指定されている場所にいるんだろ？ しかもその管理は怪獣自衛隊だ。下手をすると単なる不法侵入罪だけではなく、スパイ容疑まで掛けられかねん。まあ、明人さんがいるからその辺は大丈夫だと思うが、だが逆に明人さんに要らぬ迷惑がかかることになる』

「そ、そりゃあ拙いな。兄ちゃんに余計な迷惑はかけたくない。じゃあ、救急車だけ呼んで俺は逃げるってのはどうだ？」

『いや、そんな事したら、その少女が保たないかもしれん。実際に傷を見た訳ではないから断言はできんが、おまえの説明を聞く限りではかなり酷い怪我なのだろう？ 早急に手当てをしないと命にかかわるやも』

「じゃあどうしたらいいんだよ、毅士いつ!？」

『すぐに迎えに行く。その後二人でその少女を安全な場所まで運ぼう。だから僕が到着するまでに応急手当をしておけ。そうだな、取り敢えず止血だけでもしておくんだ』

「おう、判った！ 急いで来てくれよ！」

和人は電話を切ると、少女の傷を調べ始めた。幸い少女は俯せに倒れているので、傷の様子は容易に見る事ができた。

「何か包帯の代わりになるもの……」

和人はスポーツバッグが一つ、すぐ近くに置いてある事に気付いた。おそらくこの少女のものであるうそのスポーツバッグの口は開いていて、無造作に服や下着のようなものが突っ込まれているのが見て取れた。

「……まさかこのバッグを漁る訳にもいかんよなあ……」

和人は持っていたハンカチで傷の周りを拭くと、制服の下に着ていたTシャツを脱いで、少女の身体に巻き付けるように結びつけた。手当てのために抱きかかえた際、眼に飛び込んでしまった少女のやや控えめな胸の膨らみや、股間の翳りにどきまぎしたりもしたが、何とか和人が手当てを終えた丁度その時だった。

「う……う……ん……」
「え？」

少女が呻き声を上げて覚醒する。そしてその声に思わず振り向いた和人と、少女はばっちり目が合ってしまった。

「」
「」

思わず見詰め合う二人。

裸の少女を抱きかかえる上半身裸の少年 状況だけ見ればそう見える。あくまでも状況だけ見れば、だが。

「……き、気がついたか？」

「な」

「は？」

「何してんのよこの変態いいいいいいっ！！」

少女の右ストレートが和人の顎を見事に打ち抜いた。

毅士がその場に着くと、そこは修羅場だった。

「これは一体どういった状況なのだ？」

和人の話を聞いた毅士が急いでこの場に駆けつけると、何故か和夫と見知らぬ少女が言い争っていた。

この見知らぬ少女こそ、先程和人が言っていた「裸で倒れていた少女」だろう。そこまでは毅士にも容易に想像がついたが、なぜその少女と和人は言い争っているのだろう。しかもその言い争いの内容が

「だ・か・らっ！！ キミは大人しくボクと結婚すればいいのっ！
！」

「どうして今日会ったばかりのおまえと結婚しなくちゃならないんだっ！？」

というものだったから、余計に毅士には状況が読めなかった。

時間は少し巻き戻る。

「何してんのよこの変態いいいいいいっ！！」
「ぐっはあぁっ！！ い、いきなり何しやがるっ！？」

打ち抜かれた顎を押さえながら、和人は突如この暴拳に及んだ少

女を睨み付ける。

その少女はというと、和人から素早く距離を取り、その際しっかりと確保したスポーツバッグを両手で胸に抱きしめるた状態で、こつちを険のある目で見詰めていた。

「人が気を失っていたのをいい事に、一体全体何しようとしていたのよっ!？」

「俺は血塗れで倒れていたおまえを助けよう……そっぴゃおまえ、怪我大丈夫か？」

このような状況でも、思わず相手の事を気にする和人。彼のこんなところが友人である毅士あたりに、「お人好し」と称されていたりするのだが。

「へ？ 怪我？ あっ！ い、痛たたたっ!？」

どうやらこの少女、自分の怪我の事を忘れていたらしい。

「だ、大丈夫か、おい？」

「だ、大丈夫よ、これくらい……くうっ!!!」

痛みのせいかわらうと態勢を崩す少女。その様子を見て、思わず和人は少女に駆け寄って支えようと手を伸ばした。

ふによ。

「あ、あれ？」

「っ!!!」

少女の肩を支えようとした和人の手はどういう訳か、少女の身体と抱き抱えられたスポーツバッグとの間にすりりと滑り込んでしま

った。

結果、和人の掌は少女の決して豊満とは言えない胸の柔肉に、掬い上げるように触れしまった。ふによつと。

「こ……こ、この変態いいいいいつ！！ 何処触ってるかあああああああつ！！」

少女は抱き抱えていたバッグを和人に投げつけた。

「ご、ごめんつ！！ で、でも今のは事故 うごつ！？」

投げつけられたバッグは、和人の顔面に命中した。その際、がっんと何か硬い物がぶつかる音が響いた。

「ちよ、ちよつと待てえええええつ！！ 一体何が入ってやがるそのバッグっ！？」

「飯盒」

「どうしてそんな物が入ってるかなあつ！？」

「何言ってるの？ 飯盒は野宿の時に必要じゃない」
「……………」

なに当然な事聞くのかな？ という顔をしてさらつと答える少女。そんな少女の態度に、和人は怒るのも馬鹿らしくなってきた。そうしてちよつと頭の冷えた和人は、ようやく今の少女の状態に気付いた。

「あー、その、何だ。色々突っ込みたい事は山程あるが えーと…………」

和人は少女から視線を逸らして、言いにくそうに言葉を続ける。

「何よ？ 言いたい事があるならはつきり言いなさいよ！」

「じゃあ端的に言っけど……。見えてる」

「へ？」

和人に言われて、少女は今の自分の姿に改めて気付いた。

少女の身体には、背中への傷の出血を抑えるために和人のシャツが巻き付けてあるだけ。それは正面から見ると、少女の腹の部分でシャツの袖同士が結びつけてあるだけだから、肝腎な所は全然隠されていない。しかも、唯一少女の身体をカバーしていたスポーツバッグを、少女は先程自ら投げ飛ばしてしまった。

つまり色々とまる見えだったりするのだ。具体的にはおっぱいとか。

そして今の自分の姿に気付いた少女は、腕で身体を隠しながら、ぺたんとその場に座り込んで泣き出してしまった。

「うとうとう……今まで誰にも見せた事なかったのに……どんなにお腹がすいてひもじくても、その一線だけは許さなかったのに……しかも胸まで触られたし……」

「あ、あの、どうした？ 傷が痛むのか？」

突如座り込み、嗚咽を洩らし始めた少女に驚いておろおろする和人。

そんな和人をよそに少女はしばらく泣いた後、涙に潤んだ眼で和人をきつと睨み付けた。

「決めたわ……！」

「き、決めたつて……何をさ？」

この時、何やら嫌な予感が和人の全身を駆け巡った。言うなれば、雄の本能を感じ取った危機感。少し前に彼の兄が感じた危機感と同様のものを、和人はこの時感じていた。

「キミ　ボクと結婚して！」

「何いいいいいいっ!?!」

「だってあなたはボクの全てを見たんだから、男として責任を取るのが当然でしょっ!?!」

「は、裸を見たから結婚しろだなんて、何時の時代の人間だよおまえっ!?!」

似たような事を自分の兄も言われていたなどと、この時和人は思いもよらない。

「ぐだぐだ言わないっ!!　男ならきちんと責任とってよね!」

「だから、どう考えたって俺に責任なんてないだろうがあっ!?!」

こうして二人の言い争いは、毅士が到着するまでしばらく続けられたのだった。

06 - 求婚（後書き）

本日分の投稿。

副題をつけるなら、「白峰兄弟の女難」でしょうか（笑）。

「今ひとつ状況が飲み込めんが……結婚おめでとつというべきなのか？ 友として」

「縁起でもないこと言つなよ毅士っ!？」

「キミ、誰？ うちの旦那のお友だち？」

「旦那違つっ!! 旦那言つなっ!!」

「結構仲いいな、おまえたち」

妙に息の合つた和人と少女に毅士は少し感心した。

ちなみに毅士が来るまでに、少女は改めて傷の手当てをして服を着ている。

その傷の手当てをする際、当然のように手伝わされた和人は、少女の傷が最初に見た時よりも酷くなくなっているように感じた。その事を当の少女に尋ねたところ、

「うん。ボクは契約者だからね。傷の治りが早いんだ。ベリルも頑張ってくれているし」

と、和人にはよく理解できない事を言っていたが。

相変わらずぎゃいぎゃいと騒ぐ和人と少女を見て、毅士は少々うんざりして改めて声をかける。

「その辺にしておいたらどうだ？ ここが怪獣自衛隊の管理する立ち入り禁止区域だという事を忘れたのか？ 見つかる前に立ち去った方が無難だぞ。和人とそれから……」

「あ、ボクは茉莉。黒川茉莉。くろかわ まつり 3月生まれの16歳だよ」

「茉莉くん、でいいか？ 僕は青山毅士。あおやま たけし こちらの和人とは腐れ縁が続いている友人だ」

「うん。ボクも毅士くんって呼ばせてもらっわ。ところで、旦那の名前は？」

「旦那って呼ぶな！俺は白峰しらみね和人かずとだよ。そーいやお互い名乗っていなかったっけな」

「おいおい和人。名前も知らぬ相手と結婚するつもりだったのか？お人好しもそこまでいくと、もはや呆れるしかないぞ」

ふうと溜め息を吐いて眼鏡を指で押し上げる毅士。

「だからそんなんじゃないってっ！！」

「ふうん、和人、ね。じゃあ旦那の事はこれから和人って呼ぶね」

「毅士には『くん』で俺は呼び捨てかよ？」

「いいじゃない、ボクたちは夫婦なんだし。ボクの事も茉莉って呼び捨てにしているから」

「夫婦違っつ！！夫婦言っつなっ！！それにどうせ結婚するんなら、もう少し胸のある女の子の方が」

「ん？茉莉くんは小さいのか？」

言わなくてもいいことを思わず口走った和人に、毅士が律義にこれまた入れなくてもいい突っ込みを入れる。

「おう、そりゃあ見事な貧乳」

「いくら仲のいい友だち相手とはいえ、妻のトップシークレットをさらっとならば亭主がどこにいるかあああああっ！？」

どうやら和人と茉莉の言い争いはもうしばらく続くようだ。

毅士は天を仰いで、深々ともう一度溜め息を吐いた。

『騎士ナイト』から降りた明人は、不意に脱力感に襲われてぐらりと態

勢を崩した。

「大丈夫？ 白峰くん？」

バランスを崩した明人を支えたのはシルヴィアだ。彼女は必要以上
に身体を密着させるようにして、明人の身体を支えてた。

（へえ。細く見えるけど、意外と引き締まっているわね。自衛官な
んだから日頃トレーニングしているから当然か。……この身体に抱
き締められるも悪くないわね。きゃっ）

倒れそうになった自分を支えてくれたシルヴィアから、何故か妖
気のようなものを感じ取った明人。

すぐさま彼女から離れようと思ったのだが、身体に力が入らずに
思ったように動いてくれない。

ぶっちゃけ、自分の胸に押しつけられている彼女の豊かな柔肉の
感触に、雄の本能が離れるのを拒否している部分もあるのも事実だ。

「その脱力感は、いきなり魔力を扱った反動よ。しばらく安静にし
ていれば収まるわ」

足元の覚束ない明人に肩を貸しながら、シルヴィアは格納庫を後
にする。

「魔力の扱いに慣れれば、こんなこともなくなるわ。これからは魔
力を扱う修行もしなくちゃいけないわね」

「……お、お願いします……」

格納庫の近くにある休憩所のベンチに明人を座らせると、シルヴ
ィアは飲み物を求めて自販機へと向かう。

「という訳で、今日の白峰さんの勤務はもう終わりになったから
熱いコーヒーの入った紙コップを二つ手にして、明人の所に戻っ
たシルヴィアは辛そうに肩で息をする明人にそう告げた。

「は、はい？」

今日の明人は当直要員で、明日の早朝まで勤務のはずだった。だ
が何が「という訳」か判らないが、その予定をこの上司が変更した
ようだ。

戸惑う明人に、シルヴィアは何処か妖しい笑みを浮かべて言う。

「だからこれから 私の部屋に来ない？」

取り敢えず、この場から離れる事で意見が一致した三人。だが、
立ち入り禁止区域から抜け出した後、これからどうするかでまた揉
めた。

「僕たちは学校に一度戻らねばならんが、茉莉くんはどうする？」

「勿論、和人たちについて行く」

「駄目だっ！ 学校は部外者立ち入り禁止！」

「いや、そんな事はあるまい。怪獣が出現した今日は、校内の避難
シエルターに近隣の住民も避難しているはずだ。その中に紛れ込ん
でしまえば判らないだろう」

「殺士いっ！！ おまえはどっちの味方なんだよおっ！？」

和人の慟哭にも動じず、殺士は事実を告げたまでだとあくまでも
冷静。

そうだよ、おまえはそういう奴だよと、地面に「の」の字を書きながら愚痴っていた和人は、その時重大な問題を思い出した。

「そ、そうだった！　なあ毅士、避難する途中でこっさり抜け出したの、やっぱり先生にばれてる……よな？」

「当然だろう。いくら近隣の市民も一緒に避難して混雑しているとはいえ、点呼を取らないはずがない。尤も、お互い後で説教を貰うのは覚悟の上で抜け出してきたのだろう？」

「そうだけど……やっぱり、叱られると判っていると気が重いよなあ……」

和人ははあーと一つ溜め息を吐くと、気を取り直して立ち上がった。

「仕様がねえよな、自業自得なんだから。それじゃあ説教を貰いにいきますか」

「話は纏まった？　それじゃあ行こうか」

歩き出した和人と毅士の背に、彼らの後を歩く茉莉がのほほんと声をかける。

「何処へ行く気だ、おまえは？」

「だから和人たちの学校。あ、大丈夫、心配しないで。学校の中には入らずに校門のところまで待ってるから」

振り返って問う和人に、茉莉はのほほんと答える。更に何か言おうとした和人だが、次の茉莉の言葉に何も言えなくなってしまうた。

「それにボク、この街じゃあ他に行くあてないしね」

「え？」

驚く和人に、茉莉はこくと首を傾げる。

「まだ言っただけじゃなかったっけ？ ボク、今日この街に来たばかりなの」
「……あてもないって……今日寝るところとかどうするつもりだったんだよ？」

驚きを隠せない和人の様子を知ってか知らずか、茉莉は軽い調子で続ける。

「どこか住み込みで働けるところを探すか、最悪野宿でもいいかなって。今は寒い季節じゃないからね」

そう言われて和人は思い出した。先程彼女は「飯盒は野宿の時に必要だ」と言っていたのを。

それはつまり、彼女はこれまでに何度も野宿をして来たということだ。

「茉莉くん……失礼を承知で尋ねるが、君は家出でもしてきたのか？」

毅士が茉莉に尋ねた内容は、和人も一番最初に思い浮かんだ事だった。

「まあ、似たようなものかな。ボクの両親、怪獣の被害に遭ってね……運良く……運悪くかな？ ボクだけ助かったの」

和人と毅士の二人は、茉莉の話だけを黙って聞いていた。

「その後ボクは、親戚に引き取られたんだけど、中学の卒業が近付

いた時、その世話になっていた親戚の親父に、『中学を卒業したら働け』って言われて連れていかれたのが、如何わしい風俗系のお店でさ。頭きてその親父殴り倒してそのまま飛び出したの。元々、中学卒業したら自立するつもりだったから別に構わないけどね」

その後はあてもなく各地を転々としていたと、茉莉はその辛い過去を感じさせない明るい調子で言った。

「判ったよ」

「え？」

「判ったからついて来いよ。行くあてないんだろ？ だったらしばらく俺ん家に置いてやる。家は兄ちゃんと俺だけだし、兄ちゃんも宿直なんかで留守がちからさ。その代わり、家事とか手伝って貰うからな！」

言い捨てるようにそれだけ言うと、和人は兄ちゃんに何て説明しよう、等とぶつぶつ零しながら一人で歩いていく。

「和人……どうかしたの？」

急な和人の翻意に、茉莉の方が逆に戸惑う。

「あいつも君と同じなのだ」

そんな茉莉に、傍らに立っていた毅士が告げる。

「あいつのご両親も、君と同じで怪獣の犠牲者でな。あいつにはまだお兄さんがいたが、当時そのお兄さんも進路の関係で遠く離れた土地へ行かなくてはならなかった。家族の思い出が一杯詰った家で、あいつもずっと一人だったのだ。だからきつと茉莉くんの事が放つ

ておけなくなつたのだらうな。全く、相変わらずお人好しな事だ」
「……そう……だったんだ……」
「おっと、この事はあいつには内緒に願う。勝手にこんな事を喋つたとあつては、何をされるか分からんからな」

茉莉は唇に立てた人差し指を当てている毅士に一つ頷くと、一人で行ってしまった和人の後を急いで追いかけた。

そこは腐海としか思えない場所だった。

明人がシルヴィアに案内された彼女の部屋。外観は小綺麗なマンションで、内部も掃除の行き届いた清潔感のある建物だった。

そして彼女の部屋の前まで来て、シルヴィアが鍵　魔術による施錠　を開けた瞬間、明人の目の前に腐海が現れた。

玄関といわず廊下といわず、所狭しと積み上げられたゴミ袋。後に彼女が言うには、回収日に出しても回収してくれないとか。

当たり前である。昨今、可燃ゴミや不燃ゴミ、資源ゴミ等に分類して出さなければ、回収車はそのゴミを回収してくれないのは当然だ。

そこかしこにあるゴミ袋の内容は、その事実を裏付けるように各種のゴミが雑居状態であった。

だが、足の踏み場を何とか確保しながらリビングに入ると、明人は玄関はまだまじであつたことを実感した。

リビングに置かれたテーブルの上には、使つたままの食器やコンビニ弁当の容器、各種空きビンや空き缶などが山積みになされており、ソファには衣服（下着含む）が何着も放り出されたままになっている。

台所も同様で、シンクには洗われていない食器が溜まり異臭さえ放っている始末。床には所構わずゴミが散乱している

この状況を腐海と呼ばず何と呼ぼう。シルヴィアという女性はどう

うやら、片付けるといふ事に弱いタイプらしい。

このような状態の部屋に、よくもまあ他人を呼ぼうとしたものと内心呆れる明人に、シルヴィアはさらっと、

「ちよっと散らかってるけど、気にせず上がってね」

と、言いのけた。

「ちよっと……ですか？　これが……？」

明人は普段からきちんとした生活を心がけている。それは勿論、弟の規範となるためだ。

自分がちゃんとしていなければ、弟に注意する事もできない。その成果かどうか、和人も片付けは人並みにするタイプであった。

そんな明人にとって、目の前の腐海は信じられない。いや、我慢できない。もしもシルヴィアの許可が得られるのなら、片っ端から掃除したい。そんな衝動に明人は駆られていた。

そして当のシルヴィアと言えば、別の部屋に入って「あれー、どこ行ったかなー？」とか「確かこの辺に……」とか言いながら何かを探しているようだ。

おそらくその部屋も、リビングや廊下と同じような有り様なのだろうなと想像しつつ、明人はこの部屋の主が戻って来るまでリビングで立っただま待つ事にした。

しばらくして、何やら荷物を抱えたシルヴァアが戻って来た。

「これが魔力操作の修行に使う道具よ」

そう。今日明人がシルヴィアの部屋を訪れたのは、魔力操作の修行のためだった。決して甘いナニかを期待してのものではない。念のため。

「それで、その道具をここで広げるんですか？」

その道具はけっこうな大きさのようだ。当然、そのようなスペースなどあるはずもないリビングを見回しながら明人が言う。

「そうねえ……少し片付けないと無理かしら……」

「……少し……？」

何処をどう見れば『少し』なのだろう……明人は本気で悩んだ。

「あ、そうだわ！ ベッドの上ならスペースがあるから、ベッド・ルームへ行きましょう」

「べ、べべべ、ベッドおっ!？」

やばい。それだけは絶対にやばい。明人の鍛え抜かれた戦士としての何かが警鐘を鳴らす。

そこだけは決して足を踏み入れてはいけない。入ったら最後、絶対に抜け出せなくなる。色んな意味で。

だから明人は、自分の危機回避能力を信じてシルヴィアに提案した。

「それなら、自分の家へ行きませんか？」

と。

07・兄弟（後書き）

本日の投稿。

毎日読みに来てくださる方々、本当にありがとうございます。とってもうれしいです。これからもがんばります。

ところで作中でちらっと出てきましたが、自衛隊の勤務シフトってどんな感じなんだろう。

和人と毅士が校門に姿を見せると、そこで待っていた茉莉が嬉しそうに二人に駆け寄ってきた。

「待たせちまったか？」

「ううん、さつき着いたところ」

和人と毅士はあの岬からバイクでこの学校まで戻って来たが、バイクは二人乗りのため茉莉を乗せる事ができなかった。だから茉莉だけは、徒歩であの岬からここまで来たのだ。

「道に迷わなかったか？ 茉莉くん」

「うん。二人に学校名教えて貰っていたから、道を尋ねたらすんなり着いたわ。それより、やっぱり叱られた？」

「ああ。こつてり絞られた。今度こんな事したら停学ものだったさ」「まあ、ある程度は言いくるめることに成功したから、こんなものだろう」

実際に和人と毅士の二人は、彼らを咎める教師に、

「俺は将来、自衛官になって怪獣から皆を守りたいんだ！ だから怪獣を間近で見るとは大切だと思ったんだよ、先生！」

「自分も和人と同じです。自分は怪獣の研究者となることを進路として考えています。故に、怪獣を実際に見られる機会は逃したくないのです」

はつきりとそう告げた。別にこれはその場の言い逃れではなく、

二人とも本心からそう思っていることである。

ともかく、二人の妙な迫力に飲まれたのか、教師はそれ以上追求しなかった。

別に二人は決して問題児という訳ではない。二人とも普段は真面目な生徒で成績も悪くない。特に毅士など、成績上位5位から落ちたことのない程だ。

だから二人とも、教師の停学云々はおそらく脅しであろうと推測している。尤も、二回三回と度重なれば話は別であろうが。

「それより早く帰ろうぜ。今日は兄ちゃん、宿直だとか言ってたから毅士も泊まりに来いよ」

「そうさせて貰おうか。今日出現した怪獣の事も色々聞きたいしな」

そう言っただけで歩き出す二人。しばらく歩いた後、和人は茉莉が立ち止まっている事に気付いた。

「どうした？ 早く来いよ」

「ねえ……本当にボクも和人の家に行つて……いいの？」

不安そうに尋ねる茉莉に、和人はどこか照れたような様子で答える。

「仕様がねえだろ？ 成り行きだ、成り行き。それに怪我の事もあ
るしな」

やや顔を赤くしながら、態とそっぽを向いていう和人に、茉莉は嬉しそうに顔を輝かせた。

「うん！ 不束者ですが、未長く宜しく願いますっ……！」

「だから、そういうんじゃないかねえって言ってるだろうがっ……！」

「えー、和人は責任取ってくれないのー？」

「ば、馬鹿野郎、人聞きの悪い事言っただんじゃねえっ！！」
「やれやれ。仲のいいことだ」

怪獣が出現したなど嘘のように、街は既にいつもと同じ営みを始めている。そしてそのいつもと同じ街並みに、三人の声が楽しそうに響いていった。

「か、和人……？」

「に、兄ちゃん……？」

明人と和人の二人は、自宅の前で其々の姿を確認した瞬間氷のように固まった。

それはそうだろう。何故なら、互いに女性を連れて家に帰って来たのだから。

「に、兄ちゃん……兄ちゃんは今日、確か宿直だっと言っていなかっただか……？ それにその綺麗な女の人は……」

「そ、そういう和人こそ……誰だ、その女の子は……？ 兄ちゃん、和人を兄ちゃんの留守中に、女の子を連れ込むような奴に育てた覚えはないぞ……？」

絶賛混乱中の二人に代わって、それぞれの連れの女性たちが口を開く。

「あなたが白峰くんの弟さんね？ 初めまして。私は白峰三尉の直属の上官にあたるシルヴィア・カーナーよ。本来は自衛官じゃないけど、二佐待遇で怪獣自衛隊に招聘されてるの。よろしくね」

「和人のお兄さんですか？ 初めまして！ ボク、和人と結婚する

事になった黒川茉莉っていいです！ 色々と至らぬ点もありますが、よろしく願います、お義兄さん！」

「あ、兄ちゃん……じゃなかった、兄の上官の方でしたか。明人の弟の和人です。兄がいつもお世話になってます」

「へえ、そうか。和人と結婚ねえ。じゃあ君は俺の義妹って事になるのか。俺は和人の兄の明人だ。よろしく っ、けっ……こん？」

ぎぎぎいっと、油の切れた機械のような擬音が聞こえそうな動きで、明人は笑顔のまま茉莉から和人へと顔を向けた。

「こ、こら、茉莉っ！！ いきなり変な事言うなっ！！ ち、違っぞ、兄ちゃんっ！！ お、俺は別に結婚なんて考えてな」

「ううう、ボクの意識がないのをいい事に……ボク、気付いたらすっぱんぽんだったし……全部見られちゃったし……」

「なああああにいいいいっ！？ かあああずうううとおおおおっ！？ お、おまえ……本当にそんなことしたのかあああぁっ？」

わざとらしく両手で顔を覆って泣くフリをする茉莉を見て、明人の表情は笑顔から急転直下180度変化した。さながら大魔神の如く。

「い、いや、その、た、確かに出会った時茉莉は意識もなかったし、裸だったけどっ！！ だからと言って、俺は」

「天地神明に誓って、ボク、嘘は言っていないよ？」

「かあああずうううとおおおおおおおっ！？ お、おまえという奴は……おまえという奴わあああぁっ！？ 一体いつの間にかそんな破廉恥な奴になり下がっちゃったんだっ！？ に、兄ちゃん情けなくって涙出てくらあぁっ！！」

「やれやれ、その辺にしてはどうだ和人、茉莉くん。明人さんも少し落ち着いて。詳しい事は中で話しませんか？」

いきなり繰り広げられた白峰兄弟プラス一名の漫才を、毅士が取り敢えず納める。

和人の事となるとつい暴走しがちの明人を、毅士が宥めるのはいつもの事なので毅士も手慣れたものだった。

そして毅士の言葉に従って、一同は白峰家の中へと場所を移し、お互いの状況説明とあいなつた。

「成るほど……話は分かった……」

白峰家の居間。十二畳ほどの和室で中央に足の短い木製のテーブル、片隅には大き目の茶箆筥と大型だがやや旧式のテレビなどが置かれている。

その中央のテーブルを囲み、明人、和人双方の事情説明を終えると、明人は腕を組みながらそう呟いた。

「あー、茉莉……ちゃん、だったか？ 他に行く所がないというのなら、家に居候するのは構わない」

「ありがとうございます、お義兄さん。でも、自分でこんな事言うのも何なんですけど、本当にいいんですか？ 見ず知らずの他人をそう簡単に居候させても」

「構わないよ。仮に君が泥棒目的でこの家に入り込んだとしても、家には盗られて困るような高価なものはないし」

今は亡き明人と和人の両親が建てたこの二階建の家は、トイレと台所、そして明人と和人の自室以外は和風の造りになっている。特

に彼らの父親がこだわった浴室は昔ながらの木製の浴槽だったりする程だ。

だが白峰家は決して新しい家とは言えない。明人が言う通り価値のありそうなものもないし、現金も殆どは銀行に預金されていて家に置いてあるのは生活費ぐらいだ。

「だから遠慮なくこの家にいていいよ。それに 和人」

じろつと、明人の険のある視線が和人に向けられる。

「何はともあれ、おまえは責任を取らないといかん。事故とはいえ、茉莉ちゃんの裸を見てしまったのだからな」

「な、何言っただよ兄ちゃん！ 今時そんな理由で結婚する奴なんていないってっ！！」

「世間ではそうかもしれない。だからと言って、お前に何の罪もないという訳ではないだろう？ 事実、茉莉ちゃんの裸を見てしまったのだし」

「そ、それはそうだけど……」

「だから、ここは男らしくきつちりと責任を」

なお何か言いたそうな弟に、決定的な決断を迫ろうとした明人は、この時自分を熱く見詰めるシルヴィアの視線に気付いた。

そのシルヴィアの視線は、そう、そうよね、裸を見てしまった以上、ちゃんと責任を取らないとね。ええ、大丈夫、私の覚悟はもう決っているから。うふふふふふふ。と、言葉にならぬ言葉で語りかけていた。そりゃあもう雄弁に。

「い、いや、まあ、に、兄ちゃんも何も結婚しろとは言っていないぞ？ 第一、法的におまえはまだ結婚できないし……だから、ここは婚約……」

シルヴィアの視線は更に語る。ええ、婚約ね。それでも構わない

わ。あ、そうそう、婚約指輪には誕生石が付いているものよ？ ちなみに私は2月生まれだから紫水晶アメジストね。そんなに高い指輪じゃなくてもいいから、ね？ と。そりゃあもう熱弁に。

「で、でもまあ、ふ、二人ともまだ若いし、そんなに結論を急がなくてもいいんじゃないかな？ と、取り敢えず、茉莉ちゃんを居候させる事には兄ちゃん賛成だぞ」

「どうかしたのか兄ちゃん？ 何か変だぞ？」

「な、何でもない。何でもないぞ、うわはははははは」

「何かよく判らないけど、ともかくお世話になります」

引きつった笑みを浮かべる明人に、深々と頭を下げる茉莉。

どうも態度の変な兄に首を傾げる和人だったが、先程聞いた兄の方の事情を思い出して尋ねてみた。

「それで、兄ちゃんの方の訓練って何やるんだ？ 家の中でできる事なのかな？」

「あ、ああ。それはだな……」

その質問に言い淀んだ明人はシルヴィアを見る。『魔像機ゴレム』の事は機密扱いなので、肉親といえどおいそれと話してはならないのだ。

「ねえ、あなたたち。魔術って信じる？」

明人の救助要請に応えて、シルヴィアが逆に和人たちに問いかける。そして彼女の問いに反応したのは、それまで黙って話を聞いていた毅士だった。

「魔術……ですか？ その真偽はともかく、今自衛隊が開発中の新兵器には魔術が応用されているという話ですね」

「き、君！ど、どうしてそれ知ってるのっ!？」

「あくまでも噂です。ネットなどで流れている噂に過ぎません。ですが……」

毅士はちらりとシルヴィアを見ると、すぐに視線を外して言葉を続けた。

「いえ、何でもありません。これ以上は言わぬが花でしょう」

そう言っつて毅士は白々しく呆けてみせる。

ここに至っつて、シルヴィアは自分がうっかかりを発動させたことによく気づいた。そっつと明人の方を見やれば、あちゃあっつてな感じで手で顔を覆っつている。

「ま、まあいいわ。その噂は本当よ」

シルヴィアは開き直っつて認めた。尤も、全てを明かすつもりはないが。

「あー、おまえたち。一応これは機密事項だからな、他言は無用だぞ。大丈夫ですよカーナー博士。和人と毅士なら信用できます。茉莉ちゃんも判っつたね？」

明人の言葉に、三人は神妙に頷いた。

「詳しいことは言えないけど、白峰くんもその新兵器に携わっつていて、そのために魔力に慣れないといけないの。その訓練をするっつてわけ」

「魔力？ 兄ちゃんに魔力なんてあるのか？」

「ああ。それがあるらしいんだよ」

兄弟の会話をよそにシルヴィアは、自宅から持って来た荷物をテーブルの上に広げた。

それは一メートル四方の大きさの羊皮紙に描かれた魔方陣だった。そして羊皮紙の魔方陣と同じ魔方陣を顔の部分に描かれた、画家や漫画家などがよく用いるデッサン人形と呼ばれる人形が数体。

「羊皮紙の魔方陣があれのコクピットだと思って。そして人形の方が身体ね。やり方は今日と同じ。魔力で人形を操るの」

「成る程。あれの縮小版……というか、シミュレーターってわけですか」

早速明人は羊皮紙を床に移動させると、その上に座って『魔像機』を動かした時を思い出しながら意識を集中させる。すると和人たちが見守るなか、テーブルの上の人形がぴくりと震えた。

「う……動いた？」

「しっ！！ 黙ってるよ茉莉！」

「これは……実に興味深いな……」

和人たち三人の見詰める中、人形はどこかきこちなくも、ひよこひよこ歩き出した。

「本当に大したものね、白峰くん。普通、いくら魔力があってもいきなり動かせるものじゃないのに」

「あれに比べたら大きさが全然違うせいですかね？ あれに乗った時程疲れませんよ」

「ねえねえ、シルヴィアさん。それ、ボクもやってみてもいい？」

歩き回る人形を眺めていた茉莉が、シルヴィアに目を輝かせながら

ら尋ねる。

「ええ、いいけわよ。だけど、これは誰にでも動かせるってものもないの。それだけは理解してね」

興味津々といった感じの茉莉に、シルヴィアは苦笑混じりに許可を出した。許可を得た茉莉は、明人と代わって魔方陣の中央に座るとじつと人形を見詰める。

「おいおい、茉莉じゃ無理……え？」

言葉の途中で、和人は驚いて目を見張った。テーブルの上の人形が、明人の時よりも滑らかに動き出したのだ。しかも人形は歩くだけではなく、勢いよく走り出したり、大きくジャンプなどもしている。

だが、これに一番驚いているのはシルヴィアだった。

「ど、どういう事なの……これ……」

彼女の目の前でちょこまかと動き回る人形。これだけの動きをするには、魔力を扱う事に普段から慣れていないところはいかない筈だ。

「ね、ねえ、茉莉ちゃん。あなたもしかして……魔術師なの？」

「ボクが魔術師？ いやだなあ、そんなわけないよ」

シルヴィアの問いをきっぱりと否定する茉莉。呆然とするシルヴィアをよそに、今度は和人がやってみたいと言い出した。

「あらあ？ 和人にできるかしらあ？ 誰にでも動かせるってもの

でもないのよお？」

茉莉が先程のシルヴィアの口調を真似て和人をからかう。ちなみに、シルヴィアの真似は余り似ていなかった。

「兄ちゃんや茉莉にできるのなら、俺にだってできるかもしれないだろ？ まあ、見てろって……で、どうやるんだ？」

がつくりと肩を落としながらも、茉莉が和人にやり方をレクチャーする。その内容は、魔力を扱う事の基本に沿ったものだった。

（茉莉ちゃんって一体何者なの？ 魔力の扱い方といい、その教え方といい……）

和人と茉莉の遣り取りを聞いていたシルヴィアが、そんな事を考え始めた時だった。いきなりばかりと、乾いた音が響き渡ったのだ。

「あ あれ？」

呆然とする和人たち。改めてシルヴィアが見渡せば、粉々になった人形が散乱していた。

「……これは……？」

「あ、そ、その……茉莉に言われた通りにしてみたら、いきなりばかりって……」

狼狽えながらも説明する和人。シルヴィアは、飛び散った人形の破片の一つを拾い上げた。

（これは……魔力の負荷に堪えかねて、内側から弾け飛んだみたいね……）

シルヴィアは改めて和人を見詰める。

(まさか……和人くんには途轍もない魔力が秘められているの……?)

シルヴィアはこっそりと魔術を発動させた。

その魔術は魔力感知。視界の中の魔力を有する者や品物を識別する魔術で、魔術の中でも初歩ともいえる魔術である。

更にこの魔術は、宿した魔力が強ければ強い程、より明るい輝きとして視覚情報化される特質も持っていた。

彼女の視界の中に、魔力を有したものが白い輝きに包まれる。床に広げられた羊皮紙、散乱した人形の破片、明人と茉莉、そして和人。

明人が多量の魔力を有していることは事前から判っていた。その魔力のために『魔像機』のパイロットとして選ばれたのだから。

だが、茉莉と和人から発せられる輝きは、明人のそれを遥かに上回っていた。

特に和人は明人の数倍もの輝きに包まれている。茉莉も自分や明人よりは強い輝きを放っているが、それでも和人には遥かに及ばない。

確かにこの魔力量なら、人形が堪え切れずに破壊されたのも頷ける。

「ど、どうするんだよ和人っ!? 壊しちゃったら兄ちゃんの訓練にならないだろっ!？」

「ご、ごめん、兄ちゃん!」

「むっ……僕も試してみたかったのだがな」

「だからごめんってば毅士い」

何も言わず見詰めているだけのシルヴィアに、明人がふりむくのがばつと頭を下げた。

「申し訳ありませんっ！！ カーナー博士の大切な品物を弟が壊してしまいました」

「す、すみませんシルヴィアさん！」

兄に倣って、和人も頭を下げて謝罪する。

そっくり同じ格好で誤る兄弟に、内心で苦笑しながらシルヴィアは応えた。

「いいのよ。人形なら予備が幾つかあるから。それに、こちらにも収穫がなかった訳じゃないしね」

「は？ それはどういう意味でしょうか？」

「ふふふ。秘密」

その後、毅士も人形を動かす事にトライしたのだが、人形はびくりとも動かなかった。

それとなく落ち込む毅士に、シルヴィアが「それが普通なの。あの三人の方が異常なのよね」と慰めていた。

08 - 魔力（後書き）

毎度お付き合いくださりありがとうございます。

明日、明後日は諸事情により投稿できないと思われる。

次回の投稿は8月1日の午前7時頃ではないかと。

引き続きよろしく願います。

09 - 再会

夕食　明人と和人の合作　を終えた後、和人と毅士は和人の部屋にいた。

和人とシルヴィアは居間で魔力の訓練、茉莉は自分に与えられた部屋の掃除と整理をしている。

「すまん毅士。そんな訳で写真撮れなかったんだ」

「まあ、仕方ない。確かにそのような状況じゃあ無理もなかるう。

しかし、噂の人間に味方する鳥型怪獣が本当に現れるとはな。やはり写真でもいいから見てみたかったものだ」

「だからすまなかつたつてば毅士」

和人は今日あったことの詳細を毅士に説明していた。立ち入り禁止区域に黙って入り込んでいた以上、明人やシルヴィアの前では話せなかつたからだ。

「それで和人はどう思う？」

「鳥型の事か？　うーん、どうかな？　本当に噂のように人間の味

方かどうかは判らないけど、少なくとも敵ではないような気がするなあ」

「そうじゃない」

「え？　そうじゃないって、じゃあ何さ？」

「茉莉くんのことだ。考えてみれば、不自然な事だらけだと思わんか？」

毅士の口から出たのは、和人がまるで想定していなかった単語だった。

「なぜ立ち入り禁止区域であるあの岬に居たのか？ なぜ裸で倒れていたのか？ なぜ背中に傷を負っていたのか？ しかも、その傷はすでに殆ど回復していると僕は見たが」

「ま、まさか。毅士は直に見てないだろうけど、結構酷い怪我だったんだぞ？」

和人は茉莉と出会った時の、彼女の背中に走る数本の裂傷を思い出す。あの怪我が数時間で回復するなどとても思えない。

「だがそれ程の傷を負って、あのように元気に動き回れるものだろうか？」

毅士に言われて和人も考え込む。確かに毅士の言う通り、あの傷でそのような動き回れるとは思えない。

「そういや、あいつ何か言っていたっけな。確か、契約者だから傷の治りが早いとか何とか……なあ毅士、契約者って何の事だ？」

「僕が知るわけなからう。ともかく、ざっと挙げただけでもこれだけの疑問点がある。茉莉くんにはまだ何か秘密がある。それは間違いないだろう」

「うーん……そう言われると確かに何かあるように思えるけど……。でも、あいつは悪い奴じゃないと思うぞ？」

「その点には僕も異論はない。だが、注意するに越したことはあるまい」

毅士が和人の言葉に頷いた時。突如、和人の部屋の窓が爆発したかのように砕け散った。

テーブルの上をひよこひよここと人形が歩く。人形はテーブルの端

まで歩くと、くるりと向きを変えて再び歩き出す。その動きは人間が動いているように滑らかだった。

明人は床に敷いた魔方陣の中央で、人形を凝視しながら一心不乱に念を凝らしていた。

夕食の後片付けの後からざっと1時間程、そうやって人形を操る事に集中していた。

その甲斐あつてか、始めて人形を操った時に比べてかなり滑らかに動かせるようになった。

だが明人の脳裏には、飛んだり走ったりと複雑な動きを難なくこなす、茉莉の操った人形の姿があつた。

シルヴィアは、彼女は何らかの理由で魔力を扱う事に慣れているのだと言う。しかし弟と同じ年の少女が自分よりも巧みに魔力を操るといふ事実が、明人に焦りを感じさせていた。

自分は『魔像機^{ゴレム}』を駆つて、人々を守らねばならない。そのためには茉莉のように、いや、茉莉以上に魔力を操る必要がある。その思いが明人を魔力操作の修行に駆り立てていた。

「程々にしておきなさい。焦っても上達しないわよ？」

不意に明人の耳にシルヴィアの声が響く。反射的にその声の方を振り向いた明人は、そのまま時間が止まったかのように凝固した。勿論、それまで動いていた人形も動きを止めて、ぽてちんとテーブルの上に倒れ込む。

「お言葉に甘えて、先にお風呂頂いたわ。日本のお風呂って中々いいわね。木の香りのするお風呂なんて初めてよ」

明人の視線の先、濡れた髪をタオルで拭きながら居間に入ってきたシルヴィア。

彼女の現在の出で立ちは、素肌にYシャツ 明人のものを

羽織っただけといういわゆる『裸Y』と呼ばれるものだった。

しかも、Yシャツのボタンを殆どしていない上にノーブラなものだから、その豊かな胸の双丘が半分以上上まろび出ていて、薄いYシャツ越しに鶉色の先端がうっすらと浮き上がっている。

ちなみにシヨーツは身に付けているようだが、極めて布面積の小さな黒いヤツだったり。

「は、はははは博士えっ！？ な、なななな何て格好してるんですかあっ！？」

余りの視覚的衝撃にフリーズしていた明人が、ようやく再起動を果たして叫ぶ。

「ほら、急に白峰くんの家に泊まる事になったでしょ？ だから着替えとかなくて。これ勝手に借りちゃった。ごめんなさいね」

シルヴィアは、羽織っているYシャツを指先で摘み上げながら言う。Yシャツを摘み上げた際、ちらりと柔肉の先端のピンク色が明人の眼に飛び込む。

「いきなり泊まるとか言い出したのは博士でしょうっ！！」

明人の言う通り、何故かシルヴィアは白峰家に泊まると言い出した。

当然その理由を尋ねた明人だが、対するシルヴィアの返答が「白峰くんの魔力修行の監督指導のため」というものだったために、拒否するわけにもいかなかったのだ。

「ここには高校生の和人と毅士がいるんですよっ！？ その格好はあの二人には刺激が強過ぎますっ！！ お願いですから何か着てく

「ださいっ！！」

視線を逸らしながら明人は言う。刺激的過ぎるのはなにも二人だけではない。明人にとってもかなり刺激的な格好である。

「はいはい、判ったわ。それから『博士』なんて他人行儀な呼び方は止めてくれないかしら？ 今はプライベートなんだからシルヴィアって呼んでね。私も明人くんって呼ぶから。ほら、『白峰くん』だとあなたか和人くんかよく判らないじゃない？」

「分かりましたからっ！！ だから早く何か着てきてください！」

「はい、と間延びした返事を残してシルヴィアは居間を出て行った。

一人居間に残った明人が、はふうと深い深い溜め息を吐いた瞬間、がしゃんと何かが壊れる音が響いた。

その音を聞いた明人は、矢のように居間を飛び出して音の元へと向かう。音の元 和人の部屋へと。

「今の音は何だ和人っ！？ 何かあったのかっ！？」

そして和人の部屋に飛び込んだ明人が見たものは、砕け散った窓と床に座り込む和人と毅士、そして月を背後に悠然と佇む、銀色の髪美しい少女だった。

09・再会（後書き）

本日の投稿。何とか公約通りに更新できました。

今後ともよろしくお願いします。

壊れた窓から覗く満月を背後に背負い、真っ直ぐに自分に向けられている瞳は朱金。

入り込んだ風が、月光に輝く銀の髪をゆらりゆらりと揺する。

細いながらもメリハリのある白い身体にびったりと張り着いているのは、夜空よりも尚黒い服。

和人は、目の前に突如現れた幻想的な光景に思わず見を奪われた。

「ようやく見付けたぞ、主よ」

そして銀鈴の如き声が耳朶をくすぐる。その声に和人の意志は現実まに引き戻された。

「お、お前は……昼間の……」

「然り。主が止まれと命じるからその言葉に従って止まったもの、いつまで経っても主はあの場所に帰ってこぬではないか。あれから我は、あちこち探し廻ったのだぞ？　そしてようやく主の魔力波動を探り当てて、こうして罷り越したという訳だ」

銀の少女は、腰に手を当ててえっへんとばかりに胸を張る。

「どうやらこの少女、律義にも和人の言いつけをずっと守っていたらしい。」

「か……和人……？　この少女はおまえの知り合いか……？」

「し、知り合いつていうか、今日ちよつとばかりすれ違った程度だけど……」

「どうせおまえのことだから、困っていた彼女を助けたか何かだろ

うが、もう少し相手を選べ。困っている人全てが善人ではないのだ。特に電波系は夕チが悪いと聞くぞ」

意味不明な言動のこの銀の少女を、毅士は電波を受信している輩と判断したらしい。いや、誰でも同様な判断をするだろうが。

「む？ 貴様は何者だ？」

この時になって、ようやく少女は毅士の存在に気付いたようだった。

「察するに、ここは主の峙てであろう？ このような時間に己の峙てにこのような者を連れ込むとは……はっ！ まさか主は衆道しゅうどうかっ！？」

何やら一人で捲くし立てる少女をよそに、和人は隣で自分と同じように座り込んでいる毅士に問う。

「なあ毅士、衆道しゅうどうって何だ？」

「衆道とはだな、一言で言えば男色の事だ」

男色と聞いて、和人の顔は一瞬で赤く染まる。

「ば、馬鹿野郎、俺と毅士はそんなんじゃないやねえっ！！ 勘違いすんなっ！！」

銀の少女にくっついてかかる和人。丁度その時だった。部屋のドアを開けて明人が飛び込んで来たのは。

「今の音は何だ和人っ！？ 何かあったのかっ！？」

そして明人は見る。和人の部屋、彼のベッドの上に立っている銀の少女を。

明人が飛び込んで来てすぐに、再びどたと足音が響いた。

「ねえ和人！ 今の音は何？ 何かあったの？」

明人と同じような事を言いながら次に現れたのは茉莉だった。茉莉もまた、銀の少女の姿を認めて動きを止める。

「か……和人……キミって奴は……ボクという奥さんがありながら、出会った初日に別の女の子を部屋に引つ張り込むなんて……しかもこの状況、もしかして毅士くんも一緒に3Pっ!？」

「3P違っっ!! 3P言っなっ!! 勝手な想像を膨らませるんじゃないっ!!」

和人が茉莉の言葉を否定した時、更にシルヴィアまで部屋に飛び込んで来た。

「何なの、この異様な魔力はっ!？ 一体何事なのっ!？」

最後に飛び込んで来たシルヴィアに全員の視線が集まる。そして明人、和人、毅士がぼんっという音と共に瞬時に真っ赤に茹で上がった。

「シルヴィアさんっ!! は、裸、裸っ!! どうしてそんな格好なのっ!？」

慌てて茉莉が指摘する。シルヴィアは布面積の異様に小さい黒のショーツ一枚きりというあられもない格好で、和人の部屋に現れたのだ。

「きゃ、きゃあああああっ!!」「ご、ごめんなさいっ!!」寝間着代わりの服を探している時に、急に魔術を使わなくても判るほどの魔力を感じたものだから慌てて……」

先程は明人を誘惑するためにわざと肌を晒していたシルヴィアだが、こういった予想外に肌を晒すのはやっぱり恥ずかしい。それとも、明人以外に見られた事が羞恥を刺激したのだろうか。何はともかく、ここでもまたうっかりをしつかりと発動させたシルヴィアは、腕でその豊満な胸を隠しながら後ろを向いて座り込んだ。

その時、彼女が唯一身に付けていた衣服の後ろ部分が和人たちの目に晒された。

「ひ、紐? 紐だよっ!? シルヴィアさんのお尻のところ、紐しかないよあっ!?!」

はつきり言って紐だった。紐しかなかった。

「いやあああああんっ!?!」

紐を指摘されたシルヴィアは、両手でお尻を隠しながら慌てて部屋から飛び出して行った。

そんな和人たちを、呆然と見詰めていた銀の少女がぼつりと呟いた。

「ふむ……あのような者がいるのなら、主は衆道という訳ではなさそうよの」

再び一同は居間に集まった。勿論、闖入者である銀の少女も一緒だ。

警察だいや消防だと一通り騒いだ後、これ以上騒ぐと近所迷惑という毅士の提案の元、一同は再び居間に集まってこの銀の少女から話を聞く事になった。

ちなみに、銀の少女が壊した和人の部屋の窓は、シルヴィアが修復の魔術であつという間に元通りにした。

「それで？ 単刀直入に尋ねるが、君は何者だ？」

「我は主……和人様の半身よ」

明人の問いに応じた少女の答えは、当の少女以外には意味不明のものだった。

「どういう意味だよ、それ？ 昼間も訳判んねえこと言っただけだよ。俺たちにも判るように説明してくれないか？」

「確かに主の言う通りかもしれぬな。我らの理を知らぬ者たちには意味を成さん言葉であつたか。だが、我の言葉の意味を正しく解しておる者もおるがの」

少女のその一言に、一同の眼はシルヴィア ちゃんと服を着てこの場にいる に向けられる。

「え、ええ？ わ、私じゃないわよ？ この娘の言っている意味、私にも判んないし」

「その通り。その魔術師の女ではないぞ」

「ど、どうして私が魔術師だと判ったのっ！？」

「我らからみれば、魔術師かどうかなどすぐに判ることよ。何より先程お主自身が裸で現れた時、魔力がどうこう叫んでいたではないか。そのようなことを口にするのは魔術師くらいであろうが。お主、

魔術師の割には抜けてはおらぬか？」

直球でうっかりを指摘されたシルヴィアは、何も言い返せなかった。

「それよりも、先程我が言ったのはその小娘のことよ。のう、小娘。貴様は承知しておろう？ 我ら幻獣の理を」

静かにそう告げる銀の少女。その少女の視線は茉莉に向けられていた。そして一同の視線もまた、茉莉へと向けられる。

「……キミ、ベリルと同じ幻獣なんだね？」

和人が初めて見るような真剣な表情で、茉莉は銀の少女の言葉に応えた。

「げ、幻獣？ お、おい茉莉、おまえ何を言ってるんだよ？」

「……ボクはね、幻獣の契約者なの」

「幻獣の……契約者……？」

契約者。確かに茉莉は自分が契約者だと言っていた。だが幻獣の契約者とは一体？ 和人の頭の中で疑問が渦を巻く。

その和人の疑問に答えるように、銀の少女が言葉を続ける。

「然様、遙かなる悠久の昔より、伝承と伝説の中に存在せしもの。それが我ら幻獣よ」

「しかも貴殿は、幻獣の中でも最高位……幻獣王と呼ばれる存在だ」

銀の少女の言葉に応じるように、白峰家の居間に誰のものでもな

い声が響いた。

「お、おい和人……今の声……」

「お、俺じゃないぞ、兄ちゃん」

謎の声に驚いて、辺りをきよろきよろと見回す白峰兄弟。

「ここだ。明人殿、和人殿。今の声は私だ」

明人と和人が、いや、毅士もシルヴィアも銀の少女も、声のした方　茉莉の方へと振り向く。

そして茉莉の肩の上に、純白の羽毛に包まれた猛禽の上半身と、獅子の下半身を合わせ持つ奇妙な存在が出現していた。

「待たせたな茉莉。傷の方はもう完全に癒えたぞ」

「ありがとう、ベリル」

「う……嘘……グ、リフォ……ン……？　し、しかも喋ってる……」

「ま、まさかこいつ……今日現れた鳥型の怪獣……？」

その存在にシルヴィアと明人が絶句する。二人だけではなく、和人と毅士もまた目を見開いている。

「紹介するね。この子が、私の契約相手。グリフォンのベリルよ」

「以後、私の事はベリルと呼んで貰いたい」

驚く四人を前にして、平然とベリルと紹介する茉莉。

「お、おい、茉莉！　これはどういう事だよっ！？　このベリルって奴は何なんだっ！？　怪獣じゃないのかっ！？」

「失礼なこと言わないで。ベリルは怪獣じゃなくて幻獣。さっきか

らそう言ってるでしょ？」

「先程から会話に度々出てくる幻獣とは何なのだ？ 怪獣とは違う存在なのか？ 茉莉くん、もし知っているのなら説明して貰えまいか？」

毅士のその質問に応えたのは、茉莉ではなく銀の 幻獣の少女だった。

「お主ら人間が怪獣と呼ぶ存在と、我ら幻獣とは本質は同じよ。共に魔石を核として存在する」

「魔石？ 聞いたことないわね」

聞き慣れない単語に、シルヴィアが思わず口を挟む。

「いや、お主たち魔術師は魔石を知っている筈だ。ただ、魔石という言葉を使用していないだけに過ぎぬ」

「名前が違うだけで同じ物ってこと？」

そうは言っても、魔石とやらが何と同じなのかシルヴィアには検討もつかない。せめて現物を見れば判るかもしれないのだが。

そうやって考え込むシルヴィアに、当の幻獣の少女は呆れたような目を向ける。

「お主、魔術師のくせに察しが悪過やせぬか？ お主たち魔術師が

「賢者の石」と呼ぶものこそ、魔石そのものよ」

「け、賢者の石ですってっ！？」

「賢者の石だっってっ！？」

思わず叫び声を上げるシルヴィアと明人。明人も賢者の石がどんなものかはシルヴィアから聞かされていた。『ゴレム魔像機』の心臓部と

なる極めて稀少な魔力鉱石。

しかし、賢者の石を知らない和人と毅士、そして茉莉はきよとんとした顔をしていた。

「なあ、茉莉。賢者の石って何だ？」

「ボク、知らないよ」

「知らないのかよっ！！ おまえも幻獣とやらの契約者って奴なんだろ？ そのベリルって奴から聞いた事ないのか？」

「だって、別に知らなくても困らないし。ね、ベリル？」

「そういえば、茉莉に魔石の事を説明していなかったな」

「いいのかよ、それで？」

茉莉と小さなグリフォンの遣り取りに呆れた和人は、次に知識面では自分を遥かに凌駕する毅士に尋ねた。

「僕が知っている賢者の石とは、中世ヨーロッパにおいて錬金術で卑金属を金に換える際、その触媒として用いられた霊薬のことだ。

他にも、不老不死の霊薬だとか、錬金術自体がこの賢者の石を造り出すための技術だったという説もあるらしい」

すらすらと蘊蓄を垂れる博識な友人に、和人と茉莉は感心の視線を向ける。

「だが、僕の知っている賢者の石とは別物のようだな」

毅士は明人とシルヴィア、そして幻獣の少女の様子を窺いながらそう付け加えた。

「毅士くんの言う通りよ。私たちの言っている賢者の石とは、実在する魔道鉱石のことで膨大な魔力を生み出す力を秘めてるの」

「じゃあその賢者の石と、怪獣だか幻獣だかどう繋がるんですか？」

「そこまでは私にも判らない。でも」

和人の質問に首を振ったシルヴィアだが、彼女の視線はまっすぐに銀の少女に向けられている。

「彼女はそれを知っている筈よ」

10 - 闖入（後書き）

毎回お世話になっております。今日の更新です。

皆様のおかげをもちまして、拙作の総合PVが10000を超え、総合ユニークも2000を超えようとしています。

更にお気に入り登録して下さった方も増え、評価ポイントまで入れてくださいました。

これらは一重に皆様のおかげです。とても感謝しています。嬉しいです。

今後とも拙作をよろしく願います。

シルヴィアの瞳に光が宿る。その光の名は好奇と探究。

今まで誰も知り得なかった怪獣に関する秘事が、目の前の少女から語られようとしている。

シルヴィアは魔術師である。そして魔術師とは神秘の探求者でもあるのだ。その探求者たるシルヴィアの心は、これから明かされるであろう事に激しくざわめいている。

「聞きたい事は色々あるけど、順番に尋ねるわ。まず最初は、どうして怪獣は我々人類の前にいきなり現れたのか？ それについて説明して貰えるかしら？」

「勘違いするなよ魔術師の女」
幻獣の少女の朱金の瞳がシルヴィアに向けられる。

「我はお主の疑問に答えるためにここにいるのではない。そしてお主に従う道理もない」

少女の視線に込められた無形の力に、シルヴィアの身体はまるで縛りつけられたように動けなかった。

勿論、少女が何らかの魔術を発動させたわけではない。単にこの少女から発せられた気迫に、魔術師たるシルヴィアが飲み込まれて身動き一つできないのだ。

「おい、おまえっ！！ おまえは自分の事を説明するためにここに居るんだろっ！？」

横合いから和人が口を挟む。少女の注意が和人に向いたためか、

シルヴィアへかかっていた圧力がすつと消え去る。

「如何にも。我は主たる和人様に我のことを知ってもらうためにここに居る。だが、それは主さえこの場に居て頂ければいい話。それ以外の人間は余録に過ぎぬ」

「それならさっきのシルヴィアさんの質問に答えてくれ。俺もそのことは知りたいんだ」

「主が望むならば。魔術師の女よ、主に礼を言うがよい」

幻獣の少女のその横柄な態度に、シルヴィアは少々引つ掛かるものを感じたが、敢えてそれを口に出す事はなかった。

怪獣が突如出現した理由。それはシルヴィアだけではなくこの場の全員、いや人類全体の疑問と言ってもいいからだ。

「魔術師の女はあ奴らがいきなり現れたと言ったが、それは間違いよ。我らの眷族は遙か昔より、人間たちの前に姿を現しておる」

そして幻獣の少女の口から発せられた答えは、誰も予想だにできなかったものだった。

「ど、どういう事？ 一号怪獣が現れたのは1999年の7月よ。

それ以前に怪獣が現れたなんて記録は存在しないわ！」

「それはお主たち人間の主観に過ぎぬ」

「俺たちの主観……？ どういう意味だ？」

少女の言葉がまるで理解できない和人は周囲を見回した。だが、この少女の言葉が理解できた者はいないようで、皆一様に首を傾げたり頭を捻ったりしている。

だが、一人だけ例外がいた。

「そもそも怪獣という呼び方は人間が一方的につけたものであって、怪獣が自らを怪獣と名乗ったわけではない。そういうことだな？
そしてキミは言った。幻獣とは伝承と伝説の中の存在だと」

そう答えたのは毅士だった。

「例えば日本の昔話などに登場する妖怪、外国の伝承に顔を出す魔獣や妖精、妖魔など。それら全てが、彼女の言う幻獣や怪獣と同じ存在だとしたら……」

毅士の説明を聞き、和人は彼の言わんとしている事を理解した。

「……それじゃあ、妖怪や妖精というのは……」

「ああ。それこそが、人間の前に姿を現した幻獣なのだろう。それが伝承伝説として現在に伝わった」

和人の呟きに、毅士は頷いて見せる。

「だが解せない点もある。それまでは伝承伝説の中の存在でしかなかった幻獣が、1999年には怪獣としておおっぴらに現れた。これはどういう事だ？」

毅士が疑問を口すると、この場に居合わせた全員の視線が再び幻獣の少女へと集まる。先程同様、この疑問の答えを期待してだ。そして結果的にその期待は叶えられた。

「あ奴ら 人間が怪獣と呼ぶ奴らを生み出したのは」

だが、これもまた先程同様、誰も予想だにしなかった答えとして。

「他ならぬお主ら人間よ」

それは深い海の底で静かに怒りに震えていた。

それは何かに導かれるように、人間たちがアジアと呼ぶ地域の片隅の島へとやって来た。

いや、導かれるようにはない。それは確かに導かれたのだ。

まるで闇夜にただ一つ輝く星のように。それはその輝きに導かれ、広い広い海を越えてこの島へと来たのだ。

だが、ようやく島へと辿り着いたというのに、思わぬ邪魔が現れた。

あの白い奴。あいつさえ邪魔しなければ、今頃それは輝きの元に辿り着いていただろうに。許さない。許せない。

自分を邪魔したあの白い奴の身体を爪で引き裂き、牙で噛み千切る。

そうしなければこの怒りは収まるまい。

だがその身体は傷付いていた。空中に放り投げられた時、あの白い奴が放った雷を躲し切れなかったのだ。僅かに掠めた程度だったが、その強力な電撃によってその身体は思ったように動いてくれない。

そして無理に翼を広げたのもいけなかった。いくらその身体が頑丈だからといっても、本来この翼はもっとゆっくりと時間をかけて広げなければ負担がかかるのだ。

その翼を急に広げたために無理が生じてしまい、現在その身体はあちこちが激しく痛みを訴えていた。

だからそれは、こうして深い海の底で身体が癒えるのを待っていた。心の中に怒りを蓄えながら。

その時不意に、その鋭い感覚に触れるものがあつた。そいつはそれが今いる位置からさほど遠くない場所を、ゆっくりと先程の島の方へと移動していた。

「どうやらそいつも、あの輝きに導かれてあの島を目指しているようだ。」

確かにあの島のあの場所には、眩しい輝きが幾つも集まっている。それ以外にもあの島を目指す同族がいても不思議ではない。

「しかもどうやら、そいつはそれが近くにすることに気付いていないらしい。」

「それ 人間がアルマジロンと名付けた怪獣 は、痛む身体に鞭打って静かにそいつに近付いていった。」

怪獣は人間が生み出した。幻獣の少女は確かにそう言った。

「そ、そんな馬鹿なことあるわけないだろ！」

「どうやったたらあんな巨大な生き物を造り出せるというのだ？ 和人には少女の言葉が信じられなかった。」

少女の言葉が信じられなかったのは和人だけではない。この場に居合わせた全員が同じ思いだ。

「確かに直接人間があ奴らを造り出したのではない。だが、あ奴らが生み出された原因は間違いなく人間なのだ」

静かに和人にそう告げると、幻獣の少女は更に言葉を続けた。

「あ奴らがどうやって生まれたのかを説明するには、まず我がどうやって誕生するのかを説明する必要があるの」

そして少女は語る。怪獣、いや幻獣の誕生の秘密を。

「その魔術師の女なら知っておろうが、世界には魔力が集まる場

所が幾つかある」

「勿論知っているわ。パワーポイントとか霊脈とか呼ばれる場所のことね」

「その魔力の集まる場所で、月の満ち欠け、星座の位置、大地の鳴動など様々な要因が重なって魔力の結晶体ができることがある。その結晶体こそが魔石なのだ」

魔石 賢者の石の誕生。それはこれまでいかなる魔術師も解き明かすことのできなかった神秘。

それが今、幻獣の少女によって白日の元に晒された。魔術師であるシルヴィアは、体中を歓喜が駆け抜けて打ち震えるのを感じた。

「魔石は幾星霜の年月の果てに意識を宿すことがある。この自我に目覚めた魔石こそが幻獣であり、そして自我に目覚めた幻獣は、魔石を核とし魔力で以って自分の身体を造り上げる。主たちが見ている我のこの身体や、そのグリフオンの身体も魔力で編み上げた仮初めの器に過ぎん。魔石こそが本体であり本質なのだ」

「じゃあ怪獣もあの巨体は仮初めのもので、魔石が本体って事か？」

和人のこの推察に対し、少女は首を横に振った。

「いや、あ奴らは我ら幻獣とは少々事情が異なる。あ奴らは自我を得て肉体を造り出したのではなく、本体たる魔石が何か他の生物を取り込んで変質してしまった結果だ」

それで怪獣には既存の生物と似通った部分があるのか、とシルヴィアは納得した。だが同時に更なる疑問が生じる。

「でもそれだと、1999年まで怪獣が現れなかった理由にならないわ。怪獣の生まれ方があなたの言う通りなら、1999年以前に

も怪獣が現れても不思議じゃないでしょ？」

「その通りだ。そこで先程言ったように、人間が絡んで来る。いや、人間の無意識が、と言うべきであるうな」

「人間の無意識……？」

「然様だ主よ。主は1999年の7月と言われて、何を思い出す？」
「え？ 1999年の7月って言ったら、やっぱりあれだろ？」

和人の言うあれとは、16世紀にフランスの医師であり占星術師が書き残した詩の一節が、世界の滅亡を予言しているとして当時一大ムーブメントとなった現象のことである。

中には本当に1999年に、世界が滅亡すると信じていた者もいた程だった。勿論、1999年から数年が過ぎた今では、もはや忘れ去られた過去のブームに過ぎない。

「当時あの第10巻72番の予言詩を、本気で信じた人間は日本中でもかなりの数が居たそうだな。しかし怪獣が現れたことですからその存在が薄められてしまった。中には怪獣こそがアングルモアの大王だとこじつけた輩も居たそうだが」

毅士がより詳細なデータを記憶の中からサルベージする。彼はこ
ういう雑学にも滅法強かった。

「いや、その者が今言った事は正しい。あ奴らこそアングルモアの
大王なのだ」

少女の言葉に一同は驚きに息を飲む。静まり返った白峰家の居間に、銀の少女の声だけが涼やかに響く。

「のう魔術師よ」

「な、何よ？」

「先程その者が言ったな。この国の中でかなりの数の人間があの手言詩を信じていたと。更には、世界中には幾つもの世紀末思想が溢れている。そんな世界の終わりを信じる者たちの中に魔力を持った者が数十人、数百人と混じっておったとすれば？　そしてその信じられる心が神秘に辿り着いたとすれば？　一体どうなると思う？」

シルヴィアの身体が硬直する。この少女が言わんとしていることを理解したからだ。

「あ……有り得ないわっ！！　何の修練を積んだわけでもない、単に素養を持った者だけが魔術を発動させたというの？　しかもそれって偶発的とはいえ儀式魔術じゃない！！」

儀式魔術とは、一人の魔術師では成し得ないような大魔術を、数人の魔術師が協力し合って施す魔術の事である。個人の素養にもよるが、儀式に参加する人数が多ければ多い程、施す魔術の成功率は上昇する。

「魔術的な素養を持つ者があの世紀末を信じたことで、偶然にも発動した儀式魔術が世界各地に眠っていた魔石に作用して怪獣が生み出された。これこそが、お主たちが怪獣と呼ぶ奴らの誕生の動かし難い真実よ」

幻獣の少女によって明かされた怪獣誕生の秘密。人類最大の災厄が、他ならぬ人類の手で生み出されたとは。

この衝撃の事実にも誰もが、物音一つ立てずに凍りついたようにじっとしていた。

「……確かにその話が本当なら、怪獣は人間の無意識が生み出したと言えるわ。でも、それってどれぐらいの確率なの？」

そんな白峰家の居間に広がる静寂を、シルヴィアの零した眩きが破る。

「ふん、魔術師とは思えぬ台詞よの？ 例えどんなに可能性が低かろうが、その向こうに存在する神秘を追求することこそ魔術師の本分であろうが」

幻獣の少女の言う通りであった。どんなに低い確率であろうが、零でない以上可能性は存在する。その僅かな可能性を追い求める者こそが魔術師なのだから。

「我の話は以上だ。では主よ、本題に入ろうか」

「ほ、本題？」

幻獣の存在、茉莉がその幻獣の契約者とやらであること、そして怪獣誕生の秘密。

和人は幾つもの衝撃的な話の連続について忘れていたが、その言葉でこの幻獣の少女がそれらの話をするために現れた訳ではないことを思い出した。

「然様だ主よ。我は主と契約を結ぶためにここに居る。いや、主と契約するために生まれたと言っても過言ではない。さあ、主よ。我との契約を今ここに結ぼうぞ」

少女は立ち上がり、静かに和人に歩み寄ると、朱金の瞳に愉悦の光を浮かべながらそう告げた。

11 - 幻獣（後書き）

本日の投稿分。

今回、予約掲載というものを試してみる。

指定時間は午前6:00。果して上手く行くのか？

それはともかく、今後ともよろしく願います。

幻獣の少女の口から衝撃の事実が明かされてから数時間後。そろそろ日付も変わるうかという時間帯にも拘わらず、白峰家の居間にはまだ人の気配があった。

「正直言つて、驚きましたよ……」

手にした缶ビールを傾けながら、明人はテーブルの向いに座るシルヴィアに告げた。

「そうね……確かに私もびっくりしたわ」

同じように缶ビールを手にしたシルヴィアが、明人の言葉に応える。

「今日の昼間明人くんに、『この国であなた以上に魔力の高い人はまずいない』なんて言ったばかりなのに、あなた以上の魔力の持ち主がこんな身近に二人もいるなんて……これじゃあ私、大嘘つきよねえ」

「びっくりしたのはそこですかっ!？」

「あら、違うの？」

「違いますよっ!!! 俺が言っているのは和人や茉莉ちゃんのことですっ!! 和人が幻獣の契約者とかに選ばれるし、茉莉ちゃんに至っては、今日現れた鳥型の怪獣こそが彼女本人だったんですよっ!?!」

件の少女より契約を迫られた和人は、考える時間が欲しいという

ことで少女へはつきりとした答えを出さなかった。

「でもあの時、和くんが即決しなくて良かったと思う。下手に断わろうものなら、あの娘がどう出るか分からなかったし。魔力から推察してもあの娘、かなりの力を秘めてるわ。恐らく大型怪獣と同等かそれ以上……。そんな存在が、怒りに任せて暴れ出したら止めようがないもの。それに幻獣との契約つてのが、何らかの危険を伴うものである可能性もあるわけだし」

まあ、茉莉ちゃんの話聞く限りじゃそういう危険性はなさそうだけど、とシルヴィアは最後に付け加えた。

「今頃和人の奴、あれこれ悩んでるんですかね？」

あれから和人はすぐに自室へと戻った。毅士がしばらくしてから様子を見にいったのだが、そのまま彼も戻らないところを見ると、二人で色々話し合っているのか、それとももう二人とも寝てしまったのか。

茉莉もしばらくは居間に残っていたのだが、つい先程彼女にあてがわれた部屋へと戻って行った。

そして幻獣の少女は和人に考える時間を与えると、「今宵は月が美しいからの。主の答えを待つ間、ゆるりと月でも眺めていようかと、ふらりと家から出て行った。勿論、今度はちゃんと玄関から。」

「ねえ？ どうしてあなたたち幻獣はそんなに契約にこだわるの？」

シルヴィアの問いは明人へのものではなかった。それはこの場にいる最後の一人 一体と表現すべきか に向けられたものだった。

「 契約者を得ることこそ、我ら幻獣の至上の至福だからだ」

そう答えたのはグリフオンのベリルだ。ベリルはシルヴィアのもつと幻獣について話が聞きたいから、という要請に応えてこの場に残って彼女たちと話をしていた。

ベリルは、その小さな身体をテーブルの上でうずくまらせて、首だけを二人に向ける。

「我らに幻獣に寿命という概念はない。故に我らは生まれいでた瞬間より、契約者と出会うことを求める。そして契約者を得、その契約者と共に命を終えて永遠の安らぎを得る。それこそが全ての幻獣たちの求める理想なのだよ」

ベリルはそう告げると、彼の前に置かれた皿から酒のつまみに用意されたチーズを、一切れ器用についはむ。

本来魔力で身体を維持する幻獣には、食事も睡眠も必要ない。だが味覚がない訳ではないので、こうやって「味」を楽しむことはできる。

「俺にはよく理解できないな」

「当然だよ明人殿。我ら幻獣と君たち人間とでは、価値観を測る定規の大きさも違えば目盛の幅も違うのだ。理解しようとするのが無理というものだ」

そんなものかねえと答えてから、明人はシルヴィアへ視線を向けた。

「それでシルヴィアさん。今夜の出来事は上へ報告しますか？」

「そうね……それも頭痛の種よね……」

そう呟いてシルヴィアは、缶の中身を喉に流し込む。

今まで誰も知り得なかった怪獣の誕生の仕組みや生態。全部ではないだろうが自分たちはそれを知ってしまった。普通に考えるなら自衛隊である明人や、自衛隊に招聘されているシルヴィアはその事を自衛隊の上層部、果ては国のレベルにまで報告しなければならないだろう。

だがそんな事をした場合、和人や茉莉がどうなるか。

怪獣は一体でも恐るべき破壊力を秘めている。それこそ小さな国なら、大型怪獣一体で破壊し尽くすこともできる。

二人はそんな怪獣と同等の力を持つ幻獣を自由に操ることができ
るのだ。

まだ契約を交わしていない和人はともかく、茉莉の力は今日の昼間に目の当たりにした。

そんな二人を自衛隊の上層部や国家が、そのまま放置しておくとはとても思えない。

自衛官として職務を全うするのか、それとも兄として弟を守るのか。明人は二つの違う立場から葛藤していた。

「私は……権藤司令に相談してみようと思うわ」

「権藤司令に……ですか？」

「ええ。司令なら決して悪いようにはしないとと思うの」

権藤重夫という人物は、職務に忠実でありながら情にも厚い人物である。確かにシルヴィアの言う通り、彼なら悪いようにはしないだろう。

あのネーミングセンスだけは、どうにもいただけないが。

明人はそう考えて、シルヴィアの提案に頷いた。

雲一つない夜空に、銀の満月が輝いている。

その月を屋根の上に寝転びながら見上げて、和人は今日の出来事を反芻していた。

一度はベッドで横になったものの、和人はどうしても寝つけずに同室で寝ていた毅士を起こさぬようそつと部屋を抜け出してここにやって来た。

明人の宿直の時など、しょっちゅう泊まりに来る毅士。彼はいつもなら客間で寝るのだが、今日はその客間が塞がってしまったので和人の部屋で寝たのだ。勿論、二つあった客間を塞いだのは茉莉とシルヴィアだ。

幻獣の少女はふらりと出かけたまま戻らない。先程の態度からして二度と戻らないという訳でもないだろうが、幻獣は睡眠を必要としないと生きていたから、どこかで一晩中起きているつもりなのかもしれない。

そんな事をぼんやりと考えていた和人は、近くに人の気配を感じて首を巡らせた。

「あ、こんな所にいたの？」

物干し用のベランダに姿を現したのは茉莉だった。茉莉は身軽にベランダの手摺りを越えると、危ない足取りで屋根の上を和人の元へとやって来た。

「へえ……いい風が吹くね、ここ」

風に髪を靡かせて、茉莉が気持ち良さそうに目を細める。

「だろ？　ここは小さな頃からの俺のお気に入り場所なんだ」

和人は幼い頃より、何かに悩んだり、悲しいことがあったりすると、決ってベランダの手摺りを乗り越えて、ここでこうやって空を

眺めていた。

「で？ 和人はここで何してるの？ 考え事？」

茉莉は和人の傍らに腰を下ろしながら尋ねた。

「まあ な。今日は色々あったからなあ……」

「そだね。ボクも色々あったよ。誰かさんには出会って早々裸を見られちゃったりね」

茉莉は悪戯っぽく和人を見詰める。そして和人は、その言葉で茉莉の白い裸身を思い出してしまい、夜目にもはつきりと赤くなって茉莉から視線を逸らす。

「だ、だからあれは不可抗力だって言ってるだろっ!？」

「不可抗力だろうが何だろうが、事実が事実だよね？」

茉莉にやり込められた和人は黙り込む。下手な事を言つと逆に藪へびになりかねないと思つたからだ。

そうやってしばらく黙つたまま夜空を見上げていた二人だが、沈黙に堪え切れなくなったのか、再び和人が口を開いた。

「なあ？」

「何？」

二人とも夜空を見上げたまま言葉を交わす。

「おまえ、本気で結婚とか考えてるのか？」

その問いに、茉莉は黙ってしばらく考えてから、ぼつりぼつりと

答え出した。

「本当言うとな、結婚っていうのは和人の家に転がり込む口実だったんだ」

茉莉の言葉に、和人は内心でやつぱりなと頷いた。和人や茉莉の年齢で結婚なんて普通は考えないだろう。それも裸を見られたから結婚するなんて、いくらなんでも古風過ぎる。

そんな事を考えながら、和人は茉莉の言葉に耳を傾けた。

「昼間も言ったけど、この街に来たのはいいけどあてなんてないし。だから上手くすると住む所が確保できるかなって思ってたあんなこと言ったの」

でもね、と一息ついて茉莉は言葉を続ける。

「この家は暖かいんだ。今日一日過ごしただけでそれはよく判ったよ。明人さんは優しいし、和人も……毅士くんも言ってたけど、ちよっとお人好しだけど、悪い奴じゃないしね」

「お人好しで悪かったな。しょっちゅう毅士にも言われてるよ」

二人はお互いに顔を合わせる事なく、くすりと微笑む。

「ほら、ボクってさ、両親を亡くしてから親戚の家で育てられたって言ったでしょ？　そこが何ていうかさ、酷い所だったんだ。体罰や食事抜きなんて当たり前。お小遣いなんて貰ったこともなかった。たまに別の親戚から貰っても、その家の子たちになんか取り上げられたりしてさ。大きくなったらこんな家出て行ってやる、っていつも泣きながら考えてた」

茉莉は膝に顔を埋めるようにしながら話し続ける。

「で、結局その家を飛び出したわけだけど……それから結構大変だったんだよ？ 身寄りがないからあちこちを転々として。15や16の女の子一人じゃ部屋も借りられないし、まともな仕事も少ないし。ここだけの話、盗みをしちゃったこともあった……どうしてもお腹が減っていて、気づいたら店先に並べてあったパンを持って走って逃げた」

運良く捕まったりはしなかったけどね、と茉莉は笑った。

「それで今日、この家に来て久しぶりに思い出したんだ」

「何を思い出したんだ？」

「家族って暖かいつてこと。安心して暮らせる家があるって素晴らしいってこと。和人と明人さん、毅士くん、シルヴィアさん……皆と出会って、ボクにも以前はそんなものがあつたんだって思い出した……あはは、変だよ。普通誰でも持つてるのに……そんなこと忘れる訳ないのに……」

茉莉は笑っていた。茉莉は泣いていた。茉莉は笑いながら泣いていた。

彼女は両親と一緒に暮らしていた、幸せな頃を思い出したのだから。

茉莉の気持ちは和人にはよく判った。彼もまた、同じような思いで泣いたことがあつたから。

幼い頃に両親を亡くし、唯一人の肉親である兄もまた進学のためにこの地を離れた。家族の思い出の染みついたこの家に一人残つた和人は、今の茉莉のように家族が揃っていた頃を思い出して泣いたことが何度もあつた。

だから和人は茉莉の方を見ないで彼女に言う。

「おまえが好きだけここに居ればいいさ。ここでは誰もおまえに暴力を加えない。食事もおまえの分くらいは何とかなるしさ」
「……うん……うん。ありが……と……」

茉莉は小さく嗚咽を繰り返しながら、何度も礼を言う。和人はそのまま茉莉が泣き止むまで黙って待っていた。
しばらくすると、茉莉も泣き止んだようでも再び話し出した。

「だから……ボク、改めて思ったんだ」

「へえ？ 今度は何を思ったんだ？」

「ボクね……ボク……本当に……和人と……結婚してもいいって」

茉莉は頬を赤らめながら、さらりと爆弾を投下した。

「な、なにいいいいいいっ！？ ど、何処をどうしたらそんな結論になるんだよっ！？」

茉莉の爆弾宣言に、思わずバランスを崩して屋根からずり落ちそうになり和人。

「和人がいい奴だつてのはよく判ったよ？ そりゃあ、ここに置いてくれるのは同情もあるかもしれないけど、もし和人が嫌な奴だつたらボクにイヤラシイことする筈だもん。でも和人はボクが裸で気を失っていても何もしなかったよね。それだけでも和人は信用できるよ」

「ば、馬鹿野郎、それが普通だつ！！」

「あ、安心していいよ。今までどんなに生活が苦しくても、身体だけは誰にも許してないから。真正正銘の乙女だよ、ボク」

「そんな事聞いてねえええええええっ！！」

「それにやっぱり温かい家があるのはいいよね。思い出しちゃったら余計に、家があるっていいなって思うんだ。それに毅士くんから聞いたよ。和人って将来、明人さんと同じ自衛官志望なんでしょ？
って事は国家公務員だよな。安定収入！！」

「さてはおまえ、家とか収入とかが目的だろ、本当はっ！？」

「……………違っよ？」

「何だよ、今のメチャクチャ長い間はっ！？　ってか、何故に疑問形っ！？」

「やだな、男の子が細かい事気にしちゃだ・め・よ？　そんなことだと女の子にモテないぞ。あ、和人にはボクがいるからモテなくてもいいか」

「だから勝手に話を進めるんじゃないやねえええええええっ！！」

「やれやれ。折角良い月夜だというに、主にはちと雅を愉しむ心に欠けるのお」

ぎゃいぎゃいと言い合う二人の耳に、第三の声が響いた。二人が同時に声の方を振り向けば、ベリルをして幻獣の王と言わしめた少女が、夜風に銀の髪を緩やかに揺らしながらいつの間にか屋根に座っていた。

「それで主よ。心は決まっただか？」

少女は月光を麗々と反射させる朱金の瞳を和人へと向ける。

「我と共にあらば、世界を主のものにする事も可能であろう。主が望むならば、世界中の富みを主のものとしてみせよう。主が望むは何ぞや？　如何なる望みも我とあらば叶うであろう」

自分を真っ直ぐに見詰める朱金の瞳から目を逸らさず、だが和人

は幻獣の少女ではなく茉莉に問う。

「茉莉……おまえはどうしてベリルと契約した？」

茉莉もまた、幻獣の少女から目を離さずにその問いに応えた。

「最初はボク、力が欲しかった。両親を奪った怪獣に復讐する力でも今は違う。以前、ベリルの力を怪獣だけじゃなく、ボクを辛い目に会わせた人たちにその力を使いそうになったことがあって……それから怒りや恨みじゃなく、ボクみたいな存在をこれ以上増やさないために怪獣と戦うって決めた。怪獣の犠牲者をできるかぎり減らす。零にするのは無理でも、減らすことはできると思うから……だからボクは怪獣と戦う」

茉莉の方を振り向かずとも、和人には彼女の瞳に大きな決意が秘められていることが理解できた。

そして彼女の決意は、和人の想いと同じものであった。

兄のように自衛官になって怪獣と戦い、自分が守れる範囲のものだけでもいいから絶対に守る。それが和人の夢であった。

だが、そのためにこの少女の力を借りてもいいのか、という疑問も和人にはあった。

怪獣を倒すために、怪獣と本質的に同じ存在である幻獣の力を借りる。

それはまるで、ウィルスを打倒するために同じ病原体から作られるワクチンを使用するのと同じではなからうか？　そしてワクチンに依存し過ぎれば、身体自体の対抗能力を低下させてしまう事にならないだろうか？

和人は、あくまで自分の力で怪獣に対抗したかった。現に兄の明人がそうしているように。

「俺が望むのは、茉莉と同じように怪獣を倒す力だ。でもそれは、兄ちゃんのように俺自身の力と努力で叶えたい夢なんだ。だから…
…お前の力は借りない」

幻獣の少女を真つ正面から見返して、和人はきつぱりと告げた。

「ふむ…主には我と契約する意志はないと、そう言うのだな？」

少女もまた、その朱金の瞳を和人から逸らす事なく問いただす。

その問いに頷く和人を見る少女の瞳に、並々ならぬ力が宿る。

それはこの少女の放つ圧力。シルヴィアをも金縛りにしたこの圧力を、しかし和人は臆する事なく真つ正面から受け止めた。

「まあ、よい」

和人の意志が固いことを悟ると、少女はそう呟いてふとその圧力を緩める。

「ならば主が翻意するまで粘り強く説得するまで。我は主と出会うまで1000年以上待ったのだ。説得にあと数年掛かるうとも、それに比べれば大した時間ではない。そういうわけで小娘」

少女の視線が、和人から茉莉へと移動する。

「主の傍には我がある。主が望むなら、別に契約を交わす前であるうとこの身を捧げても構わぬ故、お主が主の傍にいる必要はない。何、我も自我に目覚めてから1000年以上経つとはいえ、男と閨を共にしたことはないから我もまた乙女よ。しかもこの身は魔力で編み上げられたもの、ある程度は変化させることも可能ぞ。主の好みがあつた魔術師の女のようなばいんばいんなら、そのように合わせ

るが？」

そう言いながら銀の少女が妖しげな視線を和人に向ける。

「えっ！？ それマジっ！？」

『ばいんばいん』という言葉と、今日実際に目にしたシルヴィアの裸体を思い出して、思わず反応してしまった和人。悲しいかな、彼も十代の健康な男の子なのだ。

「ちよ、ちよつと和人っ！？ どうしてそこに反応するのっ！？

それにキミっ！！ 和人の奥さんはボクっ！！ 横から現れて人の亭主を誘惑しないのっ！！」

「横から現れて、とは異なることを申すの。主と早く出会ったのは我の方ぞ。横から現れたのはお主よ」

「そうなの、和人っ！？」

「あー、確かに茉莉よりこいつの方が先に会ったっけ……」

ほんの数分だけどなーと、心の中でつけ足す和人。

「そ、それでも和人の奥さんはボクなのっ！！ 裸だっけ見られたんだからっ！！」

「ふん、そのような事でいいのなら簡単なことよ」

そう言い捨てて少女は、身に付けている黒いチャイナ服のようなものに手をかけて脱ごうとする。

「待て待て待て待てええええええっ！！ 何するつもりだおまえっ！？」

「裸を見せれば主の傍にいていいのであるっ？　ならば裸を見せるまで。我は主が望むのなら、四六時中裸でおつても良いぞ？」

この美しい少女が、常に裸で自分の傍にいるのを思わず想像してしまった和人。不覚にも鼻血が出そうになった。だって男の子だもん。

「四六時中裸って……何考えてるのこの変態！　露出狂！」

「幻獣である我とお主ら人間が同じ感性であるはずがなかるっ。我ら幻獣は主の言葉には絶対服従するもの。お主も幻獣の契約者ならよく知っておろっが」

「そ、それなら、ボクもいつも裸でいるっ！！　ね、ねえ和人？」

和人がしろって言うなら、そ、その、く、首輪だつて嵌めるよ……？　首輪は赤が似合うかな……？」

「な、何だよ首輪ってっ！？　何処からそんな発想が出てきたっ！　俺にそんな特殊な趣味はねええええええええええっ！！」

口ではそう否定しつつも、頭の片隅で全裸の茉莉が赤い首輪をしている姿が浮かんでしまい、ちょっと似合うなあと思ってしまうた和人。

それは何て言うか絶大な破壊力だった。主に理性辺りに対して。

アルマジロンは静かに、ゆっくりと、しかし確実にそいつに近付いた。

これだけ近付いても、そいつはアルマジロンに気づいた様子はないかった。

そいつはアルマジロンのように四肢を備えておらず、水中での行動に適したように細長い身体各所に鰭を持ち、大きさも10メー

トル程しかない。アルマジロンの知るところではないが、そいつは人間たちが小型と呼ぶサイズの怪獣だった。

そしてもし、この場に人間が居たのならきつとこう言っただろう。「こいつはウナギに似ている」と。

アルマジロンがウナギに似た怪獣まで後数メートルと迫ったところで、ようやくウナギモドキはアルマジロンに気付いた。

ウナギモドキは間近まで迫ったアルマジロンに驚き、身を擦って泳ぐスピードを上げる。水中での活動に適したウナギモドキのスピードは、アルマジロンの数倍の速度を誇る。

そして猛スピードでアルマジロンと距離を取ると、不意に反転してアルマジロンへと突進した。

ベリルの雷弾の影響で身体の動きが鈍っているアルマジロンは、この突進を躲すことができずに直撃をくらう。

ずどんと辺りの海に重い音が響く。

ウナギモドキの身体が、魚雷のようにアルマジロンの巨体に突き刺さる。

アルマジロンは予想もしなかった痛打に苦悶の叫びを上げる。

アルマジロンはこのウナギモドキを取り込むことで、自身の傷を癒すつもりだった。

怪獣の身体は魔力を帯びている。怪獣はその魔力を取り込むことで自分の傷を癒す事が可能である。そして更に相手の魔石そのものを吸収し、その怪獣の持つ力をも己がものにできるのだ。

だが、アルマジロンは傷を癒すどころか、更なるダメージを負う結果となった。

アルマジロンは大型の怪獣だが、本来は陸上が主な活動場所の怪獣である。だがここは海の中。そして水中こそウナギモドキのホームグラウンドであるのだ。

小型とはいえ地の利を得たウナギモドキは、アルマジロンを圧倒した。苦痛に身を擦るアルマジロンに、ウナギモドキは何度も何度も突撃を敢行する。

そして動きの鈍ったアルマジロンに、ウナギモドキは止めの一撃を振り下ろす。

ウナギモドキの周囲の海水が、唸りを上げながら渦巻状に旋回を始める。どンドン回転数を上げる渦は、まるで回転ノコギリのように鋭利な刃物と化した。

その水の回転ノコギリを、ウナギモドキはアルマジロンへと射出する。打ち出されたノコギリは、アルマジロンの頑強な装甲をも易々と切り裂いた。

周囲の海水に血の花を咲かせて、アルマジロンはゆっくりと海底へと沈んでいった。

その身体を魔力で構成する幻獣は、本来血を流す事などない。だが、魔石が既存の生物を吸収同化した存在である怪獣は傷付けば出血する。怪獣の中には、血ではなく強酸性の体液を撒き散らすような厄介なやつもいるぐらいだ。

海底へと沈下して行くアルマジロンを見届けたウナギモドキは、再び目的地を目指して泳ぎ出す。人間たちが日本と呼ぶ島国へと。

12 - 浪漫（後書き）

本日分投稿。

皆様のおかげをもちまして、着実にアクセスしてくださる方が増えていきます。

ありがとうございます。

今後ともよろしく願います。

アルマジロンの出現から2日が経過した。

怪獣自衛隊の活躍により、アルマジロンは上陸直後に撃退された
実際に撃退したのは茉莉だが、ため、今回は怪獣による被害
は少なかった。

そのため街は既に怪獣の出現など忘れてしまったかのように、い
つも通りの平穏な姿を見せていた。

白峰家を除けば。

明人と和人の周囲だけは、街の平穏など嘘のように慌ただしく、
騒々しかった。

今まで兄弟二人きりだった白峰家。そこにいきなり三人もの女性
が加わったものだから、ご近所の噂にならないはずがない。

勿論その女性とは茉莉と幻獣の少女、そして何故かシルヴィアま
でもがちやつかりと住み着いていた。

スタイル抜群で、大人の女性の魅力溢れる知的な異国美女。

いつも明るく、太陽のような暖かな笑顔を振りまく元気少女。

そして銀髪に朱金の瞳という、ミステリアスな雰囲気漂う神秘的
な少女。

そりゃあもう、最近のおばちゃんたちの井戸端会議の議題は、白
峰家の女性たちの事で持ち切りだった。

どうやら知的な異国の女性は兄の明人くんの婚約者らしい。

元気な女の子は弟の和人くんと既に入籍済みみたいだ。

神秘的な少女は和人くんの事をご主人様と呼んでいた

…… などなど、噂は絶えることがなかった。

それでも決して悪い噂ではないのは、噂をしているほとんどが白

峰兄弟を昔から知っている人たちであることと、明人や和人の人柄にシルヴィアの礼儀正しさ、茉莉の人懐っこさなどによるものだろう。

幻獣の少女に至っては、その古風な物言いがどこその旧家の姫のようだと逆に好評だった。まさかこの少女が怪獣の眷族であるなど、誰が想像するだろう。

そして今、茉莉の姿は商店街にあった。

本日は土曜日。和人たちの通う高校は土曜授業を導入していて、午前中だけが授業があった。もうすぐ帰ってくる和人に昼食を用意するため、茉莉は必要な食材を商店街まで買いに来たのだ。

ちなみに茉莉は、親戚の家に預けられていた時に家事を押しつけられたりしていたので、一通りの家事は難なくこなせた。中でも料理は、明人と和人を唸らせるに十分な腕前だった。

茉莉の料理の腕を知った時、和人の内でぴんぴりんと軽快な音楽と共に、彼女の好感度が3ポイント上昇したのは誰にも知られてはならない秘密だ。

「ねえ、おじさん！ このモヤシ一袋幾ら？」

「おや、この辺じゃ見掛けない顔だねえ？」

「うん。ボク、わけあって白峰さんところに居候してるんだ」

「ああ、噂は聞いてるよ。そうかい、お嬢ちゃんが和人くんの奥さんになるって娘さんか」

茉莉たちの噂は、商店街にまでも広まっていた。

元より都市と呼べる程でもないこの城ヶ崎の街は、今だに昔ながらの地域密着型の店舗が多い。勿論この街にも大型のスーパー等もあるが、どちらかというとこの商店街に足を運ぶ住民の方が多かった。

そして茉莉もまた、この活気のある商店街を気に入っていた。

このような商店街では、交渉次第では値切ることも可能である。

これがスーパーでは値切りを持ちかけることさえ困難だ。だから茉莉はこういった商店街が好きだった。

その後も何店かの商店を廻り、先程の店と同じような遣り取りを繰り返しながらも必要な食材を揃えた茉莉は、その食材を両手に抱えて楽しそうに白峰家へと戻って行った。

「おや、主ではないか」

学校からの帰り道、和人は不意に声をかけられた。和人を主と呼ぶ声の主は勿論、幻獣の少女である。

和人は声の主の姿を探して周囲を見回すが、少女の姿は何処にも見当たらなかった。

「ここだ、ここ。上だ、主よ」

声に従って見上げれば、幻獣の少女が街灯の先端部分にちょこんと座っていた。

「お、おい、危ないぞ！ 落ちたらどうするつもりだよ！？ それより誰かに見られたらどう言い訳するんだっ!？」

「それなら心配無用ぞ。我の姿は人間には見えぬ。姿を眩ます術をかけておる故」

そう答えると少女はふわりと身を踊らせ、軽やかに和人の前に舞い降りた。

「人間には見えない……って、俺には見えてるぞ?」

「それこそが主が我の契約者という証よ。この程度の目眩しでは、

契約者たる主には通用せぬ」

「どんな理屈か今一つ理解できなかった和人。目の前の少女もそれを察したようだ。」

「難しく考える必要はない。主は主人で我は僕しもべ。この関係は天地がひっくり返つても変わらぬ。そう思うだけでいい。難しいことはあの魔術師の女にでも任せておけ」

と、にっこりと微笑みながら言われて、そういうものかと和人も納得する。

「して、今日は何処へ行っておつたのだ？　そういえば昨日も昼間はおらなんだな？」

「こくん、と首を傾げて尋ねる少女。」

「学校だよ、学校。学生は昼間学校へ行くもんだ。今日は土曜日だから半日だけだな」

「おお、学校。聞いたことはあるが行つたことはないの。主よ、今度我也連れて行け」

「だ、駄目に決まってるだろ？　学校は関係者以外立ち入り禁止だ」

「我は主の半身ぞ？　その我が無関係でなぞあるものか。主が行くなら我也行くが道理」

「どんな道理だ、それはっ！？」

と、歩きながら馬鹿な会話を交わす二人。そんな自分たちをご近所のおばちゃん連中が、微笑ましそうに見詰めている事に和人は気づいた。

「なあ、おまえの姿って見えてるのか？　さっきは見えないって言

つてたけど……」

「無論だ。目眩しはとうに解除した。でなければ主は一人で何かと会話する、怪しい奴と思われるであろうが？」

言われてみればその通りである。もし少女の姿が見えなければ、どのような噂が立つか知れたものではない。噂というものの恐さを、和人は最近身に染みて知ったばかりなのだ。

「そ、それより、さっきはあんな所で何してたんだ？」

幻獣の少女が気を回してくれたことに内心で感謝しつつ、それについてそのことを悟られないように和人話題の転換を試みる。

「ああ、海を見ていた。あそこからだ、丁度海が良く見える」

少女は足を止めて、再び海の方角へとその朱金の瞳を向けた。

「海？ 何だつてそんなものを見てたんだ？ もしかして海が珍しいのか？」

「別段海は珍しくもないがの。ただ」

「あ、和人だ！ おーい、和人ーっ！！」

幻獣の少女が何か言いかけた時、彼らの背後から茉莉が駆け寄って来た。

「和人は学校帰り？ って、どうしてこの娘が和人と一緒にいるのっ！？」

「ふ、異なことを申すの、小娘。幻獣とその契約者は一心同体、常に一緒におるものよ。お主とてそうである？ のう、ベリル？」

少女の言葉に反応するように、茉莉の肩の上にベリルの姿が滲むように現われる。どうやら今まで姿を消していたらしい。

「如何にも貴殿の言う通りだ幻獣王殿。だが貴殿はまだ正式に和人殿と契約を交わした訳ではあるまい？　ならば常に一緒にいる必要はないのではないか？」

「そ、そうそう！　ベリルの言う通り！　だからどうして和人と一緒だったの？」

パートナーからの掩護射撃を得て、茉莉は再び問う。

「偶然だよ、偶然。さっき偶然出会ったんだ。それだけさ」

二人に任せておくと話がややこしくなると思った和人は、簡潔に事実のみを告げる。

「そういう茉莉は買物の帰りか？」

和人は両手一杯に抱えられた買物袋を見ながら、茉莉に問い返す。

「うん、そうだよ。お昼ご飯の買い出し。帰ったらすぐ準備するかから、ちよつと待ってね」

「ああ、慌てなくていいぞ。これまでは帰ってから自分で作ったからな。少しぐらい遅れるのは慣れてる」

「うむ。我も小娘の作る料理は認めてやろう。主の作る料理も美味いが、小娘のはそれを上回る。ベリルもそう思うであろう？」

「自我に目覚めて百余年、私も茉莉以上に美味しい料理は知らんよ。尤も、料理を食べる機会なぞ、ほとんどなかったが」

「ほう、お主、百年ばかりで契約者と巡り合うたか。なんとも幸運なことよのう。我なぞ1000年以上は待ったのだぞ」

ぱたぱたと羽ばたきながら、幻獣の少女と肩を並べるベリル。周りの人がベリルに気付かないところを見ると、ベリルか少女のどちらかが先程の様な目眩しの術をかけたのだろう。

何やら熱心に食事について語り合う一人と一体　二体と数えるべきか？　の後ろを歩く和人と茉莉。

和人は隣を歩く茉莉が抱える荷物に、その時改めて気付いた。そして和人は何も言わずに、茉莉の荷物の内の幾つかを引き取る。

「え？　和人？」

するりと荷物を奪われた茉莉は、思わず目をぱちくりさせて和人を見る。

「重いだろうが。こういうものは手分けするもんだ。変な遠慮すんなよな」

和人はそれだけ言うと、後は黙って先に行く幻獣たちの後を追う。きつとこういうところが、毅士くんの言うお人好しだつてところなんだな、と茉莉は心の中で納得する。そして同時に、茉莉の心の中に温かい何かがじわりと広がった。

だから茉莉は和人の背中につこりと微笑みかけると、急いで先を行く和人たちを追いかけた。

重苦しい雰囲気部屋中に漂う。

「つむ……まさかそのような事情があつたとはな……」

部屋の中央に置かれたソファに腰を下ろし、腕を組みながらふう

と重々しい溜め息を吐いたのは怪獣自衛隊城ヶ崎基地の司令官である権藤重夫だった。

権藤は今、司令官の執務室でシルヴィアと明人から、幻獣と怪獣の関係、そして先日現われたグリフォンの正体などを聞かされたのだ。中でも権藤を驚かせたのは、怪獣の出現の原因が人間にあった事だった。

「それで司令……白峰三尉の弟である和人くんや、先程話した茉莉ちゃんのことですが……」

「そのことは私が上手く処理しよう。この事実を上にも伝えようものなら、下手をすると二人は抹殺されかねん。いや、実験動物にしようとする愚か者も現われるかもしれんな」

「ですが、そのことで司令のお立場が悪くなったりはしませんか？」
「心配するな白峰三尉。私は幻獣だの契約者だのといった御伽話は信じていないのだ。ましてやその当事者が君たちの身内だなんて話は聞いたこともない。知らない以上、どうしようもなかるう？」

そう言うてにやりと笑う権藤。彼は和人や茉莉の身の安全のため、何も『聞かなかった』ことにするつもりのようにだ。

「申し訳ありません、司令」

「君が謝る事ではないよ、白峰三尉。しかし、本心を言わせて貰えば、怪獣を打倒するために幻獣の力は是非借りたい」

「それはつまり、彼らに秘密裏に協力して貰いたい、ということでしょうか？」

「あくまでも、彼らの自由意志を尊重しての話だがね。ところでカーナー博士。その少女の姿の幻獣の契約者は、白峰三尉の弟でなければ絶対に駄目なのかね？」

権藤は組んでいた腕を解き、やや声を落として尋ねる。

「はい。本人が言うところによりますと、幻獣の契約者となれる者は唯一人、それも特定の人物だけだそうです」

シルヴィアは幻獣の少女の言葉を思い出した。

幻獣は契約者を求め続ける。そして幻獣の契約者となれるのは、一体につき定められた一人のみ。だから幻獣は契約者と出会うまで、数百年以上の年月を待ち続けるのだという。

「ですから、彼女の契約者と成り得るのは和人くんだけです。もし和人くんに断わられたら、あの少女は未来永劫契約者を得る事はできないとのことですよ」

「そうか……もし可能なら、私とその少女と契約しても構わなかったのだが……」

「自分は幻獣の力に頼るのは反対です。いくら相手が怪獣とはいえ、これは国防問題です。国防問題に民間人を頼っては、我々自衛隊が存在する意味がありません。それに我々には『魔像機』^{ゴレム}があります。あれなら大型怪獣にだって対抗できるはずですよ。何も司令自らが幻獣と契約してまで怪獣と対峙せずとも、我々は充分戦えます。そのためにカーナー博士の指導の下、自分は訓練を重ねております」

明人は和人や茉莉を危険に晒すような真似だけは絶対に避けたかった。

「確かに白峰三尉の言う通り、国防に民間人の力を当てにするようでは、自衛隊が存在する意味がない。だが、正直に言って、『魔像機』の実力は未知数だ。実戦の洗礼を浴びていない兵器など未完成に過ぎん」

権藤の言葉が重く響く。確かに『騎士』^{ナイト}は実践投入用『魔像機』

の第一号機だが、いまだ実践の経験はなく、実質は実験機というべき機体である。

兵器というものは実戦を繰り返して、露呈した問題点を順に潰していき、初めて実用的なものになるものなのだ。

そういう意味で『魔像機』が完成するのは、まだまだ先の事である。

「それに白峰三尉が弟たちや、私の身の安全を憂いてくれるのもよく判る。だがおそらく、その茉莉という少女は怪獣が現われれば再び戦うだろう」

権藤のその言葉に明人もシルヴィアも頷くしかない。鳥型の大型怪獣が各地で他の怪獣と戦ったという報告は、公にこそされていないものの、怪獣自衛隊にはこれまでに幾つもの怪獣も入ってきている。

これから怪獣が現われれば、茉莉はきっと戦うだろう。権藤も明人もシルヴィアもそう考えていた。

「ならば我々怪獣自衛隊と連携した方が、茉莉という少女の負担が少しは減ると私は思うのだがね」

「判りました。茉莉ちゃんには一度話してみます」

「シル……カーナー博士っ!？」

「白峰三尉が和人くんや茉莉ちゃんを、危険なめに合わせたくないのには判るわ。でも、私たちがいくら反対してところで茉莉ちゃんがベリルの力を持ち出したら、私たちでは止めることはできない。それなら初めから協力体制を整えた方が、彼女の安全に繋がるというものではなくて?」

シルヴィアの言葉には、明人も納得せざるを得なかった。

「判りました。ですが、これだけは約束して下さい。絶対にあいつ

らには強制しないこと。あくまでもあいつらの意志で選ばせること。これだけは自分はどうしても譲れませんから」「承知した」

明人の提案に権藤は頷く。

「それではこの話はここまでにしよう。で、話が変わる訳なんだが………いつだね？」

権藤のその問いに、明人は何の事か解らずに思わずぼかんとした顔で権藤を見詰め返した。

13・噂話（後書き）

本日の投稿分です。物語はこの一連の話の中盤へ到達しました。

それから、今週末はなんとか投稿できそうな気配です。

今後ともよろしくお願いします。

もうすぐ真夏を迎える太陽は、今日も空のてっぺんで盛大に自己主張をしている。

「……………今日も暑いなあ……………」

強烈な日光を手で遮りながら、和人は雲一つない澄みきつた青空を見上げる。

学校帰りである和人は勿論学校指定の夏用の制服を着ている。幻獣の少女は、出会った時と同じチャイナ服に似たデザインの黒い服。彼女が言うには、この服は魔力で編んであり身体の一部のようなものだとか。

そして茉莉は夏だというのに長袖のトレーナーにジーンズというちよつと暑苦しい格好だった。

「なあ茉莉、おまえそんな格好で暑くないのか？」

茉莉の暑苦しい格好を見かねた和人が尋ねた。

「暑い。というより熱い」

こころなしか、足元をふらつかせながら茉莉が答えた。

「だったらもつと薄着にしたらどうだ？ おまえが今着てるそれ、冬用のトレーナーだろ？」

「……………夏用の服なんて持ってないもん……………」

家出同然で親戚の家を飛び出した茉莉は、最低限のものしか持ち出せなかったのだ。尤も、茉莉の私物などかなり限られていたのだが。

「だからそういうことは早く言えって言ってるだろ？ Tシャツぐらいなら俺のでも着れるだろうから貸してやるよ。その代わりにちよつと大きいかもしれないけど我慢しろよな」

「いいの？」

「別にそれぐらいどうってことないだろ？ ……しかし茉莉の服とか色々と必要だよなあ……今度バイト代が出たら買うか……」

後半部分はぶつぶつと呟く程度の声だったが、隣を歩く茉莉にはしっかりと聞こえた。

「そ、そんなの悪いよ。バイトだったらボクもするから。ボクのものはボクが買うって」

「そうか？ じゃあ今度バイト紹介してやるよ。俺が行ってるバイト先でこの間バイトが一人止めたから、人手が足りないって言ってたんだ。そこで良ければな」

「へえ、和人つてバイトしてたんだ？ どんなバイト？」

「弁当屋。商店街の中にある弁当屋で、週に二、三日学校帰りに行ってる」

毅士みたいなビッグスクーターが欲しくてさーと続けた和人は、自分の隣にいるのが茉莉だけなのにふと気付いた。

先程までは幻獣の少女とベリルも一緒だったはずだが、今は彼女らの姿が見えない。

「あれ？ あいつらどこ行った？」

周囲を見回す和人。それに釣られるように茉莉も首を左右に巡らせた。

「あ、和人！ あそこ！ あんな所にいるよ！」

茉莉が指差す先、幻獣の少女は先程のように街灯の先に立っていた。その少女の肩の辺りに、ベリルも一緒に浮かんでいるのが和人には見えた。

「あ、あの馬鹿、またあんな目立つようなことしやがって……！！」

一言文句を言おうとした和人より早く、幻獣の少女が和人たちを見下ろして口を開く。

「主よ、来るぞ」

「来るって何がだよ？」

少女とベリルは和人たちの所まで降りてくると、更に言葉を続けた。

「先程も伝えようとしたのだがな、その小娘が現われたのですっかり忘れておった」

「だから何のことだよ？ 説明しろって！」

「茉莉や和人殿たち人間が怪獣と呼ぶ我らの眷族……奴らが来る」「な……に……っ!？」

驚く和人と茉莉をよそに、少女は再び海の方へと視線を移す。

「我ら幻獣には判るのだ。眷族が近付いていることがな。奴らはすぐそこまで来ておるぞ」

少女の言葉に、和人は慌てて携帯電話を取り出す。明人に連絡して警戒態勢を取ってもらうためだ。

だが和人が明人に連絡するより早く、茉莉はベリルを伴って駆け出した。そして和人は茉莉が再びベリルと融合して怪獣と戦うつもりだということを瞬時に理解した。

「まったく、あの馬鹿　　っ!!」

和人の脳裏には、先日の背中に大怪我をして倒れていた茉莉の姿が浮かんだ。今度はあの程度では済まないかもしれない。もっと酷い怪我、いや、下手をすれば命さえも落としかねない。

だから和人は茉莉の後を追って走り出した。自分が行っても怪獣が相手では何の力にもなれないと知りながらも。

「え……っ……。質問の意図が読めないのですが……?」

明人は何とかそう切り出す。いきなり「いつ」と言われても、何がいつなのか判るわけがない。

「式だよ」

明人の質問に返ってきた権藤の答えは、これまた簡潔過ぎて訳が解らない。

「式……と言われましても……何の式でしょう?」

権藤が何を言わんとしているのか理解不能の明人。

間近にありそうな式といえば和人の卒業式か成人式ぐらいだ。で

も和人の卒業式はまだまだ先だし、成人式に至ってはもつと先だ。それ以外に式となると……

答えに検討もつかない明人は、シルヴィアへと視線を向ける。そしてシルヴィアへ視線を向けたことを、明人は心の底から後悔した。笑っていた。笑っていたのだシルヴィアは。

それもにこりという笑いではなく、にたりといった悪魔の笑み。間違いない。この女性が絶対何か絡んでる。そう明人の本能が告げた。

「だから君たち二人の結婚式のことだ。もうすぐ結婚するんだろう？ 今、基地の中ではその事で持ち切りだぞ？」

「っ!？」

明人、絶句。

そう言われてみれば昨日辺りから、自分を見ては何かひそひそと話をしている連中がいるなどは思ったのだ。

そして先程のシルヴィアの笑みの理由も理解できた。

こいつだ。こいつが噂を広めやがった。どうしてそんなことをしたのか、という意味も含めて、明人はシルヴィアを睨みつける。

明人の推察どおり、結婚の噂を広めたのはシルヴィア本人だ。彼女の目的は故意に噂を流す事によって周囲から認めさせようという、いわゆる外堀から埋めるつもりなのだ。

そしてその企みは、こうして権藤の耳にまで入っているところからも成功していると言っているいいだろう。

明人の非難の籠った視線などどこ吹く風、シルヴィアはソファに座ったまま権藤の問いに答える。

「今のところまだ式の日取りは決っていませんわ。ほら、明人くんは弟さんが色々心配らしくて。少なくとも彼が高校を卒業するまでは待って欲しいと……」

「何勝手なこと言ってるんですかシルヴィアさああああんっ！？」

「ほう。既にお互いに名前呼び合う程の仲とは。白峰、おまえも中々手が早いな」

とつてもイイ笑顔でサムズアップまで披露する怪獣自衛隊城ヶ先基地司令官。単に任務に忠実なだけの人物ではないようだった。色んな意味で。

「ですから　っ！！」

更に何か言い募ろうとした明人の動きが不意に止まる。不審に思った権藤とシルヴィアが見詰める中、明人はポケットから携帯電話を取り出した。

勿論、上官との話し合いの最中なのだから、携帯はマナーモードに設定してある。

そして携帯のディスプレイに表示された名前は和人のものであった。

「すみません、ちょっと失礼します」

明人は権藤とシルヴィアに一言断わると、彼らに背を向けて弟からの電話に出る。

「こら、和人。兄ちゃんは仕事だぞ！ やたらと電話してくるなと普段から言ってるだろ？」

和人に文句を言う明人。だが、返ってきた和人の声は緊張を孕んでいた。

『それ……どころじゃ……ねえよ……兄ちゃんっ!!……怪獣が……来る……みたいだ』

電話の向こうの和人の声は途切れ途切れだ。おそらく走りながら電話をかけているのだろう。

『あいつら……幻獣……たちが言ってた……怪獣が来れば……判るって……っ!!』

怪獣。その言葉を聞いた途端、明人の表情が引き締まる。

「判った！ 大至急迎撃準備に入る！」

それだけ伝えると明人は電話を切り、自分を注視している二人に向けて告げる。

「間もなく怪獣が現われますっ!!」

和人は電話を切ると、走る事に集中した。

「ちっ……くしょ……っ!! 茉莉の奴……どうしてあんなに……走るのが速いんだ……っ!？」

全力で駆ける和人の前方、茉莉はどんどん小さくなる。

和人だって決して足が遅い訳ではない。それなのに彼我の距離は開く一方。この速度は明らかに異常だ。

「あの小娘は幻獣の契約者。ベリルから魔力による補助を受けておるのだから」

和人の横を彼と同じように走る幻獣の少女は涼しい顔で走りなが

らそう説明した。

このままでは離される一方だ。何とかしなければと考える和人の脳裏に、一つの案が浮び上がった。

そして和人は茉莉の後を追うのを止め、突如進路を変更する。

「む？ 何処へ行こうというのだ？ 主よ。あの小娘の後を追うのではないのか？」

不審に思った幻獣の少女が和人に問いかける。

「毅士の家っ！！ ここからすぐ近くなんだっ！！」

そのまま和人は二つほど角を曲がると、一軒の八百屋へ飛び込む。その八百屋の看板には『青山青果店』とあった。

「た、毅士っ！！ 居るかっ!？」

店に飛び込むなりそう叫ぶ和人。そんな和人を店にいた毅士の両親が不思議そうに見詰める中、店の奥から和人の声を聞いた毅士が現われた。

「どうしたというのだ和人？ そんな大声を出して」

いつも通り冷静な声で毅士は問う。だがそんな毅士の問いを無視して、和人は要件を告げる。

「アクセスあるだろ、アクセスっ！！ この前お前が乗っていった俺のアクセスっ！！」

「ああ、一昨日借りたおまえのアクセスなら当然あるが。それがどうかしたのか？」

「大至急必要なんだっ！！」

和人は毅士に事のあらましを説明する。勿論、毅士の両親には聞こえないように注意しながら。そして和人から話を聞いた毅士は即断する。

「それならば僕も同行しよう。すぐにアクシスのキーを取って来るから待っている」

そう言い残すと、毅士は踵を返して奥へと戻る。しばらくすると、キーとヘルメットを持った毅士が戻って来た。

そのまま和人と毅士、そして幻獣の少女は店を出て店の裏手へと廻る。店の住居部分の片隅に、見慣れたスクーターが止めてあった。YAMAHAブランドアクシスYA100W。この100ccのスクーターが和人の愛車だった。

このスクーターは一昨日毅士が和人の家に泊まった際、翌日学校へ行く前に自宅に寄りたいと言った毅士に和人が貸し、そしてそのまま毅士の家に置きっぱなしになっていた。

イグニッションを押しエンジンをスタートさせる和人と、その傍らに立つ幻獣の少女を見比べながら毅士が問う。

「彼女は どうする？ アクシスでは三人は無理だぞ？」

「気にするな、我は幻獣ぞ。このような機械に頼らずとも疾くと駆ける事など造作もない。それより主よ。お主はあの小娘の居場所が判るのか？」

少女の言葉に和人は思わず動きを止める。

魔力でブーストされた茉莉を追いかけるのにバイクを使用するというアイデアは良かったが、肝腎の茉莉を見失ったのでは意味がない。

だが困惑する和人の耳に、相変わらず冷静な毅士の声が響く。

「彼女にはこの街の土地勘がない。ここに来てまだ間がないからな。そんな彼女が行く所と言えば、これまでに行つたことのある場所だろう。おそらく彼女は」

そこまで言われて和人も思い至つた。茉莉はきつとあの場所に向かつたに違いない。

「急ごう毅士っ！！ アクシスなら茉莉に追いつけるっ！！」

和人はメットインから取り出したジェット型のヘルメットを被ると、こちらもジェット型のヘルメットを装着済みの毅士をリアシートに乗せてアクシスを発進させた。

そして幻獣の少女もまた地を蹴って舞い上がる。少女は屋根や電柱の先、街灯の先端などを次々と足場にして和人たちに追従する。

目指すは和人が末莉や幻獣の少女と出会つた、あの岬の先端。

14 - 襲来（後書き）

今日の更新。

皆様のおかげをもちまして、順調にアクセス数が増えております。毎日来ていただける皆様、もしくは初めて来ていただいた方々。本当にありがとうございます。

取り敢えずの一区切りまであと10話ほど。今後ともよろしくお願ひします。

権藤の指示により偵察用のOH-6D観測ヘリ3機が離陸してから十数分、今だ怪獣発見の報告は入っていない。

だが権藤は、そして明人もシルヴィアも、怪獣が現われる事をほぼ確信していた。

幻獣たちが嘘を言うとは思えない。彼らが人間に嘘を教えて何かメリットがあるとは思えないからだ。

勿論、人間と幻獣とでは価値観がまるで違うと言われているので人間の主観だけで判断するのは危険だが。

そう言ったのは、明人が和人からの電話の内容を聞いた時のシルヴィアだ。そして権藤も彼女の意見に賛成し、直ちに観測ヘリを飛ばすよう指示を出した。

その後は権藤とシルヴィアは指揮室、明人は『騎士^{ナイト}』のコクピットでヘリからの報告を待ちながら待機していた。

それから長いような短いような数分が過ぎた時、観測ヘリの一機から通信が入った。

「観測ヘリから入電！ 城ヶ崎市沖38キロ地点の洋上で、ゆっくりと城ヶ崎方面へ移動するものを発見！ 大きさから見て小型の怪獣と思わるとの事です！」

指揮室のオペレーターの一人が入電を読み上げると、権藤の表情が一層厳しいものとなった。

「小型の怪獣……ですか。一昨日のアルマジロンではないようですね」

権藤の傍らに立つシルヴィアが、確認するように権藤に告げた。

「そのようだな。一昨日とは別の怪獣と考えるべきだろう」

権藤は厳しい表情のままシルヴィアへと向き直る。

「今日こそ『騎士』を出す。小型相手なら初の実戦相手に丁度いいかもしれん」

「了解しました」

シルヴィアは敬礼をして権藤に伝えると、『騎士』のコクピットにいる明人へと魔道パスを繋ぐ。

「準備はいい、白峰三尉？ 今日こそ『騎士』を出すわ！」

「はいっ！！ 了解しましたカーナー博士っ！！」

気合いの籠った明人の返事と同時に、巨人の瞳に灯が灯る。

真紅の巨大な騎士が、再び眠りから目醒めたのだ。

和人と毅士は、岬の付け根の「立ち入り禁止」の看板のある所でアクシスから降りた。

「きつと茉莉くんはこの辺りに居るはずだ。手分けして探そう」
「判った！」

二人は有刺鉄線を潜り抜けると二手に分かれた。

和人は毅士と別れると岬の先端を目指す。一昨日、茉莉はそこにいたからだ。

そしてやはり一昨日同様、その途中で異様なうねりを見せて荒れ

始めた海を見る。

「くっ、あいつらの言う通り、本当に怪獣が来たみたいだな。もしかして一昨日現われたアルマジロンって奴がまた来たのか？」

和人が思わず立ち止まってそう呟いた時、これも一昨日と同じように空から幻獣の少女が舞い降りた。

「それは違うぞ、主よ。^{おんじ}今、海の中における奴は一昨日の奴よりも魔力が弱い。もつと小さな別の奴であろう」

「別の怪獣だつて？」

一昨日のアルマジロンは約一年半ぶりにこの城ヶ崎に現われた。だが、それから2日で別の怪獣が現われるとは、いくらこの城ヶ崎が怪獣の『通り道』であるとはいえ、異様な出現確率ではないか。そんな考えが和人の脳裏を過る。

「どうして急に立て続けに怪獣が……。単なる偶然か？」

「いや、偶然ではない」

「えっ？」

「今、この街には強い魔力を持った人間が多く存在する。主の兄者に魔術師の女。そして彼ら程ではなくとも、他にも魔力を宿した人間もいるであろう。その中でも抜きん出て膨大な魔力を秘めた人間がおる。その者があ奴らを引き寄せているのだ」

「膨大な魔力を秘めた人間……？」

本物の魔術師であるシルヴィアや、その魔力を見込まれて自衛隊の新兵器のパイロットに選ばれた明人。そんな彼ら以上に魔力を持った者など、和人には想像もつかなかった。

そして次に少女の口から発せられる言葉に、和人は雷で打たれた

ようなショックを受ける事となる。

「何惚けたような顔をしておるか。膨大な魔力を秘めた者とは、主、お主自身の事よ。怪獣はお主目当てにこの街にやって来るのだ」

荒れ狂う海が割れる。その割れた海の中から、細長い身体をした巨大生物が現れた。

「怪獣出現！ 城ヶ崎沖5キロの海上！」

「全長は約10メートル！ 小型サイズの怪獣と認定！」

「怪獣はさらに城ヶ崎に近付いて来ます！」

オペレーターたちの声に応じるように、権藤は低く、それでいてよく通る声でその言葉を発する。

「『騎士』出撃！」

権藤の命に従い、怪獣自衛隊城ヶ崎基地内の海に面した敷地の一部が、ゆっくりと左右に割れてその下に伸びる巨大な空洞を顕にした。

その縦に伸びた空洞を、重い音を響かせながら何かげせり上がって来る。

そして真紅に輝く鎧を纏った巨大な騎士が、跪いた姿勢でその姿を徐々に夏の陽光の下に現してゆく。

昇降リフトが完全に上がりきると、明人は『騎士』を跪かせた態勢からゆっくりと立ち上がらせる。

真紅の巨大な騎士。その手には怪獣を倒すべき剣と我が身を守る楯。

これが怪獣自衛隊の対怪獣用兵器『魔像機』、その実戦配備第一

号機『騎士』が、その勇姿を人々の前に現した瞬間だった。

『騎士』が姿を現したのを、毅士は基地から少し離れた岬の途中で目撃した。

「あれが……自衛隊の対怪獣用の秘密兵器……」

毅士は足を止めて呟いた。

しかもあの巨人には、毅士には未知の技術である魔術が応用されているという。

人類は怪獣に対して決して無力ではない。その事を毅士は実感した。

そしておそらく、あの巨人を動かしているのは親友の兄である人物だろう。

毅士は茉莉を探すという当初の目的を完全に忘却し、ゆっくりと海へと近づく巨人に見入ってしまったていた。

その頃、和人もまた真紅の巨人を目にしていた。

だが彼は、毅士のようにその勇姿に見蕩れる事はなかった。それ以上の問題が、和人の前に突き付けられていたのだから。

「お、俺が……怪獣が現れる……原因……？」

喉が掠れて声が上手く出ない。それでも和人は何とかそれだけの言葉を口にした。

「如何にも。主の放つ魔力の煌めきは、あ奴らにとって闇を切り裂く一条の光明。灯に引き寄せられる羽虫の如く、怪獣は主の魔力に

惹かれるのだ」

「どうして怪獣が魔力に……」

和人の視線は海岸線に到着した真紅の巨人に向けられている。だがその意識は傍らの少女に釘付けにされていた。

「奴らの本体は、我ら幻獣と同じ魔石だという話はしたな？　だが奴らは身体を形作る構成が我ら幻獣とはやや違う。我らは核たる魔石の魔力を自由に引き出せるが、あ奴らは他の生物と同化しているために魔石の魔力を上手く引き出すことが叶わぬ。そして魔力が引き出せぬと、その身体を維持することができなくなる。それでは自分で魔力が賄えぬならどうするか？　応えは至極簡単、他から摂取すればよい」

「そ、それじゃあ怪獣が人間を襲って食べるのは……」

「然様しかり。魔力を補充するためだ。尤も、身体の殆どを取り込んだ生物の構成に頼っている奴らは、魔力以外にも栄養素が必要となる。魔力と栄養、二つの要素を同時に満たせる餌こそが人間なのだ」

勿論、怪獣が捕食した人間全てが、魔力を有していたというわけではない。

怪獣は魔力を宿した人間を本能的に嗅ぎ分ける事ができるが、魔力を有した人間だけを選別して捕食する程怪獣の知能は高くないのだ。

だから魔力を有していると思われる人間と、その周囲の人間を同時に纏めて捕食する。こうすれば魔力の補給も賄えるし、栄養分も同時に補給できる。

単に栄養が必要だというのなら怪獣の巨体に見合う、人間よりも大きな生物はこの地球上に幾らでもいる。それなのに、怪獣が人間以外を捕食したという報告例はない。

魔力と栄養の同時補給。それこそが怪獣が人間を好んで捕食する

真の理由だった。

「人間たちが『通り道』と呼んでおる場所を調べれば、高い魔力を有する人間が一人、もしくは複数存在しておるう。その者たちの放つ魔力こそが、何度も怪獣を引き寄せるのだ」

「じゃ、じゃあ……俺のせいで街が……父さんと母さんが死んだのも……俺のせいで……」

「主のせいではあるまい。怪獣が現れる原因は確かに主かもしれないが、だからと言って怪獣の犠牲になった全ての責任まで主のせいではないぞ」

「だ、だけどつ！！俺がいなければ怪獣は現れなかったんだろっ！？ そうしたら誰も死ななくてもよかったじゃないかっ！！」

「そうとも限るまい。この街には主ほどではなくとも高い魔力を持つ者が大勢おる。例えば主がこの街におらずとも、怪獣はこの街に現れたであろう」

「で、でも……これからは俺目当てに怪獣は何度も現れるんだろう？」

「なに、それを防ぐ手段ならあるぞ」

和人は驚いて幻獣の少女に振り返る。少女の表情は真剣なものであり、決して嘘や慰めを言っているようには和人には思えなかった。

「ど……どうすればいい？ どうすれば怪獣は俺を目当てにやって来なくなる……？」

和人の問いに、少女はあくまでも真剣な表情で応える。

「我と契約するのだ。そうすれば怪獣は主の魔力に惹かれる事はなくなるだろう」

「どうやら現れたようだぞ、茉莉」
「うん。そうみたいだねベリル」

茉莉はベリルと共に、岬の先端に程近い林の中に身を潜めていた。
またもや全裸で。

「よしっ!! じゃあ行くよっ!! ベリルっ!!」
「心得た」

気合い一閃、裸のまま林を飛び出した茉莉は、そのまま岬の先端を指して駆け出そうとしたのだが、思わずその足を止めてしまった。

なぜなら、林から飛び出した彼女たちの前に、どういっわけか和人と幻獣の少女がいたからだ。

「か……和人っ!?! どうしてこんな所にいるのっ!?!」

立ち止まって和人に問いかける茉莉。だが和人は茉莉の問いに答える事もせず、目を丸くして黙って茉莉を見詰めているだけだった。

「ま……茉莉……お……おまえ……ど……どうして……」

途切れ途切れの和人の言葉が茉莉の耳に届く。

「どうしておまえはまた裸なんだよおおおおおっ!?! まさか本当に露出の癖があるんじゃないだろうなああああっ!?!」

和人の叫びに、茉莉は今の自分の姿を思い出した。そして思い出した瞬間、体中を真っ赤に染めてその場でうずくまる。

「ば……馬鹿っ！！ こっち見るなっ！！ そんなに見つめちゃだめえええええっ！！」

「だからどうして裸でいるんだよ、おまえはっ！？」

和人からしてみれば、思わぬ事実を幻獣の少女から突き付けられている時に、傍らの林からいきなり裸の茉莉が飛び出して来たのだ。目を丸くして凝視しても仕方ないというものだろう。

おかげでそれまでの重苦しい空気はどこかへ行ってしまったのだが。

「だ……だって、ベリルと融合すると、着ていた服は消えてなくなっちゃうんだもん」

ベリルが言うには、融合する際に不純物である衣服は消滅してしまうのだとか。だから茉莉は、ベリルと融合する時は予め服を全て脱いでいたのだ。

「これまでに、何着もの服を融合の時になくしちゃって……これ以上服がなくなったら、本当に着る物がなくなっちゃう」

茉莉が服を僅かしか持っていなかった理由の一つが、実はこれであつた。

「あー、そ、そうか。わ、悪かったな、露出狂かと疑って……」

和人はくるりと背を向けて、どこかずれたような謝罪を述べる。

だが茉莉に背を向けたことで、真紅の巨人とウナギによく似た怪物が、今まさに交戦状態に入る瞬間を和人は目にする事となった。

15 - 真実（後書き）

本日分です。今週末はなんとか更新できました。

先日、総合アクセス数が1000を超えましたと書き込みましたが、あっという間に2000に到達しそうです。

これも全てここに来て拙作を読んでくださっている皆様のおかげです。感謝致します。

今後もよろしくお願いします。

明人は『騎士』^{ナイト}を海岸線まで移動させた。

一昨日初めて魔像機に乗った時のような不安定感は、今日の明人にはまるでない。

たった2日とはいえ、シルヴィアの指導の下で魔力を扱う修行を行った成果である。そしてたった2日で成果を現した明人の才能でもあった。

明人の前方、海岸からほんの少しの地点で細長い身体の怪獣がこちらを見詰めている。もしかするとこの『騎士』が何なのかを見定めているのかもしれない。

『白峰三尉。相手は水中に適合した個体だと思われるわ。水際はこちらが不利よ。何とか陸上へ誘い込みなさい』

「了解っ!!!」

魔道パスを通じて伝わるシルヴィアの声に明人は返事を返すと、右腕に内蔵されたガトリングガンポップアップさせ、その銃口を怪獣へと向ける。

甲高い回転音と共に、ガトリングガンから無数の銃弾が吐き出される。

魔術によって威力を高められた30ミリ口径の銃弾は、容易に怪獣の身体を貫いた。

己の身体を貫く無数の鉛の塊に、怪獣は痛みと怒りで身体を大きくうねらせながら自分を傷付けた真紅の巨人に向けて突進する。

だが、この怪獣は魚型であり、水中でこそ高速で移動できるものの、陸に揚がってしまったてはその動きは格段に鈍かった。

その動きの鈍くなった怪獣の突進を、真紅の巨人は難なく回避す

る。

そしてすれ違いざまに、右手に持った巨大な剣を一閃。

剣は魚型の怪獣の身体を大きく切り裂き、辺りにどす黒い怪獣の血が撒き散らされた。

「あのロボットみたいなのに、明人さんが乗ってるの？」

「ああ。あれが自衛隊の新兵器って奴だろう。だったらあれに乗っているのは兄ちゃんだと思う。そんなことをシルヴィアさんが言うてただろ？」

そういやそんなことも聞いた気がするなと、茉莉は裸でうずくまっただま考えていた。

その茉莉の肩に、和人は自分の制服のシャツを脱いでかけてやる。

「兄ちゃんたちがああやって頑張っているんだ。何もおまえが戦うことなんてないだろ？ それに兄ちゃんの方が優勢みたいだしな」

茉莉は和人のシャツに袖を通し、ボタンを全てはめるとようやく立ち上がる。茉莉にはちよつと大きめの和人のシャツは、茉莉の身体を覆い隠すのに充分だった。

「でもボク、決めたんだ。怪獣と戦うって」

強い意志を瞳に秘めて茉莉は告げる。

「それでももう少し待ってみたらどうだ？ 少なくとも兄ちゃんがピンチになってからでもいいだろ？ ここからならすぐにあそこまで行けるんだから」

茉莉にそう言うと、和人は再び幻獣の少女の方へと向き直る。

「それより、さっき言った契約すると怪獣の目標とされなくなるってどういうことだ？」

「簡単なことだ。我らは自分以外の幻獣との契約者は敏感に感じ取ることができる。我がその小娘を契約者だと見抜いたようにな」

言われてみれば一昨日、確かにこの少女は茉莉を契約者だと瞬時に見抜いていたことを和人は思い出した。

「契約者の傍らには常に幻獣がいる。そして契約者の魔力が高ければ高い程、契約を交わした幻獣の力もまた大きいもの。そのことはあ奴らも本能的に悟るであらう」

つまり、幻獣の力が大きければ自分が傷付くリスクも高くなるということ、怪獣たちも判っているのだ、と少女は言う。

「そして我は幻獣の中でも幻獣王と呼ばれる存在。そんな我に挑むような愚かな眷族はそうそうおらぬわ」

「ねえ、本当なのベリル？」

少女の言葉を聞いて、茉莉は自分のパートナーに尋ねた。

「確かにあの少女は幻獣王だ。全幻獣の中でも三体しか存在せぬと言われる幻獣王。その内の一体だ」

「あ、あの娘って、そんなに強力な幻獣だったの……？」

ベリルの説明を聞いた茉莉は、改めて畏怖の念の籠った視線で少女を見る。

幻獣の少女は、そんな茉莉の視線など気にも留めずに和人を真つ

正面から見据える。

「改めて問おうぞ、主よ。主は我と契約を交わすや否や？」

少女はそう言いながらその白い織手を和人へと差し出した。

怪獣自衛隊城ヶ崎基地の指揮室には、張り詰めていながらも、どこか安堵したような空気が流れていた。

「魔像機、パラメータに異常は見受けられません」

「白峰三尉の魔力も安定しています」

オペレーターたちが次々に報告する事柄を聞きながら、権藤は怪獣と交戦中の『騎士』から目を離さずにいた。

「どうやらウナギンゴ程度の小型が相手なら、『魔像機』の方が圧倒的に優位に立てるようですね、カーナー博士」

「そ、そうですね、司令」

シルヴィアは生返事を返しながら別の事を考えていた。

(こ、今度はウナギンゴなのね……)

そして、もうこの人のネーミングセンスには期待しないでおこうと心に決めた。

そんなシルヴィアの内心の落胆など気付く訳もなく、権藤は正式にあの怪獣をウナギンゴと呼称すると通達したのだった。

「行ける！ 行けるぞっ！！」

明人は『騎士』のコクピットで一人喝采を上げていた。

この『魔像機』のパワーは予想以上で、目の前の怪獣がまるで相手にならない程だ。

勿論それは相手が小型であることと、ウナギンゴにとって不利な陸上に揚がってしまったということもあるだろう。

それでも、シルヴィアの造ったこの『魔像機』が怪獣に通用する事は証明できただろう。

明人は改めて目の前のウナギンゴに集中する。現在ウナギンゴは陸上でその細長い身体をぐたりと横たえ、頭部だけを持ち上げてじつと『騎士』を睨みつけていた。

ウナギンゴの身体は『騎士』の剣で切り裂かれ、ガトリングガンで孔だらけだ。普通の生き物ならとつくにその命を終えているだろうが、さすがは怪獣、並みの生命力ではない。

更に和人は巧みに『騎士』を操って、本来のフィールドである海とウナギンゴを隔てることに成功していた。つまり『騎士』を常に海とウナギンゴの間に移動させることで、ウナギンゴを海に戻れないようにしているのだ。

「あの辺りは白峰三尉の戦闘センスの良さね。大したものだわ」

シルヴィアは指揮室のモニターを見詰めながら、『騎士』の巧みな間合いの取り方に感心していた。

「ああ見えて白峰三尉に剣道で勝てる者は、この基地にはおらんかならな」

明人が剣道に強い理由、それは先天的な空間把握能力によるものだった。

空間把握、つまり間合いの取り方が絶妙に上手いのだ。相手の剣が届かないぎりぎりを見極めて常にその間合いを保ち、相手の剣を躲した瞬間に自分の剣を相手に叩き込む。それが明人の剣道の必勝パターンだ。

その必勝パターンは今、ウナギンゴ相手にも作用していた。ウナギンゴの突進を躲し、その際に生まれた隙について剣を揮う。正に明人の必勝パターンだった。

このまま行けば遠からず『魔像機』は怪獣相手に勝利を納めるだろう。そしてそれは、人類にとって確かな希望の光となる。

誰もがそう思った時だった。ウナギンゴが誰も想像もしないような行動に出たのは。

「う……嘘だろ……？」

その光景を少し離れた岬から見ていた和人は、自分の目が信じられなかった。

ウナギンゴが空を舞った。

言葉にすればそれだけだ。だが、その事実は皆のど肝を抜くのに充分な光景だった。

長い身体を横たえていたウナギンゴが、突如蛇のようにとぐるを巻いたかと思ったら、まるで縮めた発条を伸ばしたかのように空高くジャンプしたのだ。

高々と空を舞ったウナギンゴは、『騎士』の頭上を飛び越えてそのまま海の中へと落下した。

「し、しまったっ!？」

まさかウナギンゴにあれ程の跳躍力があるとは思いもしなかった

明人は、その反応を僅かに遅れさせた。

そしてほんの瞬寸、無防備になった『騎士』にウナギンゴは己を傷付けられた怒りを込めて反撃する。

ウナギンゴの周囲の海から水柱のようなものが数本立ち上がる。

その水柱はぎりぎり回転を始めると、まるで水のドリルのように旋回しながら、ようやくこちらを向いた『騎士』に襲いかかった。

次々と『騎士』に直撃する水の槍。その槍は『魔像機』の装甲を貫くのに十分な威力を持っていた。

「そ、そんなっ!? あれは水系魔術じゃないっ!?」

その光景を見ていたシルヴァアが叫ぶ。

『魔像機』の装甲には物理衝撃に耐えるような魔術は施してあるが、対魔術用の施術は施していない。

まさか怪獣が魔術を使うとは思いつかなかったからだ。

シルヴィアは幻獣の少女の言葉を思い出す。怪獣とは魔石、つまり賢者の石と他の生物との融合である。

ならば賢者の石を核に持ち、魔術的な存在である怪獣が魔術を使ったとて別段不思議な事ではない。

改めて考えればその通りなのだが、シルヴィアはその可能性をすっかりと失念していた。

シルヴィアは自分のうっかりをこれ程呪ったことはない。寄りにもよって、このような致命的な場面であうっきりが露呈するとは。

だが今更そんな事を悔いても始まらない。今は現状でできる事をしなくては。

「白峰三尉はっ!? 無事なのっ!?」

シルヴィアは魔像機と明人の状況をモニターしているオペレーターたちに、叫ぶように尋ねた。

「白峰三尉の生体パターンに異常は見られませんっ！！ 無事ですっ！！」

「魔像機は胸部、腹部、右上腕部、左右大腿部の装甲に異常っ！！部分的に装甲に孔が開けられました！！ ですが内部まではさほど被害は及んでいない模様で、出力の低下は10%程度です！！」

オペレーターの報告を聞いて、シルヴィアはほっと安堵の溜め息を吐く。

『自分は大丈夫ですっ！！ まだやれますっ！！』

丁度その時、明人からの通信が入る。水の槍をくらった衝撃でしばらく意識が定まらなかったが、ようやく回復したようだ。

「『騎士』の装甲では魔術は防ぎきれないわ。ウナギンゴの魔術には充分注意してっ！！ 不用意に近付いてはだめよっ！！」

「了解っ！！」

真紅の巨人が窮地に追い込まれたのは、和人と茉莉にも理解できた。

「ボク、行くよ。このままだと明人さんが危ない」

和人と茉莉は正面から見詰め合う。そして茉莉の瞳を見た和人は、彼女を思い止まらせる事は不可能だと察した。

「判った……兄ちゃんを頼む」

「うん！ 任せて！ じゃあ、ちょっとむこう向いててくれる？」

茉莉は和人から借りていたシャツを脱ぐと、背中を向けている彼の肩にそのシャツをかける。

「茉莉？」

「だ、だめっ！！ こっち向いたら絶対にだめだからねっ!？」

思わず振り返りそうになった和人に、そう言い残して茉莉は走り出す。その彼女の後ろをベリルが付き従うように飛ぶ。

ベリルが茉莉に追いついた瞬間、茉莉の身体が碧色に輝く。碧の光玉と化した茉莉とベリルは、そのまま高速で空を駆ける。怪獣と戦う真紅の騎士の下へと。

明人は再びガトリングガンをウナギンゴに向けて放つ。

だが、一秒間に数十発も吐き出された弾丸は、ウナギンゴが展開した水のスクリーンのようなものにとごとく遮られた。

「もうガトリングは効かないのかっ!？ たたく、余計な学習なんかしやがって……っ!！」

愚痴を零す明人だが、ガトリングガンが封じられたとなると、『騎士』に残された武装は右手の剣しかない。

シルヴィアの話では『魔像機』用の手持ち火器も開発中との事だが、今現在ないものをどうこう言っても始まらない。

(こつなりや、奴の懐に飛び込むしか……)

魔術とはいえ、必ず命中するというものでもない。機体を捌いて躲し、剣で弾き、楯で受け止める。そうすればウナギンゴに剣が届

く距離まで踏み込めるはずだ。

乾坤一擲。のるかそるか。

明人は覚悟を決め、『騎士』を波打ち際で待ち構えるウナギンゴ目指して走らせる。

地響きを立てて疾走する真紅の騎士に、ウナギンゴは6本の先程と同じ水の槍を打ち込む。

1本目、2本目の水の槍は機体を最小限の動きでやり過ごす。

3本目、4本目、5本目の槍は楯で受け止めた。だが、そのせいで楯には細かい亀裂が無数に走る事となった。次に楯で受け止めたら、おそらく楯は完全に破壊されるだろう。

6本目は剣で弾き飛ばした。だがこれで水の槍はお終いだ。そして『騎士』はその剣が届くまであと数歩の距離にまで迫っていた。

『騎士』は更にその数歩を踏み込み、剣で水の槍を弾き飛ばした際に振り抜いた腕を、そのままウナギンゴ目がけて再び振り抜く。

勝ったっ！！

明人は確信した。この間合い、踏み込み、剣を振るタイミング。これで躲される筈がない。そして明人には、『騎士』の剣が固い何かを切り裂く感触が伝わってきた。

しかし次の瞬間、『魔像機』のモニター越しに明人は信じられない光景を目にする。

確かに『騎士』の剣は半ばまでそれを断ち斬っていた。だがそれはウナギンゴの身体ではなく。

先程ウナギンゴがガトリングガンを防いだ時に展開した水のスクリーン。

そのスクリーンが今度はウナギンゴと『騎士』の剣の間に展開されていた。『騎士』の剣が半ばまで断ち斬ったのは、この水のスクリーンだったのだ。

「な……んだと……っ!？」

思わず呆然とする明人。そして『騎士』の剣を受け止めた水のスクリーンが不意に消失する。

不意の事でバランスを崩す『騎士』。明人は慌てて魔像機の態勢を整えようとするが、その数瞬が致命的だった。

バランスを崩して無防備となった真紅の騎士の胸を、ウナギンゴが放った水の槍が貫いたのは刹那の後だった。

16 - 騎士（後書き）

本日の投稿。

最近、お気に入り登録してくださった方がありました。ありがとうございます。
うございます。

アクセスもお気に入り登録も徐々に増えております。
これらは全てここに来ていただいている皆様のお陰です。感謝致します。

今後もよろしく願います。

「『騎士^{ナイト}』胸部大破っ！！ 被害甚大っ！！」

「『騎士』の出力、10%以下にまで落ち込んでいますっ！！ もうまともに動くことは不可能ですっ！！」

「そ……そんな……」

シルヴィアの顔色は蒼白だった。戦局は先程まで『騎士』が圧倒的に優勢だった。それがほんの僅かなことでひっくり返されてしまった。

これが怪獣。

常識などいとも簡単に覆すもの。

相手は超常の存在、どのようなことだってありの相手。

判っていた筈だ。それなのに『魔像機^{ゴレム}』を、自分の技術を過信して油断してしまった。

シルヴィアの膝はがくがくと震え、今にも崩れ落ちそうだ。そんな彼女の様子を知ってか知らずか、彼女の代わりに権藤の叫び声がオペレーターに飛ぶ。

「白峰三尉は無事かっ！？ 大至急確認しろっ！！」

「現在『騎士』からの信号の大部分が途絶していますっ！！ パイロットの安否は不明ですっ！！」

権藤はオペレーターの返答に舌打ちをひとつすると、直ちに次の司令を下す。

「待機中の戦車隊、並びに戦闘ヘリ隊を展開させろっ！！ 奴を『騎士』に近づけさせるなっ！！」

そして権藤は全ての命令を下すと、相変わらず隣で棒立ちのシルヴィアに向き直って右手を閃かせた。

指揮室に乾いた音が響き渡る。

シルヴィアは突如痛みの走った頬を押さえながら、目の前に立つ権藤を呆然と見詰めた。

「惚けてる暇はありませんぞカーナー博士。白峰はまだ生きていますかもしれないのです！」

権藤の言葉に、シルヴィアの瞳に正気が戻る。

「そ、そうでした。白峰三尉が生きていますなら、何としても救助しなくては。結婚する前から未亡人にはなりたくありませんもの」

シルヴィアは冗談を一つ飛ばすと、必死に状況を把握しようとするオペレーターたちに声をかける。

「『魔像機』からの信号、まだ回復しない？」

「まだだめです！ さっきから何度もパスを再結しようとしていますが……」

「そちらは私がやるわ。あなたたちは怪獣の動向に注意していて」

シルヴィアはそう指示をだすと、隣の権藤に悪戯っぽい目を見る。

「申し訳ありませんが、司令。しばらくこちらを見ないでいただけますか？ 夫となる人物以外に肌を晒す気はありませんの」

明人あたりが聞いたなら即座に「嘘付けっ！！ もう和人たちに見

せただろっ！！」とつつこみそうな台詞を吐くと、シルヴィアはその場で服を脱ぎ出した。

以前シルヴィアが明人にも説明した事だが、魔力は身体の表面から放射される。身体の露出面積が大きい程放射される魔力も増え、大量の魔力を必要とする大魔術の行使が可能となる。

シルヴィアは下着以外の服を全て脱ぎ捨てた。彼女程の一流の魔術師が半裸で取り行う魔術となれば、当然複雑で難易度の高い施術だろう。

背筋を伸ばして目を閉じて精神を統一させると、シルヴィアは単音節の言葉を紡いだ。

その言葉に反応し、彼女の足元に複雑な幾何学模様が浮び上がる。シルヴィアを中心に巨大な魔方陣が展開され、その巨大な魔方陣を補助するかのよう小型の魔方陣が、巨大な魔方陣の周囲に幾つも描き出される。

魔方陣はそれぞれがばらばらに回転していたが、徐々に回転が統一されていき、今では全ての魔方陣が同じ速度でシルヴィアを中心に回転していた。

陣の内部に無形の力が渦巻く。その力の奔流に肩で切り揃えられたシルヴィアの髪が巻き上げられる。

そして魔方陣内部の力が最高潮に達した時、シルヴィアの意識は肉体を離れ海辺で横たわった真紅の騎士の下へと飛んだ。

ウナギンゴは目の前に倒れ伏した真紅の巨人を見下ろしていた。自分に幾つもの傷をつけた巨人。その巨人もこの有り様だ。

ウナギンゴは巨人に止めを刺そうと、一際巨大な水の柱を作り出す。その柱がゆっくりと回転を始め、真っ直ぐだった柱がぐにやりと曲がってその先端が巨人へと向けられる。

巨大な槍と化した水柱を振り下ろそうとした時、ウナギンゴは膨大な魔力が脹れ上がるのを感じた。

ウナギンゴは魔力を感じた方へと首を回らす。そして怪獣の目に飛び込んできたのは、碧に輝く光球が真っ直ぐに自分目がけて突っ込んで来るところだった。

怪獣は巨人に向けていた水の槍の矛先を碧の光球へと変更する。そして間髪入れず槍を射出した。

打ち出された槍は真っ直ぐに碧の光球へと飛ぶ。だが槍が光球に突き刺さるより早く、光球は自ら弾け飛ぶ。

中から現れたのは全長40メートル近い巨大な怪鳥。茉莉と融合したグリフォンだ。

グリフォンは迫り来る水槍を難なくひらりと躲した。

（相手は小型とはいえ、今見た通り魔術を行使するタイプだ。油断するな茉莉）

（うん、判ってる。でも明人さんから怪獣を引き剥がさないと）

グリフォンは挑発するように怪獣の近くをひらりひらりと飛び回る。そんなグリフォンにウナギンゴはしきりに水槍を放つが、機動性に優れるグリフォンはそれを余裕で躲し続ける。

そしてグリフォンに挑発されたウナギンゴは、徐々に倒れている巨人から離れていった。

（そろそろいいわよね、ベリル？）

（ああ。これだけ距離を取れば大丈夫だろう）

（じゃあ反撃開始と行きますか！）

茉莉のその決意と同時に、グリフォンの周囲を流れる風に異変が生じた。

ウナギンゴが水の魔術を使えるように、グリフォンは雷系と風系の魔術を使う事ができる。

グリフォンは風で刃を作り出しウナギンゴ目がけて放つ。

この風の刃はグリフォン最強の雷弾程の威力はないが、魔術の飛翔速度が高く命中させ易い魔術である。

アルマジロンのような硬い装甲の怪獣には余り効果のない魔術だが、ウナギンゴのように比較的身体の柔らかい怪獣には効果的な魔術でもある。

迫り来る風の刃を、ウナギンゴは水の槍で迎撃する。しかし風の刃の速度に水の槍は追いつかない。風の刃は水の槍を掻い潜り、ウナギンゴへと殺到する。

『騎士』の剣で付けられた傷以上の傷を、風の刃はウナギンゴの身体へと刻みつける。

水の槍での迎撃を諦めたウナギンゴは、前面に水のスクリーンを展開した。

だがこれはグリフォンも予測していた。だからグリフォンは予め用意しておいた手段を行使する。

グリフォンの周囲に黒と白の二つの球体が出現する。黒と白の球体はそれぞれ、ウナギンゴが展開する水のスクリーンの左右の端へと向かって飛ぶ。

グリフォンから2つの球体が放たれたのを見たウナギンゴ。

その球体が水のスクリーンの左右へと飛んだ時、ウナギンゴは、2つの球体がスクリーンを迂回して自分へと向かってくるのだらうと推測した。

実はウナギンゴの知能は、怪獣の中でも郡を抜いて高いレベルにあった。

これは幻獣の少女やベリルさえ知らぬ事実だったが、魔術を行使する怪獣の中には人間並みの高い知能を持つものが稀に存在するのだ。

だからウナギンゴはスクリーンを咄嗟に変化させた。前方だけに展開するのではなく、前後左右上面の全てを覆う半球型の防御膜へと。例えば球体が如何なる力を秘めていようが、これで自分に害を与える事はできないとウナギンゴはそうほくそ笑んだ。

ウナギンゴの思惑はともかく、黒と白の球体は左右に別れてそれぞれで位置で水の防御膜に触れると、白い球体から黒い球体へと電流を流し始めた。

陽極である白い球体から陰極である黒い球体へ。水の防御膜の中を電流が走り抜ける。

勿論電流は水の防御膜の中を流れるので、防御膜に接していないウナギンゴには何の影響もない。

だが水の中を電流が流れる事で、防御膜を構成する水に変化が起き始めた。

水の中を電流が流れる事で水は電気分解を起こす。

いや、正確には電気分解が起きるために電流は水中を流れるのだ。そして分解された水は陽極に酸素が、陰極に水素が集められる。

防護膜で閉じられた空間の中で、集めた酸素と水素をベリルが風を操って適度な濃度に混合する。この混合濃度を正確に把握できる者がいたら、その割合が水素と酸素の体積比が正確に2対1であることに驚いたであろう。

そして水素と酸素が混合された時、黒と白の球体は小さく爆発した。

球体自体の爆発は極めて小さいものだった。しかし、その爆発は水素と酸素の混合気体に引火する。

水素と酸素の混合気体は、水素爆鳴気と呼ばれる現象を引き起こして激しい爆発へと変化し、水の防御膜ごとウナギンゴを飲み込んだ。

シルヴィアの意識体は倒れている『騎士』に辿り着いた。そしてそのまま『騎士』の内部に侵入する。

(これは……機械部分は何とか稼働するわ。深刻なのは魔道パスの方ね)

先程のウナギンゴの水の槍の衝撃は装甲に施した強化呪詛により、そのほとんどが無効化されていた。

実際に水の槍が『騎士』の胸部を貫通したのはほんの僅かなものだが、問題はその際に機体中を突き抜けた魔力の方だった。

『騎士』の胸部を貫いた魔力は、『騎士』の内部の魔道パスをずたずたにしていたのだ。

意識を拡散させて『騎士』の状態をスキャンしたシルヴィアは、そのままコクピットへと散った意識を集中させる。

幸い水の槍は僅かにコクピットを逸れていて、コクピット自体は無事のようだった。

明人はシートの上で気を失っていた。ざっと見たところ、頭部からの出血が見られるが、さほど酷い出血という訳でもなさそうだ。

『明人くん！ 大丈夫なの？ 返事をして！』

シルヴィアは意識を失っている明人の精神に、直接語りかけて軽い刺激を与える。

「うっ……うっう……」

そしてその刺激で明人は意識を取り戻した。

意識を取り戻した明人が目を開けると、目の前に半透明のシルヴィアがいた。

「し、シルヴィアさんっ！？ ど、どど、どうしたんですかその姿はっ！？」

『今あなたが見ている私は意識体よ。意識のみを飛ばしてここにいるの。肉体の方は基地の指揮室にあるわ』

シルヴィアの説明を聞いた明人は、幽体離脱みたいなものかと理解した。

「そ、それで状況はどうになりましたかっ!?!」

「ウナギンゴなら茉莉ちゃん……いえ、グリフォンが引き付けてくれているわ」

「茉莉ちゃんがつ!?!? くっ、シルヴィアさん! 『騎士』は動かせないんですかっ!?!?」

「『騎士』は魔道パスがずたずたによ。動かすことはまず無理ね」

「そんなっ!! 茉莉ちゃんだけを戦わせる訳にはいきませんっ!

! 何とか『騎士』を動かす方法はないんですかっ!?!?」

「うっ!!」

「し、シルヴィアさんっ!?!? どうかしましたかっ!?!?」

明人の剣幕に、シルヴィアの意識体が一瞬ゆらりと揺れる。

「大丈夫よ。肉体という鎧を持たない今の私は強い感情の影響を受け易いの」

「あ………すみません………俺は自分の都合ばかりで………」

「いいのよ。それより、『騎士』を動かす方法はないこともないわ」

「ほ、本当ですかっ!?!?」

「本当よ。でもそれはかなり危険な方法。それでいて動かせるはほんの僅かではない。それでもいい?」

真剣な表情で問うシルヴィアに、明人も真剣な顔で頷いた。

先程の大爆発の余波は、少し離れた和人のいる場所にも届いた。

幻獣の少女が展開した防御壁でその余波から守られた和人。その和人の下に、別行動で茉莉を探していた毅士が駆けつけてきた。

「和人っ!!」

「毅士! おまえは怪我はないか?」

和人は毅士の方を振り向きながら問う。

「ああ、僕は大丈夫だ。茉莉くんは……戦っているのだな」

「ああ」

爆発の余波を避けて上空に避難したのだろう、大空をゆっくりと舞っているグリフォンに再び視線を戻して和人は答えた。

「だが先程の爆発はかなり大きかった。あれではいくら怪獣とはいえ無事では済むまい」

その毅士の言葉を、和人は上の空で聞いていた。

和人は無力な自分が悔しかった。明人は自衛隊の新兵器で戦っている。シルヴィアもまた、和人からは見えないがおそらく見えない所で彼女なりに戦っているだろう。

そして茉莉。茉莉も幻獣と融合して直接怪獣と戦っている。

だが自分はこうして見ているだけ。それが和人は悔しかったのだ。知らず和人の拳は握り締められていた。その拳が白くなる程に強く、強く。

そして同時に気付いていた。自分には怪獣と戦う術があるということに。

明人のように。茉莉のように。直接怪獣と戦う術が今の和人にはあるのだ。

和人の視線は、大空のグリフォンから傍らの少女へと向けられた。

17 - 爆鳴（後書き）

本日の投稿。

昨日、活動報告の方に書き込みしましたが、『怪獣咆哮』はあと6話ほどで一区切りとなる予定です。

連載そのものは続けるつもりですが、これまでのように毎日更新はできなくなりそうです。ですが、なんとか頑張って一週間に一回は更新するつもりです。

今後ともお付き合いいただければ幸いです。
なにとぞ、よろしくお願い致します。

茉莉とベリルは上空で爆煙が晴れるのを待っていた。

(どう思う、ベリル？ あれで倒せたかな？)

(判らん。だが倒せないまでも、深手を負わせた事は確かだろう)

そして爆煙が晴れる。

開けた視界の向こうに、深く傷付いたウナギンゴの姿があった。ウナギンゴの身体は力なくだらりと波打ち際に横たわっている。だが、その命は燃え尽きてはいなかった。長い身体が時々痙攣するかのよう動いている。

そのウナギンゴが首だけを力なく一度空のグリフォンへと向けると、ウナギンゴは沖に向かってずるりと身体を動かした。

(あ、あいつ、逃げる気だよ！)

(海中に逃げ込まれたら我々では手が出せん。一気に倒すぞ！)
(うん！)

上空から急降下するグリフォン。だが少々高度を取り過ぎていた。グリフォンがウナギンゴを捕えられるか際どいところだ。

(間に合うっ！？)

(大丈夫だ。奴の動きは鈍い。海中に逃げ込まれる前に捕えられる)

グリフォンの鋭い爪がウナギンゴに迫る。ウナギンゴが海中に没するにはまだ時間がかかりそうだ。何とか間に合う。そう茉莉が安堵した時だった。

ウナギンゴが再び跳ねた。

最後の力を振り絞り、ウナギンゴは先程のように跳躍した。

先程『騎士』を飛び越えたような高々とした跳躍ではない。精々数メートルを跳ぶだけの僅かな飛翔。だがそれだけの距離を跳べれば、ウナギンゴの身体は完全に海の中に逃げ込む事ができるだろう。

(しまったっ!!)

(まだ跳躍するだけの力があつたか!!)

歯噛みしながらも空しく空を切った爪を引き戻し、グリフォンはその視線を滑空するウナギンゴへと向けた。

あの白い奴は自分よりも遥かに強い。だが海中にさえ潜ぐれば、奴にはどうすることもできない。そのことをウナギンゴは知っていた。だからウナギンゴは最後の力を振り絞って跳躍を行ったのだ。

今は深い海底で傷を癒やす事を最優先にしよう。そう考えながら、ウナギンゴは目前に迫った海目がけて飛び込んで行く。

そこに待ち受けている結末など、全く想像もせずに。

その報告は、怪獣自衛隊城ヶ崎基地にもたらされた。

「観測ヘリより入電！ 何か巨大なものが城ヶ崎に近付いているそうです」

「何だどっ!？」

指揮室に権藤の驚愕の声が響く。

「巨大なものとは何だっ!？ 正確に伝えるように観測ヘリに伝えるっ!!!」

だが権藤には判っていた。こちらに近づく巨大なものが何なのか。海中から現われる巨大なもの。そんなものの正体は決まっている。決まりきっている。

単にそのことを権藤は認識しなくなかったのだ。それは現実を理解しているからこそその現実逃避でもあった。

だが現実を覆うことはない。その事を改めて認識し、権藤は重々しく一人呟きを零す。

「……………怪獣が……………怪獣がもう一体現れると言っのか……………」

自分を優しく受け止めてくれる海はもう目前だ。これで逃げ切れる。そうウナギンゴが考えた時、目の前の海原が爆発した。

そしてその爆発から巨大な影が躍り出た。そいつは目の前に迫ったウナギンゴを前脚で叩き落とすと、落下したウナギンゴの喉元にその鋭い牙を深々と打ち込んだ。

（あ……………あいつは一昨日の……………っ！！）

（ああ……………間違いない）

茉莉とベリルはその影が何なのかすぐに理解した。

海から現れた巨大な影。それはウナギンゴを襲おうとして逆に返り討ちにあつたアルマジロンだった。

背中の翼はだらりと伸ばされたまま、胸には生々しい裂傷があるものの、それはアルマジロンに間違いなかった。

そのアルマジロンはウナギンゴの喉元を食い千切ると、がっがつと咀嚼して嚥下する。

怪獣が怪獣を喰う。その光景を間近の茉莉たちも、基地内の権藤たちも、岬から見ていた和人たちもただ呆然と見詰めていた。

「怪獣が……怪獣を喰う……だと……？　怪獣でも共食いをすると
いうのか……？」
「そうではない」

呆然としたまま呟いた毅士の言葉を、幻獣の少女が否定した。

「あれは単に喰っているのではない。大きな方が小さな方を取り込んでおるのだ」

「取り込む……？　どういうことだよ？」

和人の問いに幻獣の少女は素直に答える。

「我らの眷族が極めて魔力的な存在であることは説明したの？　そしてあ奴ら怪獣が自らの魔石から魔力を引き出せないことも。我らは魔力さえあれば肉体の怪我などたちどころに癒すことができる。では魔力を引き出せない怪獣どもはどうやって傷を癒す？」

「そうか……怪獣は傷を癒すには、別の手段で魔力を得る必要があるのか」

既存生物を取り込んでいるので自然治癒もするが、魔力を得て回復させた方が遥かに早く回復するのだと幻獣の少女は言う。

そしてそれだけではないと少女は続けた。

「片方が片方の身体だけを取り込んでいるだけならいいが、もしも相手の魔石をも取り込んでしまえば、それは既に傷を癒すというレベルの話ではなくなる」

息を飲んで少女の話の話を聞く和人と毅士。そんな彼らに少女は更なる衝撃を与える。

「二つの魔石が一つになる時。それは更に強大な怪獣が生まれる瞬間だ」

「アルマジロンの身体が変化して行きますっ！！」

切羽詰まったオペレーターの声が指揮室に響く。そしてその声に応える者は誰もいなかった。何故なら、そこにいる者は皆、目の前の光景に釘付けになっていたから。

ずんぐりとしたアルマジロンの身体がすらりと細長くなっていく。太短かった四肢もやや長めに、その四肢の先の指の間には水掻きができていた。

犬科の動物のようだった頭部も細長く、どこか魚を思わせる顔つきになり、鼻先にあった角は犀のように上向きではなく、真っ直ぐ前に向かって伸びた。

ごつごつとした装甲もややスマートに。それでいてその堅牢さは少しも褪せてはいない。

大きさも40メートル程だったものが、一回り大きくなりどう見ても50メートルを超えているだろう。

それは既にアルマジロンであってアルマジロンではなかった。アルマジロンとウナギンゴ、二つの魔石が融合して全く新たな怪獣となって生まれ変わったのだ。

「怪獣と怪獣が融合するなど……聞いた事もない……」

権藤は意見を求めようと傍らのシルヴィアへと振り返る。だがそこには下着姿で呆然と立ち尽くすのみのシルヴィア。

「か、カーナー博士は一体どうしたのかね？」

半裸のシルヴィアから視線を逸らし、権藤はオペレーターたちに尋ねた。

「シルヴィア師は現在、肉体から意識体を遊離させています」

「それはつまり、体はここにあっても意識は別の場所にある、ということかね？」

「そうです。そしてシルヴィア師の意識はおそらくあそこに……」

そう言ったオペレーターの視線は、モニターに映し出された『魔像機』に向けられていた。

怪獣と怪獣が融合する。その驚愕の事実を明人とシルヴィアは『騎士』の中から、辛うじて一部が生き残っていたモニター越しに見ていた。

「そ……そんな……怪獣と怪獣が合体するなんて……」

『既存生物を取り込んでいるとはいえ、怪獣もまた魔術的な存在。不可能ではないわね』

口ではそういうシルヴィアだったが、目の前の光景はとても信じられないものではなかった。

だが、実際に目の前で怪獣同士が融合を果たした。これは動かし難い事実なのである。

ならばその現実を受け入れる。そしてその対処方法を考える。それこそが魔術師としての正しい姿であろう。シルヴィアは自分で自分に言い聞かせた。

『ともかく、『騎士』を動かせるようにしないと。話はそれからよ』
「でもどうするんですか？ 『騎士』の内部の魔道パスは切断

「されているんでしょう?」

『だったら代用品を用意するまでよ』

「だ、代用品……?」

「そんな事が可能だろうか? 魔力はあっても魔術はまるで素人の明人には、シルヴィアのやろうとしていることがさっぱり見当がつかない。」

『意識体である私自身をパスの代用品にして、直接明人くんと『騎士』を繋ぐわ。そうすればもう一度『騎士』は立ち上げられる筈よ』

「だが問題もあるとシルヴィアは言う。」

『『騎士』と明人くんをリンクさせる関係上、『騎士』が受けたダメージは直接明人くんにフィードバックするわ。それでもやるの?』
「魔像機が受けた傷が自分の傷になるってことですか。でも魔像機と自分を繋ぐシルヴィアさんに影響はないんですか?」

『勿論あるわ。あなた程ではないけど、私も『騎士』からのフィードバックを受ける』

「そ、そんなつ!! 自分はともかく、シルヴィアさんにまでそんな危険な目に合わせるわけにはいきませんよつ!!」

「平然と危険な事を言うシルヴィアに、明人の方が逆にこの計画を拒否する。」

『でもこれしか今すぐ『騎士』を動かす方法はないわ。あなたは守るべきものを守るために命を賭けるのでしょうか? なら妻である私も夫であるあなたと共に命を賭けるわ。日本ではこういふのを確か、妻の鑑つて言うんでしょう?』

誰が夫で誰が妻ですか、というつつこみを明人は飲み込む。シルヴィアが本気で命を賭けるのだということを理解したからだ。

「判りました。あなたの命、自分が預ります！」

力強く頷く明人に、シルヴィアは優しく微笑んだ。

怪獣自衛隊城ヶ崎基地の指揮室は静まり返っていた。

その理由は怪獣と怪獣が融合したからではない。また、怪獣自衛隊の新兵器である『魔像機』が倒れ伏しているからでもない。

指揮室が静まり返っている理由。それはここの最高責任者である権藤が零した一言にあった。

「現時刻をもって、新たな怪獣を『アルナギンゴ』と呼称する。これ以後、目標をそのように呼称するように」

これを聞いたオペレーターたちは皆一様にこう思った。

(直球すぎないっ!?)

相変わらず権藤のネーミングはいささか直球過ぎた。

そしてその場にいたオペレーターたちは後に語る。

そう名づけた時の権藤司令は何とも満足げに口元を歪めていた、と。

周囲の人間たちの思惑など関係なく、融合を果たしたアルナギンゴは、その鋭い眼光をグリフォンへと向ける。どうやらアルマジロンであった頃の記憶は残っているらしく、グリフォンを見詰めるア

ルナギンゴの視線には怒りが満ちていた。

だらりと伸ばされたアルナギンゴの翼に力が通う。ばさりと数度羽ばたくと、アルナギンゴの巨体が宙に浮いた。

アルマジロンであった頃、この翼は単に滑空のための道具に過ぎなかった。アルナギンゴに変化した事で、この翼も新たに空を飛ぶ力を得たようだ。

(あ、あいつ、飛んだよっ!?)

(慌てるな茉莉。空は我らの庭だ。それに海から離れたこともこちらには有利な点だ)

(どういうこと?)

(魚型の怪獣は、周囲に水がある時にのみ魔術を使っていた。魔術を使えるといってもその能力は未熟で、おそらく近くに水がなければ魔術が使えなかったのだろう。そしてその魚型を吸収した奴も…)

(そうか！ 空なら水の魔術は使えないって事ね?)

そして更に、海から離ればグリフォン最大の攻撃である雷弾が使える。水中では周りに電気による被害が考えられたため使えなかったが、空ではその問題も解消される。

つまり空にいる以上、有利な事はあっても不利な事は何一つない。

(あいつには爪も生半可な魔術も通用しない！ 最初っから全力で行くわよ！)

(承知)

グリフォンの周囲が帯電し、電気は徐々にグリフォンの前方に集中してゆく。

アルナギンゴはふらりふらりとゆっくり飛んでいる。どうやら空を飛ぶことに慣れていないらしく、全く安定していない。これなら

躲される心配はない。茉莉はそう判断し、集められた電気の解放を命じる。

(電弾っ!!! いいつっけえええええっ!!!)

解き放たれた雷の弾丸は雷鳴と共にアルナギンゴに突き刺さる。それを見ていた誰もがそう思った。

だがグリフォン最大の雷弾はあっさりと無効化された。アルナギンゴが展開した水の防御膜によって。

(あ、あいつ魔術をっ!?)

(くっ、周囲に水がなくとも魔術が使えたとは……。二つの魔石が合わさった事で、その能力も上昇したのか……)

しかもこの防御膜は、360度全方位を覆う完全な球体だった。

(だったら、さっきと同じように爆鳴でっ!!!)

茉莉の指示の下、黒白の球体がアルナギンゴへ向かって飛ぶ。

そして先程同様黒白の球体が二方向に分かれ、防御膜に接触すると電流を流して電気分解を試みる。だが

(むっっ!?)

(どうしたのべりっ!?)

(……電流が流れん……これでは水を電気分解させる事はできない!)

(ど、どういう事なのっ!?)

戸惑いをみせるグリフォン。アルナギンゴはその隙を見逃さず、防御膜の表面から無数の水の弾丸を射出する。

グリフォンはそれを何とか回避するが、水の弾丸は無数といっていい程次々と打ち出される。

そして遂に水の弾丸がグリフォンを捉えた。

(あつっ!!！)

(……拙いっ!!！)

水の弾丸が着弾した事によってバランスを崩したグリフォンに、水の弾丸がまさに雨のように降り注ぐ。

無数の水の弾丸を浴びたグリフォンは、己の領土とも言うべき空から引き剥がされ、ゆっくりと大地へと落下していった。

「どういう事だ？ どうして先程のように水の防御膜は爆発しなかったのだ？」

権藤は厳しい視線でモニターを見詰めながら、必死にその理由を考えた。

「権藤司令っ!! 解析魔術による、先程アルナギンゴが展開した防御膜の分析結果が出ましたっ!!」

権藤は視線だけでオペレーターに分析結果を告げさせる。

「先程の防御膜ですが、あれの正体は水です。正真正銘、含有物を全く含まない水です」

「そうか……超純水というわけか……」

本来、水という物質は電気を通さない絶縁物質である。

だが自然界に存在する水には、様々なものが溶け込んでいる。電気はこの溶け込んだ物質を飛び石のように渡りながら流れるのだ。

つまり何も溶け込んでいない『純粋な水』は、飛び石の足場がな

いために電気は流れる事ができない。この『何も溶け込んでいない
純粋な水』の事を超純水と呼ぶ。

アルナギンゴは自らを覆う防御膜を超純水にする事で、雷の魔術
を無効化したのだった。

「まさか……怪獣にそれだけの知能が……」

もしくは全くの偶然か。その可能性も捨て切れない。

「だが、これだけははっきりしたな……」

権藤は厳しい表情のままぼそりと呟く。

「グリフォンにはもう、アルナギンゴに対抗する術は ない」

18・命名(後書き)

本日の投稿。

一区切りまであと5話ほど。そろそろ物語はクライマックスへ。
がんばりますので、今後ともよろしくお願いします。

19 - 契約

「茉莉いいいいいいつつっ!!」

和人は落下するグリフォンを見て叫んだ。

和人が見詰める中、グリフォンは大地に激突する。そしてそれを追うようにアルナギンゴもまた、グリフォンから少し離れた場所に着地した。

それを見た和人は、隣に静かに立つ幻獣の少女へと振り返る。

「一つ聞きたい。どうしておまえたち幻獣は、そんなに契約にこだわるんだ？」

「言うたである？ 契約を交わすところぞ、幻獣が存在する意味。それこそが全てであると」

「じゃあ聞き方を変える。契約を交わすと幻獣はどうなる？ 契約者は？」

「契約者と契約を交わした幻獣は『安らかなる満ち足りた眠り』を得ることができるのだ」

幻獣には本来寿命というものがなく、病気に罹ることもない。そんな幻獣が迎える死には2つの種類がある。

1つは戦いの中で命を落とす事。そしてもう1つが『安らかなる満ち足りた眠り』だ。

幻獣が契約者と結ばれた場合、契約者が命を落とすと幻獣もまた死を迎える。

契約者が天寿を全うして死を迎えた時、幻獣もまた安らかに満たされながら永遠の眠りにつく。

これが『安らかなる満ち足りた眠り』と呼ばれるものであり、全

ての幻獣は『安らかなる満ち足りた眠り』を得ることこそ、最大の至福であると考える。

「我ら幻獣はその最大の至福を得るがため、契約者を求めるのだ」

「そ……そんなことのために……」

「『そんなこと』ではないのだろうか」

和人の呟きに毅士が口を挟む。

「以前幻獣と人間とでは価値観が違っていると聞いた。人間には大した事ではないかもしれないが、幻獣にとっては重大なことなのだろう」
「然り。人間の主観で考えてはならんぞ」

人間と幻獣はまるで違う存在であると、和人はようやく理解できたような気がした。

「さて、幻獣と契約した契約者の方だが」

和人が人間と幻獣について考えている間も、少女の説明は続いていた。

「契約者の方には特に変化はない。敢えて言うならば、一部の幻獣から嫌われる位かの」

「幻獣から嫌われるだって？」

「何、簡単に言うてしまえば嫉妬よ。自分には得られない契約者。だが契約者がいるということは契約を交わした幻獣もいるということ。契約を交わし得た幻獣とその契約者が羨ましいのよ」

幻獣の少女の説明を聞き終わると、和人は瞼を閉じた。そしてその瞳が再び開かれた時、そこにははっきりとした決意があった。

「和人……おまえ……」

驚く毅士に小さく頷くと、和人は幻獣の少女に向かってはつきりと告げた。

「俺は……俺はおまえと契約したい」

衝撃がグリフォンの体内を突き抜ける。

大地に墜ちたグリフォンに、アルナギンゴは止めを刺さなかった。アルナギンゴはその強靱な前脚で、グリフォンを痛めつけていく。あっさりと殺してしまつては、自分の怒りは収まらない。だから生かさず殺さず痛めつける。ウナギンゴを吸収して知能までも上昇したアルナギンゴは、手加減するということを理解していた。

アルナギンゴの攻撃に対して、グリフォンはされるがままだった。空中での水の弾丸の着弾、落下した衝撃、そしてアルナギンゴの猛攻。辛うじて意識はあるものの、身体は思うように動いてくれなかった。

仮に動いたとしても、グリフォンにはアルナギンゴに反撃する術はない。そのことを茉莉とベリルも理解していた。

(このままでは拙い。ここは一端引くべきだ茉莉)

(で……でも……そんなことしたら明人さんが……っ！！)

怪獣の敵意が自分に向けられている間は、明人が乗る『騎士』が狙われることはないだろう。

そしてその間に、怪獣自衛隊が明人を救出してくれるだろうと茉莉は考えていた。

あともう少し。もう少しだけ怪獣を自分に引き付けておかなくて

はならない。

(シルヴィアさんお願い……明人さんを早く助けて……)

茉莉は和人に明人を頼むと言われたのだから。それだけを心の支えに茉莉は、襲い来る衝撃に必死に耐え続ける。

契約したい。その言葉に幻獣の少女の顔は歓喜に彩られた。

「おお。とうとう……とうとう我にも契約の時が訪れた……」

「それでどうすればいい？ どうすればおまえと契約できる？」

喜びに震える少女に、和人はどこか不安そうな表情で問う。ひよっとすると何か複雑な儀式のようなものが必要になるのだろうか。それとも何らかの苦痛が伴うのか。未知の行為に対する不安は隠す事ができなかつた。

「我に名を与えよ。さすれば契約は結ばれる」

だが少女から返ってきた答えは、拍子抜けするようなものだった。

「名……って、名前？ それだけ？」

そういえばこいつの名前って聞いたことなかったな、とこの場に至ってようやく思い出した和人。

「名とは最も短く、それでいて最も強力な呪まじ。万物は名を与えられて初めて個を得る」

名前を持つことで、万物は固有の形と特徴と特性を得る。例えば『ナイフ』と名付けられたものは、『ナイフ』としての形状と大体の大きさ、そして刃物という特徴を得る。同じぐらいの大きさと形の刃物でも『包丁』と名付けられれば、その特性は違ってくる。

「今の我に名はない。契約者により名を与えられて初めて、我は我として固着する。我の身体は仮初めの器と言ったな？ 我の身体は不安定なのだ。名を与えられて初めて我の身体も安定する。さあ、我に名を与えよ。さすれば我は主のものとなり、いかなる命にも従おう」

少女はその場で片膝を着き、静かに頭を垂れる。その姿はまるで、主君より叙勲を受ける騎士のようだ、と傍らで見ていた毅士は思った。

名を与えよ、といきなり言われても戸惑うばかりの和人。今まで誰かの名前を考えたことなど、一度もなかったのだから無理もない。ましてやこの状況では。

あれやこれやと今まで聞いた事のある名前を頭の中でひっくり返していた和人の脳裏に、初めてこの少女が白峰家に現れた時の状況が甦った。

白々と輝く銀の月。その月を背景に、その月の光が集まったかのような銀髪を揺らして立つ少女。美しい月と美しい少女は、まるで一对の存在のように和人の目には映った。

「……ミツキ……」

ぼつりと和人の口から零れた言葉。

「ミツキ。美しい月という意味でミツキ。どうだろう、ミツキとい

「名前は何？」

和人と毅士の目の前、幻獣の少女の身体が淡い燐光を放ち始める。その燐光が徐々に強くなり、一際強烈な光の奔流となって弾けた後、そこにはそれまでと同じ姿で、それでいてまるで違う存在となった少女がいた。

ミツキ。その言葉が呪となって少女を縛る。この時初めて、幻獣の少女はミツキという存在になったのだ。

「契約は成された。我、ミツキは主、和人様の永遠の僕となることをここに宣言しよう。さあ主よ、如何様な命でも下すがよい」

立ち上がって真っ直ぐに自分を見詰める少女　ミツキに、和人は一つの命を下す。

「俺に力を。兄ちゃんや茉莉、他の皆を守れる力をくれ」
「御意」

ミツキは和人の命に力強く応えると、二人は銀の光に包まれた。

もういいだろう。アルナギンゴは満足げに大地に横たわるグリフォンを見下ろした。

散々痛めつけてやったことで、アルナギンゴの怒りも収まった。後は止めを刺すだけだ。

アルナギンゴはゆっくりと後退してグリフォンから距離を取る。充分な距離を取ったところで、アルナギンゴはその巨大な口をグリフォンに向けて開く。その口の奥には、ちらちらと輝く赤い光が見え隠れしている。

アルナギンゴは自分の持つ、最大最高出力の火焰でグリフォンに

止めを刺すつもりでいた。この火焰なら一瞬でグリフォンを蒸発させることも可能だろう。

そして放たれる燃え盛る死神の腕。

真つ赤な光と熱の奔流は、真つ直ぐにグリフォンに向かって伸びる。今のグリフォンにこの火焰を躲すだけの体力はない。

だが火焰とグリフオンの間に飛び込んだ影があつた。

火焰に勝るとも劣らない真紅のその影は、手にした楯を襲い来る火焰に向けて突き出した。

火焰が楯にぶつかり、楯が一瞬のうちに真つ赤に染まる。

そのようなもので自分の火焰が防げる筈がない。アルナギンゴはそう思った。火焰は楯ごと飛び込んできた真紅の巨人をも燃やし尽くすだろう。

「くっ……おおおおおおおっ！！」

火焰を遮るように飛び出した『騎士』のクピットで、『騎士』と直接リンクした明人は強烈な熱に耐えていた。特に楯を持った左腕は燃えるように熱い。

「ぐうう……だ、大丈夫ですか……シルヴィアさん……っ!？」

「わ、私は大丈夫……それより……もう少しの辛抱……よ……っ!
! あれが発動すれば……っ!！」

明人と『騎士』を繋ぐバイパスの役割を果たしているシルヴィアも、明人と同じ苦痛を味わっていた。

シルヴィアのいうあれとは、『騎士』の楯に施された魔術。

『騎士』の楯には二つの術式が施してあつた。

一つは耐火。火焰を吐く怪獣が多いことから施された術式で、今現在アルナギンゴの超高温の火焰に楯が耐えているのは、勿論この魔術のお陰だつた。

そしてもう一つの術式。それこそがシルヴィアの期待するもの。その術式は反炎。文字通り炎を跳ね返すという魔術だ。

だが2つの術式は耐火の方が優先されていた。そのため反炎が発動するには、楯が炎を受け止めてから数秒のタイムラグが必要だったのだ。

だが炎を受け止めている楯の耐久度は、先程ウナギンゴの水の槍を受けて限界ぎりぎり。楯が碎けるのが先か、反炎が発動するのが先か。

数秒が数時間にも感じられる中、『騎士』の持つ楯が甲高い音と共に碎け散った。

アルナギンゴは苛立っていた。

どうしてだ？ どうして巨人の楯は自分の火焰を受け続けていられるのだ？ あのような楯など、瞬く間に溶かすだけの熱量が自分の火焰にはある筈なのに。

だからアルナギンゴは更に火焰の出力を上げた。そのせいかは判らなかったが、とうとう巨人の楯が碎け散った。

アルナギンゴはその光景を満足げに眺めていた。

当然だ。自分の火焰があのような楯で防げる筈もない。しかしアルナギンゴは気付かなかった。楯が碎け散る直前、楯のもう一つの能力が発動していたことに。

不意にアルナギンゴを灼熱感が襲った。

その余りの熱量に、アルナギンゴは苦しみの咆哮を上げた。

「やっ……たのか……？」

反射された火焰で全身を焼かれながら咆哮するアルナギンゴを見て、明人はふうと大きく息を吐く。

まさにぎりぎり。あと数瞬楯が壊れるのが早かったら、炎に焼か

れていたのは間違いなく自分の方だろう。

だが明人もそこまでだった。激しい熱に耐えたことで体力と気力を限界まで削られた。そしてそれは明人と『騎士』を繋ぐシルヴィアも同じ。

先程からシルヴィアを何度呼んでも返答がない。

最悪の事態には至っていないことを願いつつ、崩れ落ちるように倒れる『騎士』と共に、明人の意識も暗黒に飲み込まれていった。

19 - 契約（後書き）

本日の投稿分。

拙作「怪獣咆哮」に毎日起こしいだいでいる方が20名ほどいらつしゃいます。

その他の方も含めると、30名前後の方が毎日拙作を読んでくださっているようです。

本当に感謝致します。

ご意見、ご要望などありましたらお知らせください。可能な限り作品に反映させていただきたいと思えます。

今後ともよろしく願います。

全身を焼く炎を消すために、アルナギンゴは海に飛び込んだ。

全身の炎が消えた事を確認し、再び陸に揚がったアルナギンゴは、倒れている巨人とグリフォンに怒りの視線を向けた。

もう許さない。一度ならず二度三度と自分に痛手を負わせた奴ら、罅りものになどせず一気に止めを刺してやる。

再び火焰を吐こうとするアルナギンゴ。

倒れている巨人とグリフォンに死の鉄槌を下そうとした瞬間、アルナギンゴはそれを感じた。

何という膨大な魔力。倒れているグリフォンも大きな魔力を宿しているが、それを遙かに上回る。勿論自分よりも大きな魔力だ。

その魔力がどどん近付いて来る。その魔力の方へと目を向ければ、もの凄いスピードで飛来する銀の光。

そしてそれは銀の光の中から現れた。

シャープな三角形を描く頭部。二本の角を戴き、ぞろりと生え揃った牙は凶器そのもの。だがその朱金の瞳には確かな知性が感じられる。

細長い首から続く胴体は丸みを帯びて盛り上がり、背には蝙蝠のような巨大な翼。強靱で長い尾は鞭のようにしなやかにゆらゆらと揺れている。

四肢は太短いが力強く、その先に備わった爪は鋼鉄をも切り裂く鋭さを秘めている。

そう。

それは西洋でドラゴンと呼ばれる幻想の生物。全長50メートルを超えるアルナギンゴに引けを取らない巨大な勇姿。

銀の鱗に覆われた美しいその姿は、神々しささえを感じさせた。

（我が名はミツキ！ 数多の幻獣の頂点たる三柱の幻獣王の一柱、
竜魔石を担うもの！ 我こそ竜王！ 竜王ミツキ！）

その声は魔力を持たないものには単なる咆哮にしか過ぎない。だが、魔力を有する者には、それは確かな言葉として感じられた。

その言葉通り、今ここに幻獣の王たる竜王が降臨したのだ。

それまで棒立ちだったシルヴィアの身体が、不意にがくりと崩れた。

「カーナー博士っ!?!」

隣に立っていた権藤が倒れるシルヴィアの身体を慌てて支える。

その時権藤は気付いた。シルヴィアの身体が燃えるように熱を持っている事に。そしてその瞳に意志が宿っている事にも。

「戻られたのですな、博士？」

その言葉に弱々しくシルヴィアは頷く。

「大至急医療班を呼べっ!!」

「だ、大丈夫ですわ、司令。それよりももうしばらくあちらを向いていて下さいませんか？」

そう言われてシルヴィアが下着姿である事を思い出した権藤は、失礼と一言呟くと、着ていた制服の上着を彼女の肩にかけてから背中を向けた。

「それで博士。説明して頂けますかな？」

権藤の視線は再び、先程現れたドラゴンへと向けられている。

「あれが例の幻獣の少女の本当の姿なのでしょう……そして和人は彼女と契約を交わした……」

シルヴィアは自らの身体に弱めの冷却呪を施して自身の熱を処理しながら、権藤と同じようにドラゴンを見詰めながら言った。

「そして今の言葉……魔力の波動に乗せて放たれた一種の念話のよなものだと推測されますが、その言葉によると、あれは幻獣の中でも特別な存在のようです」

「言葉……？ 私には何も聞こえなかったが……」

「ええ。空気の振動による音ではなく魔力の波動ですから、魔力がなくては聞こえないのでしょう」

「なるほど……私にはよく判らんが、そういうものとしておきますか。それで、あのドラゴンは敵ではないのですな？」

「司令の仰しやる通り、あのドラゴンは敵ではありません。それどころか、もしかすると人類の守護神となるかもしれませんよ？」

「ほほう、守護神ですか。確かにあの姿は頼もしい限りですからな」

権藤の視線の先には銀のドラゴン。

美しく、それでいて力強く。

幻想的でいて、なおかつ威風堂々。

畏怖と同時に、穏やかさを内包させる。

おそらく他にもドラゴンの姿をした幻獣はいるだろう、これほどの存在感を感じさせるものは目の前のドラゴンだけであろう。

まさに王。幻獣王。

その言葉に偽りはないとシルヴィアは心の底からそう感じた。

そして同時に思う。このドラゴンがもしも人類に牙を向けたなら人類にこのドラゴンに対抗する術はないだろう。自分が作り上げ

た『魔像機』でさえ、この存在の前では玩具に等しい。

だが、そのようなことにはならないとシルヴィアは確信している。あの少年。ドラゴンの主となったであろうあのお人好しで真っ直ぐな少年なら、人知を超えた力を得ても決して暗黒面に飲み込まれることはあるまい。

仮に暗黒に飲み込まれそうになったならば、自分や彼の兄がぶん殴つてでも引つ張り戻せばいいだけのことだ。

(だから後のことは任せたわよ、和人くん)

シルヴィアは最後に心の中でそう付け加えると、後は黙って状況を見詰めるのだった。

(あ、あれが……あれが和人とあの娘の融合した姿……。それにさつき聞こえた言葉……。竜魔石とか竜王って何の事?)

茉莉はそのドラゴンから途轍もない力を感じた。おそらくそれは、竜魔石とか竜王とかに関係するのだろう。

(幻獣王は三体存在すると言ったな)

(うん。さつき聞いたね)

(その3体とは、獣王、鳳王、そして竜王。その中でも竜王は最も強力な幻獣王だという。そしてそれぞれの幻獣王が持つ魔石は他の魔石とは区別され、各々の王の名を冠した名称が与えられている。竜王の持つ魔石こそ、竜魔石と呼ばれるのだ)

ようやく茉莉は、目の前のドラゴンが如何に特別な存在であるのか理解した。

そしてそのような存在と契約した和人。その和人の抱える途方も

ない魔力が、ベリルと融合している今の茉莉には手に取るように感じられた。

(うん。さすがはボクの亭主だね。でも……)

茉莉が心配するのは、和人が幻獣の力に酔ってしまった時。自分もかつて、幻獣の力を意味もなく使おうとした経験がある。

(心配するな茉莉。和人殿ならそのようなことは有り得まい。彼の周囲には良い人物が揃っている。仮にそうだったとしても、その時は我らがいるではないか?)

(そうだね。亭主の過ちは妻が正せばいいんだよね)
(さあ、よく見ている。幻獣王のその力を)

ベリルに言われるまでもなく、茉莉はその一部始終を目に焼きつけるつもりだった。

和人は今、淡い銀の光に包まれた無限に広がる空間に浮かんであくまでも和人の主観でいた。

(ど……どこだ、ここは……?)

周囲を見回すが何も無い。右にも左にも上にも下にも何もなかった。

(慌てるな主。ここは私の体内のようなもの)

和人の耳に、最近聞き慣れ始めた声が響く。

(ミツキか？ どこにいるんだ？)
(言ったである？ ここは我の体内のようなものだ。我は主の傍におるぞ)

その言葉と同時に、和人の目の前にミツキが姿を現した。

(どうやらこうして姿を形作った方が主には解り易いようよ。それよりも主、見えておるか？)

ミツキの質問の意味は和人にはすぐに判った。目の前に広がるのは無限の空間だが、それとは別に、まるで脳に直接投影されるかのように別の映像を認識できたからだ。

目の前に怪物がいる。兄を、茉莉を打ち倒した巨大な怪物が。そしてその怪物からははつきりと敵意が伝わってきた。

(ああ、判る。どうやらあちらさんもその気らしいな)

(なに、安心するがいい。我がいる以上負けはあり得ない。我と共にあるのは勝利と栄光のみ。来るぞ、主っ！！)

アルナギンゴは、突如現れたドラゴンに怒り狂っていた。

まただ。また邪魔された。せつかく巨人とグリフォンに止めを刺そうとしたのに。

だからアルナギンゴは、この怒りを目の前のドラゴンにぶつけることにした。

アルナギンゴの周囲に幾つもの水の球が出現する。その水の球の幾つかが、先程グリフォンを撃ち墜としたような水の弾丸となってドラゴンへと襲いかかる。

ドラゴンはそれらの弾丸を避けようと身体を動かす。だがその動きはぎくしゃくとしていて鈍重なものだった。

(どうした主っ！？ 動きが鈍いぞっ！？)

(な、何だこれ？ 思ったように身体が動かないぞっ！？)

(むっ…… 姿形が人間とは違うからか……)

ドラゴンの身体の構造は人間とはまるで異なる。和人が無意識に身体を動かそうとしても、そのギャップで身体が上手く動いてくれないのだ。

(拙いっ！！ 直撃を食らうっ！？)

(心配ないっ！！ 障壁展開っ！！)

水の弾丸が直撃する瞬間、ドラゴンの周囲に光の障壁が出現する。水の弾丸はその障壁に阻まれて無力な魔力と化して消滅した。

(どうだ、主？ 何とか身体は動かせそうか？)

(そ、それが、どうにも勝手が解らなくて……特に尻尾や翼なんてどうやって動かすんだよ？)

ドラゴンの身体は翼や尻尾でバランスを取っている部分が多い。

だが人間には当然尻尾や翼はない。だから本来ある筈のない尻尾や翼を動かすという事が、和人には上手く理解できないのだ。

尻尾や翼が上手く動かせないという事は、身体も当然上手く動いてくれないという事に繋がる。

(主が魔術を展開できれば、身体の制御は我が行っのだが……だからといって今魔術の行使を放棄すれば、先程の水の弾丸に打ち抜かれよう……)

勿論徐々に慣れていくだろうが、今すぐは無理そうだ。

実は茉莉も、グリフォンの身体を上手く扱えるようになるまで結

構な時間を要した。

そんなドラゴンの動きを見て、アルナギンゴは拍子抜けしていた。何だこいつは。図体と魔力はでかいがまるで動けないではないか。これなら恐れることはない。水の弾丸で徐々に弱めて、最後は火焰で止めを刺せばいい。

勢いづいたアルナギンゴは、更に水の弾丸を放ち続ける。

無数の弾丸は全て障壁で遮られるが、まともに動けないのではない。ずれ弾丸の雨に飲み込まれるだろう。

いかに強大な力を有していても、それを扱えなければ意味はないのだ。

(くう……ど、どうしたら……)

(焦るな主！ 竜王たる我が展開する障壁ぞ。この程度の魔術、幾らでも防いでみせよう。だから主は身体を動かすことに専念せい！)

(そうは言うけどよっ！！ 何なんだよこの動かしづらい身体はっ！？ 魔力できていて仮初めだか知らないが……って、仮初め？)

和人はふと閃いた。ミツキは言っていたではないか。幻獣の身体は仮初めの器であると。それならば

ドラゴンの身体が再び銀の光に包まれる。

(あ、主っ！？ 一体何をするつもりだっ！？)

ミツキは戸惑う。和人がしようとしていることが判ったからだ。

和人は今、身体を再構成しようとしているのだ。

このような時に攻撃を受ければ、いかに竜王たるミツキでも無事では済まない。だからミツキは展開した障壁を強化しようとした。

(な、何っ！？ 魔術の制御が効かぬだっ！？)

今現在展開されている障壁のコントロールがミツキの手から離れ

ていた。勿論こんなことが可能なのはミツキの主である和人のみ。

（主っ！？ お主は本当に何を考えているのだったっ！？）

ミツキの悲痛な叫びが、彼女と和人しかいない空間に響き渡った。

20・魔王（後書き）

今日の分を投稿します。

取り敢えずの区切りまであと2、3話といったところ。

それ以後もちろんがんばりますので、引き続きよろしくお願
い
します。

21 - 反撃

アルナギンゴは、目の前のドラゴンが銀の光に包まれるのを見た。相手が何をしようとしているのかは判らないが、そんなことは関係ない。

アルナギンゴは、周囲に浮かぶ無数の水の球を幾つか寄り合わせ、ウナギンゴが使ったような水の槍を造り出す。

槍は弾丸よりも速度は落ちるものの、貫通力では勝る。その槍を数本、光に包まれたドラゴン目がけて射出する。

撃ち出された水の槍は、狙い違わず銀の光に突き刺さる。そして徐々に銀の光が消えていく。

やったか？ アルナギンゴは結果を確認するため、攻撃の手を止めてじつと銀の光を見詰める。

消えていく銀の光の中、何かかもぞりと動くのをアルナギンゴの目が捉えた。

その動くなにかは、消え行く光の中でうずくまったような姿勢からゆっくりと立ち上がった。

頭部は先程同様ドラゴン。だがずんぐりとした身体と太短い四肢は、まるで別のものに変化していた。

均整の取れた身体にバランスの良い長い手足。尻尾は消え失せ、背の翼も小さく折り畳まれている。

そのシルエットは間違いなく人間のそれ。かつて銀の竜であったそれは、銀の鱗に覆われた竜人とも呼ぶべき存在に変わっていた。

(こ、この短時間に身体を再構成するとは……)

ミツキは驚愕を隠し切れない。いかに幻獣の身体が魔力によって編み上げられたものとはいえ、こんなに簡単に再構成できるとい

ものではない。

それを行うには、並外れた魔力の制御力が必要となる。
そういえば、とミツキは思い出した。

（あの魔術師の女が言っておった。主の兄者殿には、並ならぬ魔力を扱う才があると。ならば弟である主にも、それ以上の才が備わっておったということか……）

そう驚愕するミツキの傍で、和人は勢い込んでいた。

（おっしやあつ！！ この身体なら思う存分動かせそうだぜっ！！）

和人は左の掌に右の拳を打ち付ける。すると竜人もまた、和人と同じように拳をふるった。

（行くぜっ！！）

竜人がアルナギンゴ目指して駆ける。勿論黙って待っているアルナギンゴではない。

再び水の弾丸が降り注ぐ。

（主っ！！ 今度こそ避けてみせよっ！！）

（そんな必要はないさっ！！）

ミツキの忠告を無視して、和人は水の弾幕の中を真っ直ぐに駆け続ける。

だが水の弾丸は竜人に髪の毛の先程の傷を付けることもできなかつた。

水の弾丸は全て竜人の身体の表面に触れた途端、先程光の障壁に触れた時と同じように消滅したからだ。

（ま、まさか主は、魔力障壁そのものを取り込んで身体を再構成したというのかっ!?!）

竜人の身体を覆う銀の鱗。その鱗の一枚一枚に、先程の光の障壁と同じ効果が秘められていた。これでは余程強力な攻性魔術でなければ、ダメージを与える事は不可能だろう。

ミツキは和人の魔力を扱う才能とその発想に二の句が継げない。障壁を展開しておき、その障壁を取り込んで身体の表面にその障壁の効果を付与するなど、誰が考え付こうか。

まっとうな魔術師であればそのような非常識なこと、考えもしないだろう。仮に考えたとしてもそれを実行するのは容易ではない。

だが、和人は魔術師ではない。魔術師ではないからこそその自由な発想、その発想を実行してしまう才能とセンス、そしてそれを可能とする膨大な魔力。

しかもこれまで、何ら魔術的な修養を積んでいないにも拘わらずだ。

（我はもしかして、とんでもない人間と契約を交わしてしまったのかもしれない……）

正直ミツキは呆れていた。そしてそれ以上にわくわくしていた。

（面白い。我が主は途轍もなく面白い。自我に目覚めて千余年、このようにわくわくしたのは初めてよ）

いいだろう、とミツキは思う。この主とならば、決して退屈はせぬだろう。これからの十数年を思い、知らず笑いが零れるミツキ。

だが今は、目の前の問題を解決しよう。

(やるぞ、主！ 目の前の怪獣に目にも物を見せてくれようぞ！)
(応っ！！)

アルナギンゴは焦った。自分の放った水の弾丸がまるで歯が立たないのだ。

だからアルナギンゴは次に、弾丸ではなく槍を放つ。

水の槍も吸い込まれるように竜人に命中するが、それだけだった。竜人はまるで気にした様子もない。

そしてアルナギンゴは見る。迫り来る竜人の周囲に、自分と同じような球体が無数に現れた事を。

(ほう。相手の戦法を真似るか。悪くないの)
(だろ？ いいものは何でも利用しないと)

これもまた和人の強さか、とミツキは思う。

魔術師は自分の魔術に自信を持つ。それは悪いことではない。だが、自分の魔術を過信し過ぎて他者の魔術を認めない時がある。

それは魔術師としてのプライドがそうさせるのだらう。

魔術師でない和人には、当然そのような変なプライドもない。だから他者の魔術だらうがいいものはいいと素直に受け入れる事ができる。今和人が展開した魔術も、先程から相手の怪獣が展開している魔術だ。

勿論見た魔術をそっくり真似るなど、和人の優れた才能があつてこそこのことなのだ。

(やれっ！！ ミツキっ！！)
(承知っ！！)

竜人の周囲に浮かぶ球体が打ち出される。この球体がアルナギン

ゴと違う点は、アルナギンゴが水の球であるのに対し、竜人は光の球であった。どうやら和人とミツキの操る魔術は光系の魔術のようだ。

光という特性を生かして、水の弾丸よりも遥かに速い速度で打ち出される光の弾丸。

降り注ぐ光の弾丸に対して、アルナギンゴは周囲の水の球を集結し防御壁に変換してこれを防ぐ。

防御壁の表面で次々と無効化される光の弾丸。だが、光の弾丸を受け続ける事で、水の防御壁に変化が生じ始めていた。

この光の弾丸は単なる光の塊ではない。この光には熱もまた含まれていたのだ。

光の弾丸が着弾することによって、弾丸に内包されていた熱はすべて防御壁へと移動する。そして次々と流し込まれる熱が、水を徐々に水蒸気へと変えていった。

防御壁を構成する水の量が減れば、当然防御壁の強度もまた減少する。それこそが竜人の狙い。

そして竜人は尚も光の弾丸を放ちながら、アルナギンゴへと肉迫する。

(これでどうだっ!!)

竜人の拳が防御壁に叩きつけられる。これまでに強度を削られた防御壁は、ガラスが割れるように砕け散った。

そしてそのまま竜人の拳がアルナギンゴの顎を捉える。拳が激突する際、竜人は拳を魔力の光でコーティングする。

光が爆発した。

拳に込められた魔力が弾け、拳の衝撃と共に怪獣の顎を打ち抜いた。

その衝撃でアルナギンゴの巨大が僅かだが宙に浮く。これだけの質量を浮かせるなど、一体どれ程の衝撃が与えられたのだろう。

(まだまだあつ！！)

竜人の拳打は一発では終わらない。続けざまに拳が打ち込まれる。

だが相手もまた怪獣。超常の存在。これだけの衝撃を叩き込まれながらも、まだその命は燃え尽きない。

竜人が拳を引いた僅かな隙を狙って、アルナギンゴはその強靱な尻尾を横風にふるった。

流石にこの奇襲には竜人も咄嗟に対応することができず、避けることもできずにその頭部に強烈な一撃を食らう。

(がっ……ぐうっ……っ！！)

(ぬう……っ！！ 大丈夫か、主っ！？)

(だ、大丈夫だっ！！)

竜人が態勢を立て直す僅かな間に、アルナギンゴは再び距離を取ること成功した。

距離を稼いだアルナギンゴは、周囲に漂っている防御壁だった水を一ヶ所に集める。

集められた水は渦を描き、遠心力で薄く引き伸ばされた。そして尚、渦はその回転速度を上げる。

これはかつてウナギンゴがアルマジロンに深手を負わせた水のノコギリ。弾丸や槍よりも遥かに威力の高い攻性魔術。

そのノコギリを、ようやく態勢を立て直した竜人に向けて打ち放つ。

(あれはいままでよりも遥かに高い魔力を帯びておる！ あれを直接受けては障壁を付与した鱗でも堪え切れんぞっ！！)

ミツキがノコギリの威力を看破して和人に告げる。

(だったら撃ち落とすっ!!)

未だ竜人の周囲に無数に存在する光の球。それらが一斉に動き出して迫り来るノコギリを迎撃する。

だが光の弾丸は水のノコギリに全て弾かれた。遠心力を得ている事により、ノコギリ自体の防御力も増していたのだ。

(ちいっ!!)

迎撃不可能と悟った竜人は高く跳躍してこのノコギリを躲す。逸れたノコギリはそのまま飛翔し、先程まで和人たちがいた岬の先端をすっぱりと斬り落とした後、単なる水に戻って海へと降り注いだ。そして上空から竜人は見る。自分目がけて地上のアルナギンゴが、その巨大な口を開いているのを。

アルナギンゴの狙いは最初からこれだった。ノコギリには簡単に破壊されないだけの魔力を込めておいたから破壊は不可能。となれば竜人が取る行動は回避行動のみ。水のノコギリも単なる布石に過ぎず、その回避行動こそアルナギンゴの狙いだ。

回避行動の際の僅かな隙に自分の最大火力の火焰を叩き込む。それがアルナギンゴの策略であった。

しかも竜人は上空へと逃げた。これはアルナギンゴに取っては嬉しい誤算といえる。

いかに竜人といえど、空中では身動きが取れまい。最初のドラゴン形態ならば飛行能力もあるだろうが、竜人の背にある小さな翼では空中での行動はまず不可能だろう。

後はゆっくりと狙いを定めて火焰を放つのみ。もしアルナギンゴに表情というものがあれば、きつとにたりと悪魔的な笑いを浮かべていたに違いない。

そして火焰が吐き出される。障壁を付与した鱗を持った竜人といえど、焼き尽くすだけの熱量を持った炎が真つ直ぐに竜人へと伸びていった。

迫り来る灼熱の赤に、ミツキは焦りを覚えた。

今の状態でこの火焰を躲す事は不可能だ。半端な障壁を展開してもこれだけの熱量を防ぐ事はできない。

より頑強な障壁を編み上げることも可能だが、そのためには時間がない。

八方塞がり。万事休す。

だが、和人は平然とミツキに告げた。

(ミツキっ!! 翼の制御は任せるっ!! 俺じゃあ翼なんて動かせないからなっ!!)

(っ、翼だとっ!? 翼は身体を再構成した折、小さなものにしてしまったではないかっ!!)

(だったら小さくなければいいんだろ?)

和人の言葉が終わった瞬間、再び銀の光に包まれる竜人。だが今度の銀の光はあつという間に散ってしまった。

そして散った光の中からは最初に現れたドラゴンの姿。和人は一瞬の間に再び身体を再構成したのだ。

(ま、今回は最初の形態に戻しただけだからな。人形態にするより簡単だな)

あつけらからんと言う和人に、ミツキはもはや呆れるしかすることがなかった。

勿論、実際には和人が言うように簡単にできるものでは断じてない。

ミツキは今はどこでもないことを思い出して、力強く翼で

空を打つ。

ばさりと翻った巨大な皮膜が、巨体を空中に繋ぎ止める。そして迫る真紅の炎からひらりと逃れた。

そしてまた銀の光がドラゴンの巨体を覆う。今度もすぐに散った光の中から、再び竜人が現れる。

飛行能力のない竜人は重力に引かれて落下しながら、足先をこちらを見上げているアルナギンゴに向ける。

(行くぜ怪獣っ！！ こいつはちょっとばかり強烈だぜっ！？)

竜人の足が魔力の光に包まれる。竜人のパワーと質量に落下速度そして更に魔力をも乗せた、まさに超弩級の一撃が天空より大地に突き刺さった。

21 - 反撃（後書き）

今日の投稿。

物語はまさにクライマックス。節目まであと少し。

もう少しお付き合いください。できれば、今後とも気長にお付き合いいただければ幸いです。

大地を揺るがす巨大な振動と大音響。それは少し離れた怪獣自衛隊の基地にも及んだ。

その指揮室の中で権藤とシルヴィア以下、室内にいた者たちは倒れないように何か必死にしがみついていた。

やがて揺れが治まると、今度は権藤の声が響く。

「状況確認急げっ！！ 怪獣はどうなったっ!？」

権藤の指示に、オペレーターたちが慌ただしく動き出し、やがて状況を知らせる報が届き出した。

「海の中を沖へと移動する物体を確認！ どうやら怪獣と思われるます！」

「あ、あの攻撃を食らって生きていたというのか……?」

権藤は改めて怪獣という存在が常軌を逸していることを肌で感じた。

だがオペレーターの報告はそれだけではなかった。

「海中を移動する物体は2つ！ 2つありますっ!！」

アルナギンゴは確かに生きていたが、首から下の左半分を失っていた。

怪獣の巨体の半分を吹き飛ばした竜人の一撃に感心すべきか、身体を半分を失ってもこうやって活動している怪獣の驚異的な生命力

を驚くべきか。

竜人の一撃はアルナギンゴの身体の半分を吹き飛ばしたが、その際に残った半身も大きく飛ばされた。そして落下した先が幸運なところにも海だったのだ。

海に墜ちたアルナギンゴは、慌てて沖を目指して逃げ出した。

自分ではあの銀の竜には勝てないと、アルナギンゴの高い知能はそう判断した。

勝てないのなら逃げればいい。何も餌となる人間がいるのはここだけではないのだから。

あの銀の竜はおそらく水中に適応してしまい。ならばここまで来ればもう大丈夫だろうと、海中をよたよたと泳ぐアルナギンゴが安堵した時。

この時になってようやくアルナギンゴは気付いた。自分に迫ってくる巨大な魔力に。

まさか、あの銀の竜が追って来たというのか？ アルナギンゴは信じられなかった。

確かにあの銀の竜は強い。しかしそれは陸上や空中での話であり、そんなことはあの竜自身がよく知っていることだろう。

魔力が迫る方向を振り向いたアルナギンゴの目に、確かに銀の竜の姿が映った。

だがそれは竜形態でも人形態でもない、新たな銀竜の姿。

その身体は蛇のように細長く、手足もなかった。その代わりに、体側には一対の鰭があった。背中には頭部からずらりと背鰭が並び、尾鰭へと繋がっていた。

(名付けて海竜形態サイベントフォームってとこだな、こいつは)

(もはや、我は何も言わぬわ……)

和人はまたもや、水中に適した形態に己の身体を再構成したのだ。海竜の泳ぐ速度は、アルナギンゴより遙かに速い。もしアルナギ

ンゴが完全な状態でいたとしても、その速度は海竜には及ばなかったであろう。

その速度を生かしてあつという間に距離を詰めた海竜は、そのままアルナギンゴの喉笛に食らいつき、そのままアルナギンゴを水中で引きずり回す。

振り回されながらもアルナギンゴは周囲の水を操って反撃を試みるが、海竜形態でも鱗に魔力障壁は付与されているようで、アルナギンゴの放つ魔術は全て無効化された。

身体を半分失った今のアルナギンゴには火焰を吐く事もできない。何故だっ！？ アルナギンゴは声にならない声で叫ぶ。何故自分が負けるのか？ 2つの魔石を持つ強大な筈の自分が。

怒りに狂うアルナギンゴは、2つの魔石を併せても銀竜の圧倒的な力に遠く及ばないという、単純な結論に達する事ができなかった。一に一を足しても百には及ばない。たったそれだけのことが。

(なあ、ミツキ?)

(何だ、主よ?)

(何かこう、必殺技みたいなものってあるか？ ずがーんと派手にぶちかませる奴)

(無論だ。我は竜王ぞ。当然ド派手なのがあるわ)

何が当然かよく判らなかったが、ともかく和人の心は決まった。

海竜はアルナギンゴを啜えたまま海面を目指して浮上し、勢いを殺すことなく海面から空中へとその身を躍らせた。

飛び出した瞬間に三度ドラゴン形態になった銀竜は、そのまま上空へと舞い上がる。

そして適当な高度に達すると、ドラゴンは加えていたアルナギンゴを解放する。

勿論今のアルナギンゴに空を飛ぶ力はない。そのまま海へと落下するアルナギンゴに、空中で留まったドラゴンはその巨大な顎を開

くと、ドラゴンの前方に六つの光り輝く円輪が現れた。

一つはドラゴンの開かれた顎のすぐ前に。そこから少し離れて正五角形を描くように五つの光り輝く円輪が配置される。

ドラゴンの開かれた顎の奥には、煌々と輝く光の塊。

(行くぞ主っ!!)

(よっつっしやあああああっ!! ぶっちかませええええええええええっ!!)

煌とドラゴンの顎より迸る光の帯。

光はすぐ前方に展開された、一つの円輪に吸い込まれて行く。円輪に吸い込まれた光は、一拍後に五つの円輪より更に光を増した奔流となって溢れ出る。

一旦は散開した五条の光の奔流は、再び標的目指して収束する。

標的 アルナギンゴに天より五つの彗星が降り注ぐ。

鮮烈な光の奔流。

光と光が互いに相乗しあい、その輝きを更に押し高める。

強烈な破壊の光。

その光は飲み込んだものを無に帰す、圧倒的なまでの膨大な魔力を宿して。

その熾烈な光の中で、アルナギンゴは自身の身体が単なる魔力に分解され、拡散していくのを感じた。そしてそう感じる意識さえもが、徐々に希薄になっていくのを同時に感じていた。

光の奔流が収まった時、そこには巨大な怪獣の姿はなく、二つの小さな光を放つ宝石のようなものが浮かんでいるのみだった。

(あれは……?)

(あれこそが魔石よ。我らの本体だ)

ドラゴンは翼を打つと、空に浮かぶ二つの魔石を器用に口に啜え

た。

(どうするんだこの魔石?)

(この魔石もあと数百年もすれば自我に目覚め、新たな幻獣となる。それまでどこかで静かに眠りにつかせてやろうと思つての)

(そうだな)

魔石が怪獣となつたのが人間のせいならば、この魔石自体には何の罪もない。和人はミツキの意見に同感した。

(なあミツキ)

(ん?)

(早く帰ろうぜ。きっとみんな待ってる。兄ちゃんや茉莉も心配だしな)

そう言つて笑う和人にミツキは一つ頷くと、城ヶ崎の街を目指して翼を翻した。

天空より降り注いだ五つの彗星は、遠く離れた怪獣自衛隊城ヶ崎基地からでも確認された。

「どうやら終わったようですな」

「そのようですな。ところでカーナー博士、身体の方は大丈夫ですか?」

改めて衣服を身に着けたシルヴィアに、権藤は微笑みながら尋ねた。

「ご心配には及びませんわ。肉体の方には魔道パスを通じて熱が流

れ込んだだけです。精神面には少々負荷がかかってしまいましたが、大事には至っていません。それよりグリフォンと白峰三尉の方は？」

「先程入った連絡によると、白峰三尉の生存は確認された。しかし全身各所に火傷が認められている。まあ、こちらは大した事はないそうだが、左腕が酷いらしい。下手をすると切断しなくてはならないそうだ……」

権藤の言葉にシルヴィアは一瞬眉を顰めるも、すぐに表情を取り繕う。

「そうですか……あの熱量の中でそれだけで済んだのは僥倖と言えるでしょうね……」

「グリフォンの方は、救助隊が駆けつけた時には既に姿がなかったそうだよ」

こちらは多少なりとも回復した茉莉とベリルが、早々にその場を離れたからだろうとシルヴィアは推測した。

「では、司令。私はこれで失礼します」

シルヴィアは権藤にそう言い残すと、指揮室の出入り口を目指す。

「博士はどちらに？」

そう尋ねる権藤の口元が笑っている。これから彼女が向かう先を判っていて、敢えて尋ねているのだ。

「傷付いた夫を優しく介抱するのは妻の役割ですよ？」

振り返ったシルヴィは、ぱちりとウインクを飛して指揮室を後にした。

「ずるいつ!!」

例の岬の林の中から茉莉の声が響いた。

茉莉は融合の際に消えてしまわないように、予め服を脱いで林の中に隠していた。

その服を着ながら、林の外で待っている和人と毅士　正確には和人だけに　文句を言い続けていた。

「どうして和人は幻獣と融合しても服がなくならないのっ!? それってずるくないっ!?　ねえっ!?!」

「そんなこと言われてもなあ……」

困り果てた和人は毅士を見るが、毅士もお手上げとばかりに肩を竦めた。

「それは魔力の扱い方の差よの」

そんな和人を助けるように言葉を挟んだのはミツキだ。

「ベリルは自我に目覚めてから1000年程のまだまだ若い幻獣だ。自我に目覚めて1000年以上経つ我とでは、魔力の扱い方に差が出るのも道理である?」

「それじゃあ、ベリルも魔力の扱い方が上手くなれば、服が消えることもなくなるの?」

「然り。じゃがそれにはあと数十年はかかるっがな」

「それじゃあ意味ないじゃんっ!!」

その後も「ぶーぶー」と文句を言い続ける茉莉に苦笑しながら、和人は毅士に尋ねる。

「そついや毅士は怪我とかしてないか？」

「ああ、僕なら大丈夫だ。あの怪獣の水のノコギリみたいなのが岬を斬り飛ばした時に、振動で転びはしたが別に怪我などはない。尤も」

これだけはこの様だがな、と割れた眼鏡をポケットから取り出して和人に見せた。

「転んだ弾みで眼鏡が飛ばされて、落ちた時にレンズが割れたらしい。」

「茉莉の方は大丈夫か？ 随分攻撃を食らったみたいだけど」

次に和人は林の中の茉莉に声をかけた。

「うん。骨が数本折れちゃったけど、それはもうベリルのお陰で治りかけて、あまり痛まないし。そのせいでベリルはボクの中から出てこれないけれどね」

茉莉の言葉通り、ベリルは自身の魔力で茉莉の体内から茉莉の怪我を癒している真っ最中だった。

「契約者は幻獣の魔力で傷が治るって本当だったんだ」

「何だ主よ？ 我の言葉を信じていなかったのか？」

「そついう訳じゃないけど、何となくぴんとこなくてさ」

「やれやれ。これから主には我ら幻獣の事を徹底的に教え込まねばならぬの。幻獣の、いや幻獣王の契約者ともある者が、幻獣について無知ではちと情けない」

ミツキのその言葉に和人が顔を顰めた時、林の中から茉莉が出て来た。

「よっし！ それじゃあ帰ろうぜ！」

和人は一同を見回すと、そう言って皆を促した。

帰ろう。その言葉を聞いた時、茉莉の胸に何か温かいものが湧き上がった。

茉莉はこれまで何度もベリルと共に怪獣と戦った。

だが帰る家というものを持たない彼女は、戦いの後そのままふらりとその土地を離れることが殆どだった。

だから和人が「帰ろう」と言ってくれた時、茉莉は嬉しかったのだ。帰る場所があること、帰ろうと言ってくれる人がいることが。

「うんっ！！ 帰ろうっ！！」

茉莉は満面の笑顔で、和人の腕にしっかりとしがみ付くと元気に答えた。

22 - 流星（後書き）

本日の投稿です。

次の話で一応の一区切りとなります。

今後ともよろしくお願い致します。

23・明日(前書き)

今回で『怪獣咆哮』の第1部は完結です。ここまで読んでいただいてありがとうございます。

第2部以降も引き続きよろしくお願いします。

和人がミツキと契約を交わしてから2週間が過ぎた。

アルナギンゴとの戦闘は港湾部で行われたため、城ヶ崎の街には殆ど被害はなかった。

交戦地帯の港湾部では、怪獣自衛隊城ヶ崎基地の施設も含め一部に僅かな被害が出たのみだったが、怪獣自衛隊が満を持して送り出した新兵器、『魔像機』は大破してしまった。

「表面装甲は現在の物理打撃重視の施術じゃだめね。対魔術も考慮しないと……」

現在シルヴィアは『騎士』の修復と改良に大忙しだった。今後の大きな課題は今回の大破の原因である対魔術の防御力強化である。

しかし『魔像機』の有効性は十分に実証された。そのため『騎士』の二号機以降の開発も重なり、彼女の多忙は更に増大していた。

そんなシルヴィアだが、暇を見付けては現在の住処としてしまった白峰家にちよくちよく帰ってくる。

勿論、その目的は言わずもがなで

「はい、明人くん あーん」

シルヴィアはスプーンで掬ったご飯を、左手を包帯で固定している明人の口元に笑顔で突き付けた。

「あ、あの、いや、ですから、そ、その、シルヴィアさん、自分、右利きで、その、怪我は左手だから食事に不便はありませんから、その……」

「あら、だめよお？ 怪我人は大人しくしていないと。治るものも治らないわよ？」

「いや、ですから……って、おい、和人！ そんな生暖かい目で見てないで何とかしてくれっ！！」

「ごめん、兄ちゃん。俺には無理」

「ボクもー。ごめんね、明人さん」

明人の救援要請をすっぱりと拒否する和人と茉莉は、目の前で展開される光景を無視して食事に専念する。

「あと数日我慢するがよい、兄者殿。そうすればお主の左手も完治しよう」

アルナギングの火焰を楯で受けたため、魔像機と直接リンクしてその熱の影響を直に受けた明人の左手はかなり酷い火傷を負った。

彼の左手を診察した医師は即座に左手の切断を決断したのだが、その左手に治療を施したのはミツキであった。

治癒の魔術は極めて高度な魔術である。シルヴィアも初歩の治癒魔法なら使えたが、明人の左手を完治させるような上位の治癒魔術の施術は不可能だった。

しかし幻獣は魔力さえあれば自己修復できる。それは治癒魔術ではないが効果は同じだ。

そして幻獣はその自己修復能力を、契約者にのみ発動する事が可能なのだ。

だがミツキは、その治癒能力を契約者でもない他者に対して使用できた。

彼女が言うには、以前ならそのようなことはできなかったが、和人という契約者を得ることでミツキの能力もまた上昇しているからだそうだ。

尤もそれは、幻獣王たるミツキだからこそであって、ベリルには不可能なことであったが。

明人の左手は切断せずに済んだ訳だが、それでも完治に至るには一ヶ月程安静にしなければならなかった。故に現在明人は自宅療養中である。

そんな明人を、甲斐甲斐しく世話しているのがシルヴィアという訳だった。

勿論彼女の狙いは好感度のアップである。因みにこの作戦を入れ知恵したのは実は茉莉だったり。

現在白峰家の居候女性陣は、共に連携して白峰兄弟に気に入ってもらおうと鋭意努力中なのである。

「薄情過ぎないかこんちくしょう！ 兄ちゃん、情けなくって涙出てくらあつ！！」

兄の恨み言を弟はスルー。

和人は明人とシルヴィアはお似合いだと思う。いや、兄には勿体ないぐらいシルヴィアは美人で、優しくて、頭が良くて、そしてばいばいなのだから。身の回りの整頓が不得手なことはこの際度外視する。内心では将来シルヴィアを義姉と呼ぶ決心もしていた。だが問題もある。

「はい、和人。和人もあーん」

それがこれだ。茉莉が悪戯っぽく微笑みながら、シルヴィアの行動を真似るのだ。

茉莉は箸で南瓜の煮物を和人に差し出す。勿論この煮物は彼女の自信作。そしてその際、左手を受けるように添えるのも忘れない。中々ツボを突いた仕草であった。

「やめろ、馬鹿。俺はあんなバカカップルになる気はないぞ」

「ば、バカカップルとは何だ、バカカップルとは！」

「あら、いやん。でもこれで明人くんの唯一の身内公認ね。きやつ
」

「し、シルヴィアさんっ！！　そこで一人で身悶えしないで下さい
っ！！」

再び騒ぎ出す兄と義姉（暫定）にやれやれと肩を竦めた時、和人は茉莉が自分をじっと見ている事に気付いた。

「どうしたんだよ？　俺の顔に何か付いてるか？」

「うっん、そうじゃなくて。和人さつき、バカカップルになる気はないって言ったよね？」

「？　ああ、そう言ったけど？」

「じゃあさ、じゃあ……普通のカップルになら、なってもいいってことだよね？」

和人は口の中に入っていたものを吹き出した。ぶはーっと盛大に。

「な、なななな、何言い出すんだよ、おまえっ！？」

「えへへ。だってそういうことだよー？」

「ち、ちちちち、違、そ、そんなこと言っつてねええええっ！！」

そして始まった弟と義妹（予定）のいつもの応酬に、明人は思わず苦笑を零す。

とまあ、この様に白峰家は概ね平和だった。

その日の夜、和人は屋根の上で夜空を眺めていた。

2週間前、ミツキが現れた夜が満月だったので、今日はほとんど

月は見えない。その代わりにたくさんの星の光が、和人の目には映っていた。

そんな夜空を見上げていた和人の傍らに、静かに茉莉が立った。

「ここにいたんだ？」

「ああ」

「考え事？」

「ああ」

そう言ったとき茉莉は何も言わないまま、ただ黙って和人が口を開くのを待っていた。

どれくらいの時間が経ったか。やがて和人がぼそりと言葉を紡いだ。

「この前、権藤さんに言われたことを考えてた」

怪獣自衛隊城ヶ崎基地の司令官である権藤が、白峰家を訪れたのは数日前の事だった。

表向きは自宅療養中の明人を、権藤が経過を知るために尋ねたことになっている。

だが権藤の目的はもちろん、明人の見舞いなどではない。

その場に居合わせたのは和人と茉莉に其々の幻獣であるミツキとベリル、それに明人とシルヴィアに何故か毅士も呼ばれた。

権藤の来訪の目的は和人と茉莉、それに毅士の三人に怪獣自衛隊に強力して欲しいというものだった。

「和人と茉莉くんは無論、それぞれの幻獣の力を期待してのことだ。毅士くんには知識面で是非強力して欲しいと、カーナー博士より要請があつてね。君の怪獣に関する知識とこれまで独学で研究してきた成果は、一介の高校生とは思えぬものがあると彼女も感心

していたよ」

毅士はここ数日、頻繁に白峰家に訪れてはシルヴィアと怪獣に関する意見を交換していた。それがシルヴィアの関心を引いたらしい。

「何も今ここで返答が欲しいとは言わない。よく考えてくれたまえ」

そして、いい応えを期待しているよと言い残し、その日の権藤は白峰家を後にした。

それからずっと和人は考えていたのだ。

「俺は個人が手にするには、あまりにも巨大過ぎる力を手に入れた。俺はこの力を何かの役に立てたい」

「じゃあ和人は……」

「ああ。権藤さんの要請を受け入れるつもりだ」

全ての人が救えるなんて思わない。だが自分の手の届く範囲だけでも、自分の力が及ぶ限りの人々を救いたい。

それは和人がずっと思い描いていた事なのだから。

「元々兄ちゃんみたいに、怪獣自衛隊に入って怪獣と戦うつもりだったからな。ちよつとばかり予定が早まっただけさ」

「そっか。じゃあボクも和人を手伝うよ。和人と一緒に戦う」

「お、おい、茉莉は」

無理する必要ない、と続けようとした和人。だがその言葉は、彼をじっと見詰める茉莉の視線の前に霧散した。

茉莉の瞳に宿るは決意。決して変わる事も、変える事もできない不動の思い。

「和人が戦うのなら、ボクも一緒に戦う。それに元々ボクは怪獣と戦うのはボクが決めたことだしね。皆を守るといのが和人の決意なら、和人を守ることがボクの新しい決意だよ」

「ならば僕も協力しよう。当然僕の役割は知識面でのサポートだな」

二人の耳に第三の声が響く。その声の主はもちろん毅士だ。

「おう、毅士。来てたのか」

「こんな時間に少々恐縮だがお邪魔させてもらった。製作した怪獣のレポートをシルヴィアさんに提出したかったのだな。それよりも、やはり和人は戦う事を決意したか」

毅士には和人がそう決意する事は想像がついていた。和人との付き合いは長い。それぐらいのことは容易に思い至るといふものだ。だから毅士はこの話を聞いた早々から、怪獣自衛隊に協力するつもりでいた。

そしてそこに、第4の声があった。

「やれやれ。守るだの協力するだの、そのようなものは不要よ。我が主、和人様には最強の幻獣にして竜王たるこの我、ミツキがついておるのだ。これからの主の歩む先に、勝利はあっても敗北は存在せぬ」

声と共にミツキは姿を現わす。

「安心召されよ、主。我と共にある限り、主の未来には栄光あるのみぞ」

えっへん、とばかりに両拳を腰に当てて胸を張るミツキ。シルヴィア程ではないものの、茉莉以上はある胸がふわりと揺れる。

「ちょっと待ちなさいよ、ミツキっ！！ 和人をサポートするのは妻であるボクの役目なのっ！！」

「笑止。そのような些細な胸で主が満足すると思うてか？ 主は明らかにナイチチ派ではなくアルチチ派ぞ？ その点、我ならば幾らでも身体を変えて対応可能よ。ちなみに言うておくが、普段のこのサイズは別段身体を変化させておる訳ではなく、これが我のナチュラルサイズ。この時点で既に貴様の負けよの、小娘」

ふふんと勝利の笑みを口元に浮かべ、両手で自身の胸を掬い上げるようにして見せつけるミツキ。

「むきいいいいっ！！ 胸は関係ないでしょっ！？ 大切なのは愛情よ、愛情っ！！」

「何を言うっ！ 身体の相性は大切なのだぞ！ よいか？ そもそも男と女とは」

「何よっ！！ ボクだって」

「あー、おまえらー。夜も遅いんだから近所迷惑になるから止めとけー。それよりも一体何の話をしてるのかなー」

和人は変な方向にヒートアップして口論を続ける二人に、おざなりに一言声をかける。

「大変だな、相変わらず」

「苦労しておるな、和人殿」

そんな和人に毅士といつの間にかいたべリルが、ぼむと和人の両肩に手と爪をかけて同情の視線を向けた。

まあ、やっぱり、白峰家は平和なのだった。

突如、携帯していた小型無線機がアラートを告げる。

学校帰り、のんびりと歩いていた和人は慌てて小型無線機を耳に当てた。

この無線機は外見こそ普通の携帯電話のようだが、実際は怪獣自衛隊から与えられた軍仕様ものだ。その無線機から聞こえてくる権藤の声に、和人は了解の意を告げると家に向かって走り出した。

和人たちが怪獣自衛隊に協力していることは、自衛隊内部でも一部の人間しか知らない最重要機密である。だから怪獣自衛隊から協力要請がある場合は、権藤から直接二人の元に連絡が届く。

それでもここ最近、怪獣と戦うドラゴンとグリフオンの事は、マスコミを始め各方面で色んな憶測が飛び交っていた。

だが、そのドラゴンとグリフオンの正体が、10代の少年と少女だとは誰も思いもしないようだ。

そして家に向かう途中で、やはり同じように走ってきた茉莉と出会う。

「権藤さんからの無線は聞いたかつ!? この近辺じゃないけど怪獣が現れたらしいっ!! 怪獣自衛隊に出動要請があったそうだったっ!!」

「うん、ボクも聞いたっ!! 明人さんとシルヴィアさんは、『騎士』と一緒に既に現場に向かったってっ!!」

二人は互いに頷き合うと、その半身ともいうべき幻獣の名を呼ぶ。

「ミツキっ!!」

その声に応じて、ミツキが和人の前にふわりと空から舞い降りる。

「我は何時でも主の御前に」

ミツキが、その銀の髪を掻き上げながら不敵に笑う。

「ベリルっ!!」

その呼びかけに応えて、小さな身体が茉莉の横に姿を現す。

「私は何時でも茉莉の力となるう」

姿を現したベリルは、茉莉の肩にちょこんと止まった。

「行くぞっ!!」

「うんっ!!」

和人と茉莉は、声を掛け合うと一緒に駆け出した。そして人目のない路地裏に飛び込むと、互いの幻獣と融合する。

辺りに銀と碧の光が満ちる。

銀と碧の光は、空高く舞い上がりそのまま大空を翔け抜ける。

やがてその光の中からドラゴンとグリフォンが姿を現す。

2体の巨大な幻獣は、その力を必要とする人々の元へと力強く羽ばたいた。

23 - 明日（後書き）

本日の投稿。

以上を持ちまして、『怪獣咆哮』第1部は終了です。

第2部以降ももちろん続ける予定ですが、以前説明した通り、今後は毎日の更新ではなく不定期の更新となりそうです。

最低でも一週間に一回の更新を目指してがんばるつもりです。もちろん、早く仕上がればその都度投稿します。気長にお付き合い願えれば幸いです。

それでは、ここまで読んでいただいた全ての方へ感謝をこめて、ありがとございました。今後ともよろしくお願いいたします。

01 - 部隊（前書き）

何とか一週間かけずに投稿できました。

01 - 部隊

白峰明人^{しろみね あきひと}二等怪尉 先日のアルナギンゴ戦の戦績により昇進は、目の前に並ぶ男女を静かに見つめる。

彼の前には、今後正式な部隊となり、彼の部下となる数人の男女が整列していた。

「本日付を持ちまして、正式に白峰二尉の部下となりましたアンジエリーナ・ブラウン二等怪曹です。主な役割は作戦時の周辺状況の監視確認です」

「同じく、ベアトリス・ブラウン二等怪曹。私は白峰二尉と『騎士^{ナイト}』のコンディションの監視担当です」

左右に並んだ同じ顔が敬礼しながら発言する。

彼女たちはシルヴィアと共に招聘された魔術師で、シルヴィアの弟子でもある。

見た目からも判るように彼女たちは双子で、赤毛を背中まで伸ばしたのが姉のアンジエリーナ、ベリーショートで眼鏡を愛用しているのが妹のベアトリスである。

彼女たちは正式には自衛官ではなく、シルヴィア同様二等怪曹待遇で招聘されている。

「同じく、緑川正太郎^{みどりかわ しょうたろう}怪士長^{ゴレム}であります！ 自分は『魔像機』用の輸送ヘリのパイロットとして配属されたであります！」

双子の横に並んだ体格の良い、三十前後の男性が張りのある声を上げる。

180cm近い長身とがっしりと鍛え上げられた身体。短く刈り込んだ髪と、見るからにベテラン自衛官といった風貌の男性。

だが、彼の前に立つ明人は、その男性の一言が気になった。

「『魔像機』の輸送へリ？」

若干首を傾げる明人の問いに応えたのは、前に立つ緑川怪士長ではなく、明人の横にいたシルヴィアだった。

「現在製作中の『魔像機』専用の輸送へリよ。アルナギンゴ以後、怪獣の襲撃は二件あったけど、その際に判明した『魔像機』の欠点の一つに、展開速度の遅さが挙げられたの。その欠点を補うために専用の輸送へリが設計開発され、近日中に完成の見込みよ」

現在、『魔像機』は怪獣自衛隊城ヶ崎基地しろうがみに配備された『騎士ナイト』しかない。そのため、怪獣が出現し応援要請の都度『騎士』は城ヶ崎基地から目的地へと赴くわけだが、目的に到達するまでの速度が問題としてあがったのだ。

なんせ『騎士』は巨大である。だが、その巨体を目的地まで運ぶ手段がなかったのだ。

過去の二件では、『騎士』を一旦巨大な輸送船に載せ目的地付近まで輸送、そこからは陸路を歩くしかなかった。そのため、『騎士』が目的地に到着する頃には、既に怪獣はどこからともなく現れた銀のドラゴンと白いグリフォンに倒された後だった。

その問題解決のため、城ヶ崎基地より直接『騎士』を空輸するための専用輸送へリの開発が着手されたのだ。

「そうか。『騎士』が少し小さくなったのは、その問題もあってですか」

「Exaxtly!」
その通り

明人の推測に、シルヴィアはにっこりと微笑む。

アルナギンゴ戦で大破された『騎士』。その後、シルヴァアの手により改修され、現在では『騎士Mark.？』ともいうべきものに生まれ変わっていた。

改修前は四角張った印象が強かった全体は、丸みを帯びた滑らかなフォルムに変更。全長も30m弱だった回収前と比べて、20m少々とダウンサイジングされた。これはプロトタイプの40mに比べると、実に約半分のサイズとなっている。

もちろん、前回のアルナギンゴ戦で確認された怪獣が用いる魔術に対しても対策が施され、全身を覆う装甲には強度強化と耐魔術の施術が施された。加えて左手に装備する楯は耐火魔術と耐魔術が施術された二種類が用意された。楯については、今後も様々な種類の対抗魔術が施されたものが用意される事になる。

そしてダウンサイジングされた理由は、やはり輸送速度を上昇させるためと、将来的に二号機以降が製造される際のコストダウンも兼ねている。

「とは言え、20m少々の『騎士』をすっぽり収納するような巨大なへりはコスト的に無理みたいだね。へりの下に『騎士』を宙釣りにした形での輸送になるわ。正直、最初はSFアニメみたいな専用の空中輸送艦でも作ろうと思っていたんだけど……」
「やっぱりコストが許さなかったってわけですか……」

確かに『魔像機』を造ったように、魔術を組み込めば巨大な空中輸送艦も造れなくはないだろう。

だが明人は、空中輸送艦の建造が立ち消えたことにそっと胸をなで下ろした。

ただでさえ、巨大ロボットというSFじみたものが存在するのに、この上さらに巨大空中輸送艦などというトンデモ兵器が現れては、自衛隊のアイデンティティはどうかなくなってしまふ。

今更かもしれないが、はっきりと言おう。自衛隊は軍隊ではない

のだ。

世間は一般的にいうところの夏休みに突入した。

そのため、普段は学校へ行っている昼の白峰家しろみねに、和人の姿かすこがあるため、茉莉まつりとミツキはご機嫌だ。

居間の足の低いテーブルで夏休みの課題を仕上げている和人の左右に、茉莉とミツキはちゃっかりと陣取ってじっと和人の様子を眺めている。

そして見た目は一心不乱に課題に取り組んでいる和人だが、心中ではそれどころではなかった。

今は夏。皆薄着になる季節である。当然、茉莉やミツキも例外ではないのだ。

服の数がめつきり少なかった茉莉も、最近ではそれなりに数が揃いつつあるようで、日ごとに違う服を着ている。この家に来たばかりの頃は、何日も同じ服ばかり着ていたものだったが。

そしてミツキも。

以前の彼女は魔力で編み上げた自前の服を着ていたが、ここところははすっかり人間のファッションというものに興味を湧いたように、シルヴィアのファッション雑誌を眺めている姿がよく見かけられる。

そして実際に様々な服や下着を買い込んできては、嬉しそうにあれこれ着ているようだ。

おかげで最近の白峰家の洗濯物は、白だのピンクだのブルーだのストライプだの紫だの黒だの紐だのと、とてもカラフルだ。特に下着の類が。

家主でもある白峰兄弟がいない場所では、日夜この家に住む女性陣がやれ『主の好みそうな下着は面積の少ないものかのお』とか『ボクはやっぱり和人は清纯路線が好みだと思うな』とか、『あら、ひよっとして同じ兄弟なら明人くんもかしら?』といった秘密会議

が繰り広げられていたりする。

そして、これら茉莉やミツキの服の代金を出しているのはシルヴィアであった。

どうやら彼女はかなりの資産家のようで、彼女が白峰家に転がり込むまで住んでいた例のマンションだが、実はあの一棟全部が彼女所有の不動産であり、現在は一般向けの賃貸マンションとして解放されている。

ちなみに、シルヴィアの弟子でもあるアンジェリーナとベアトリスだが、彼女たち姉妹も現在このマンションにて暮らしている。

両隣に座る二人の少女たちを無視して、和人は一心不乱に夏の課題に取りかかる。

そうでなくては持たないのだ。特に理性が。

暑い季節。しかも居候先とはいえ自宅の中となれば、誰だって薄着になるうというもの。

だからといって、二人ともノースリーブにショートパンツのみとは如何なものだろうか？

身を乗り出すように和人の様子を窺う茉莉とミツキ。

屈んだ胸元からはミツキの豊かな胸の双丘の三分の二は覗けてしまふ。というより、辛うじてオフホワイトのブラによって胸の先端だけが隠れているような状態だ。

対して茉莉はいえ、こちらはミツキほど豊かではないが、それでも淡いブルーのブラは殆どまる見えだし、形の良いしなやかな両の足は95%以上が丸出し。

だから和人は課題に取り組む。崩れ掛ける理性を総動員して。

そうしないと、きつと彼はこの二人から逃げられなくなるから。色んな意味で。

もつとも、そうなるのも悪くないかもな、と最近思ったりもするのだが。

「は？ 合宿？」

本日の務めを終え、帰宅した明人とシルヴィアが夕食を食べながら不意に明日から合宿に行くと言い出したのだ。

「合宿っていうより親睦会かな、正確には。ほら、兄ちゃん明日から三日間の夏期休暇の予定だったろ？ その三日を利用して、新たな部隊の仲間だな」

「今後一緒に戦って行くメンバーなんだから、親睦を深めなきゃね？」

明人を中心にした新たな部隊が、怪獣自衛隊城ヶ崎基地で結成されたのは和人たちも聞いていた。

具体的な部隊の仕組みとしては、部隊の隊長兼事実上の実動部隊員である明人と、その明人を様々な形で後方支援する者たちで組んだ部隊らしい。

もちろん、シルヴィアもオブザーバーとして部隊に参加している。

「それでどこで合宿するんだ？」

「それがね、隣の県の海沿いに倒産寸前のリゾートホテルがあつてね、以前そこを買収して改修工事をしていただけ、それが数日前に終わったの。だから、新ホテルのオープンセレモニーも兼ねてそのホテルで合宿しようかな、っと思つて」

「ホ……ホテルを……買収……？ 改修工事……？ オープンセレモニー？」

「え？ つて事は何？ シルヴィアさんがそのそのホテルのオーナーって事？」

「す……すごいっ！！　すごいね、シルヴィアさんっ！！　ホテルのオーナーなんてかっこいいっ！！」

無邪気に喜ぶ茉莉とは対照的に、白峰兄弟は何やらぼそぼそ話し合っ。

「なあ、兄ちゃん。シルヴィアさんって、ひよっとしてかなりの金持ち？」

「どうもそうらしい。何でも『魔術を研究するにはまず資金集めから』というのが彼女の師匠の口癖だったらしい。だからいつの間にかあれこれ資産が貯まり、今では資産が資産を産んでいる状態とか何とか言ってたな」

へえ、そうしたら兄ちゃん逆玉かあ、と感心する弟に、どこか納得の行かない顔の兄。

「話は判ったよ、兄ちゃん。合宿ったって、仕事の延長みたいなもんだろ？　折角の休みなのに大変だな。こっちはちゃんと俺たちでやるから心配すんな。最近俺一人じゃないしな」

「……だから心配なんじゃないか……」

「何か言ったか、兄ちゃん？」

「……何でもないよ……」

明人として、和人の事は信用している。兄であり保護者である自分がいないからといって、二人の少女たちと如何わしい行為をするとは思えない。

思えないが、それでも和人は高校生男子。女の子とのあんな事やこんな事に興味一杯の年頃なのである。

まかり間違っって、もしくは何となくそういう雰囲気になって……など、その場の状況に流されないと限らない。

それでも、相手があの子女たちなら別に構わなくもないかな、と明人は思う。

茉莉は明るくてよく気の利く少女だし、ミツキは何だかんだ言っても和人には従順だ。

そこまで考えて、明人はふと疑問に思った。

(そういや、人間と幻獣との間に子供ってできるのか?)

もし人間と幻獣の間に子供ができないのなら。それなら別に和人とミツキが何しようが構わないわけで。

いや、保護者としては、一人の少女と一時的な感情でそのような事は……と倫理的な考えもあつたりなかったり。

兄心は複雑だよなあ……と、明人は一人腕を組んでそんな事を考えていた。

そんな明人の思いも知らず、彼の横に座っていたシルヴィアが、不意に何やら笑みを浮かべた。

そりゃあもう、私、いい事考えちゃった。えへ。と口で語らずともその眼が全て語っているような笑みを。

「そうだわ。和人くんたちも一緒に来ない？ もちろん、毅士くんも誘って」

「え？ いいの？ 俺たちも行つて？」

「ホントにつ！？ わ、わわわ、ボ、ボク、ホテルに泊まるのって初めてっ！！」

「ほほう。面白そうじゃのお、魔術師の女よ」

和人たちが喜びの声を上げる中、シルヴィアはいいよね、と今更明人に確認を取る。

明人とて、こんなに喜んでいる和人たちに来るな、とは言えないわけで。

考えてみれば、両親が他界して以来、明人も和人を旅行になど連れて行った覚えがない。

今回の合宿は元々休暇だし、合宿といっても親睦会のようなもの。この際だから家族旅行もいいか、と明人も思い至る。

「よし、こうなった家族で旅行といくか！」

鶴の一言に歓声を上げる和人たち。

そんな一方で、茉莉は明人の「家族で旅行」という言葉に、ぐっと胸に込み上げてくるものを堪えるのに必死だった。

思えばまだ両親が生きていた頃、両親と共に旅行に行った記憶が朧げながらある。

だが、いつ、どこに行ったのかまでは覚えていない。だから。

茉莉にとつて、新たに得た家族での初めての旅行。

もちろん、本当の両親とは違う家族だけど。それでも家族だと思える人たちと一緒に行く旅行。

茉莉は和人たちに気づかれないように、そっと涙を拭う。もちろん、それは悲しみからくるものではなくて。

そんな茉莉の様子を、彼女の肩にとまっているベリルだけがそっと窺っていた。

いたんだ、
ベリル。

01 - 部隊（後書き）

何とか完成したので投稿。

ふう、一週間どころか三日もかからなかったぜ。

でも、次がいつになるのかは断言できません。

このペースがいつまで続くのかも明言できかねます。

こんな感じで更新していきたいと思いますので、今後ともよろしくお願いします。

ところで、自衛官にも夏期休暇ってあるよね？ 国会議員にだってあるぐらいだしね？

02 - 親睦

「幽霊？」

部屋へ戻って来た明人が、待っていた和人にそう説明した。

「ああ、浜辺の東の方の岩場に洞窟があるらしいんだが、その中に幽霊がでるつてのがこの辺りの土地に昔から伝わっているらしい。だから近づかない方がいいと町場の人が言っていたんだ」

それは先程行われたこのホテルのリニューアル・セレモニーの席での事。

リニューアル・セレモニーと言っても、都会とは呼べないような地方での事、集まったのはホテルの関連業者、即ち、食材やアメニティその他の消耗品を納入する企業や、この土地の役場の役人など。ホテル側の参加者は、ホテルの支配人やその数名の部下、そしてオーナーであるシルヴィア。なぜか明人までシルヴィアのパートナーとして参加させられたりしたが。

その際、集まった人たちにシルヴィアが、明人を婚約者として紹介したりして明人を大いに慌てさせたりした一面もあつたり。

最近、徐々に外堀が埋められてやしないか、と危機感を募らせる明人であつた。

本日、このホテルに泊まっているのは白峰一行のみ。

なぜならこのホテルの営業開始は来週からで、現在では営業されていないのだ。

それでもオーナーの家族　シルヴィア主張　や知人が泊まる
とあって、ホテルのスタッフは万全の態勢で彼らを受け入れた。
とはいえ、その人数は必要最低限である。泊まる人間が十人にも
満たないので、何十人もスタッフは必要ないのだ。

特に厨房のスタッフには今殆ど回参加してもらっていない。食材
は白峰一行が持ち込み、調理も自分たちで行うと予め通達してあつ
たからだが、それでもスタッフの賄い分の最低限の人たちに参加し
てもらっている。

どうやらシルヴィアは彼女の持つ様々な伝を使って優秀なスタッ
フを集めたいらしい。

このホテルに到着し、スタッフの仕事振りを見た毅士たけしは、きつと
このホテル経営は成功するだろうと予測する。

必要などころには惜しみなく資金を注ぎ込む。もちろん、無駄に
注ぎ込むことは浪費以外のなにもでもないが、必要などころの投
資を惜しまないのは、経営者としては正しい姿だろう。

きつとこれがシルヴィアが言っていた、「資産が資産を産む」と
いう事なんだろうと、毅士はいたく感心した。

さて、そんなセレモニーから帰ってきた明人が、ホテルの客室で
待っていた和人に告げたのが先程の言葉だった。

どうやらこの付近に、昔から幽霊が出るという噂の洞窟があるら
しい。

和人は明日にでも行って見ようと思い、毅士の意見を聞こうと彼
へと振り返る。だが、毅士は新たに兄の部下になったという緑川みどりかわと
いう大柄な男性と話しているところだった。

「なあ、少年。君はどっちを選ぶ？」

「は？ 何のことですか、緑川さん？」

「決っているだろう！ どちらの女性を選ぶか、という事だよ！」

どびしっ！ とばかりに毅士に指を突き付け、熱血風味に宣言する緑川。

「つまりだな！ 君はアンジーちゃんかベッキーちゃんのどちらを選ぶのか、と聞いているんだ！」

「ちなみに、緑川さんはどちらを選ぶのですか？」

「決まっている！ アンジーちゃんだっ！！！」

「ほう。理由を聞いてもいいですか？」

「決まっている！ アンジーちゃんの方が胸が小さいからだっ！！！」

緑川はどどーんと背後に荒波でも背負いそうな勢いでカミングアウトした。

「どうやらこの大柄な男性は、胸の小さな女性がお好みらしい。」

「本当言うと一番の好みは茉莉ちゃんなんだが、彼女は隊長の弟くんの恋人らしいじゃないか」

更にこの三十過ぎの男性は、かなり年下の女性がストライクらしい。それも、自分の半分の年齢でもOKときた。

「あのミツキっていう娘も悪くはないが、俺は所謂「ロリババア」は好みじゃないんだ。カーナー博士は隊長の婚約者だし、そうすると残りはブラウン姉妹だろう？」

ミツキは確かに古風な口調で喋るが、別に「ロリ」に分類されるような容姿はしていないよな、と和人は思った。

対して、シルヴィアさんは別に婚約者じゃない！ と声を大にして明人は叫んだが、残念ながら熱弁をふるう緑川の耳には届かないようだ。

「そうになると、姉妹のどちらかを君と俺とでお持ち帰りつて事だろ？ なら、君はどちらを選ぶのかな、と思つてな。あ、万が一好みが重なるようなら、ここは年長者に敬意を表して譲るのが筋だぞ？」
「ちよ、ちよつと待て、緑川怪士長！」

何やら只ならぬ方向へと進む話に、思わず明人は口を挟んだ。

「お持ち帰りとか何とか、高校生にする話じゃないだろう！」

「お言葉ではありますが、隊長」

どうやら、今度は聞こえたらしい。

「今回の旅行は親睦を深めるのが目的であります！」

「そ、そうだな」

「ならば、ここはやはり男女間の親睦を深める事に集中すべきだと愚考するであります！」

びしっ！ と敬礼を決めながら実にイイ笑顔で答える怪士長。

「ですから、隊長はカーナー博士としつぱり親睦を深めてください！ その間、本官はアンジェリーナ二曹とずつぱり親睦を深めるであります！」

びしっ！ と親指を立てながら実にイイ笑顔でのたまう年上の部下。

「では、君たち！ 早速それぞれ、親睦を深めに行こうじゃないか！ くうっはああああっ！！ 滾みなまつてきたあああああああああああ
あああっ！...！」

叫び声と共に部屋を飛び出す緑川。そんな彼の後ろ姿を明人たちは呆然と見送る。

「な、なあ、和人に毅士……ひよっとして緑川さん、俺がいない間に酒でも飲んでいたのか？」

「いや……そんな筈はないですけど……」

「うん……俺も緑川さんが酒飲んでるところ見てないぞ」

和人たちの言葉に間違いはないだろう。緑川からは一切酒の匂いがしなかった。それはつまり、彼は今、素面であるということだ。

「ちよ、ちよっと待て……素面でアレ……なのか……？」

あんな調子な奴が部下で大丈夫なのか？ と、思わず頭痛を感じる明人であった。

一方その頃、女性陣はといえば。

「大きいのお……」

「うん……大きいね……」

「主のとは段違いよの……」

「うん……和人のとは段違いだね……」

目の前の大きな「ソレ」を、茉莉とミツキは呆然と眺める。

「やっぱり……大きいのは……気持ちいいわね……ああ……」

「そうですね……シルヴィア師……大きいのは……いいですね……

うん……」

「私も……そう思います……あふ……」

シルヴィアたち師弟も、すっかり大きな「ソレ」に浸り切り、どこか官能的な声を零す。

「やはり大きな風呂はいいのお……主の家の風呂も悪くないが、やはり、こう、開放的で広々としたものは、何とも言えぬ爽快感があるのお」

「うん……ボク的には、毎日お風呂に入れるんだから文句を言えるような立場じゃないけど……やっぱり、日本人なら露天風呂だよなえ」

茉莉とミツキは、髪が湯に濡れないように纏め上げながら、広々とした湯船に手足を伸ばして露天風呂を堪能していた。

「明人くんが観光ホテルに露天風呂は絶対に欠かせないって言うていたけど……本当ね。確かにこの景色を眺めながらのお風呂って最高だわ」

今回シルヴィアが買い取ったホテルは海岸沿いに建っており、すぐ目の前には白い砂浜が広がった綺麗なビーチが広がっていた。しかもこのビーチはホテルの所有物であり、所謂プライベートビーチになっている。

ホテルの宿泊客なら誰でも利用でき、このホテルの夏場の目玉の一つでもあった。

そしてもう一つの目玉がこの露天風呂だ。ホテルの屋上に設置されたこの露天風呂は、周囲にこのホテルよりも背の高い建築物がない事もあり、必要最低限の目隠ししか設置されていない。

露天風呂からは眼下に広がる広大な海原が一望でき、特に西側は

綺麗な夕陽が入浴しながら眺められる。

残念な事に、シルヴィアたちが入浴した時には既に陽が落ちてしまっていたが、それでも残照に照らされた朱と群青が混じり合った空と海は実に神秘的であった。

やがて完全に陽が落ち、周囲が闇に沈み込む。

各所に設置された明かりがぼんやりと露天風呂を照らす中、未莉は周囲をつぶさに観察していた。

シルヴィアのだ迫力のボディライン。その減り張りの効いたプロポーシオンは、同性である茉莉から見ても実に魅力的だ。

そして彼女の弟子であるベアトリス。普段はベリーショート型の髪と眼鏡を愛用しているため、どこか物静かな知的な女性といったイメージの彼女だが、今、眼鏡を外して湯船につかり、ほんのりと全身を朱に染めたその姿は、何とも艶めかしい色気があった。

そしてこのベアトリスも師匠であるシルヴィアには劣るものの中々見事な胸の持ち主だった。そりゃあもう、思わず茉莉が歯ざしりしたくなるほど。

そして、茉莉にとってはライバルともいえるミツキ。シルヴィアやベアトリスに比べれば劣るものの、彼女の胸もまた豊かに実っている。

(くうっ！ 彼我の戦力差がここまで大きいとは……っ！！)

茉莉はこっそりと自分の胸を見下ろして、思わず拳を握り締めた。彼女の見たところ、和人は胸の大きな女性が好みのようなだった。

普段一緒に暮らしている以上、それを痛感させられる場面に多々出くわしているから間違いないだろう。

何気なくシルヴィアが立ったり座ったりする際、ゆさりと揺れる胸を凝視していたり、服の胸元から除くミツキの深い谷間をそれとなくじつと見つめていたり。

本人は気づかれないようにしているのだろうが、端から見ればモ

口バレである。

まあ、和人とて健康な男子高校生だ。目の前に異性の魅力的な肢体があれば眼で追つてもしかたあるまい。

その程度の分別は茉莉にもある。そしてそれを許す度量も。だけど、その視線の向かう先が自分ではないというのは気に入らない。

今度こっそりとシルヴィアかベアトリス ミツキには絶対に言えない に、胸の大きくなる秘訣があれば聞いてみようとな茉莉がこっそりと決心した時、不意に彼女の肩に手がかかった。

「ひ つー!!」

驚いて振り向いた先。そこにはどこか暗い瞳をしたアンジェリーナの姿。

「判ります。判りますよ、マツリちゃん」

「あ……アンジー……さん……?」

「私だつて、胸を大きくしたいんですっ!! 生まれた時から一緒に、食べるものの好みも一緒なのに、ベッキーばかり胸が大きくなって……どうして? どうしてなんですかつ!!? DNA的には私とベッキーは同じ筈なのに、どうしてこうも差が つー!!」

悔し涙を流すアンジェリーナ。その胸へと茉莉が視線を向ければ、実になだらかな彼女の胸部が目に入った。

下手をすれば、五歳年下であるはずの茉莉よりもなだかな彼女の胸。

そんなアンジェリーナが、がばつと茉莉の手をとりぐいと迫る。

「頑張りましょう、マツリちゃん! いつかきつとベッキーたちを見返してやりましょうー!」

「は……はい、アンジーさん！ ボクも頑張ります！」

こうして、茉莉とアンジェリーナの同盟が締結された。

ちなみに、そんな二人を残りの三人は、実に不思議そうな顔をして眺めていたという。

「しょせん、ある者にはない者の悩みは判りはしないという事だろう。」

02 - 親睦（後書き）

本日の投稿。

唐突に話は露天風呂へ。

ええ、行きたいんですよ、温泉。

それはともかく、今後もよろしくお願いします。

ぱたぱたとスリッパを鳴らし、白峰兄弟と毅士はホテルの廊下を歩く。

彼らが手にしているのはバスタオルやタオル、そして着替えの下着など。身に付けているものもホテルに用意されていた浴衣だ。

そんな彼らが向かう先はもちろん露天風呂。

シルヴィアが明人の話を参考に作らせたという露天風呂は、彼らも楽しみにしているものの一つだった。

「あれ？」

その途中、不意に和人が足を止めた。

怪訝そうに振り返る兄と親友に、和人は首を傾げながら尋ねる。

「何か今、声みたいなのが聞こえなかった？」

「声？ 男のものか？ それとも女のものか？」

毅士の問いに和人は女のものだと答えた。

「女の声ねえ。今日は俺たちしか宿泊客はいない筈だし、そうするとシルヴィアさんたちの誰かか？ 露天風呂ではしゃいでるのかな？」

明人は視線を廊下の先にある露天風呂へと向ける。この時間、シルヴィアたちが露天風呂に入っている事は事前に聞かされていた。

「それならいいけど……まあ、空耳かも知れないしな」

などと会話を交わしているうちに、三人は露天風呂の前に辿り着いた。

そして「男」「女」と染め抜かれた暖簾を確認し、「男」の暖簾を潜ろうとした時。

「女」の暖簾がはためき、その奥から肌色の何かが数体飛び出して、物凄い勢いで彼らに向かって飛びかかってきた。

訓練で培われた自衛官の技能が、咄嗟に迎撃体制を明人に取らせた。だが明人は数瞬の後、その自衛官の技能を後悔する。

飛び出してきたモノの一体、全身肌色の一部が金色のそれは、実にやわらかそうな二つの球体をふるんふるんと揺らしながら、咄嗟に腰を落として体制を整えた明人に飛びかかった。

飛びかかってきたものの一部を掴み、投げ飛ばそうとした明人。

だが、自分が今掴んでいるモノと、そのモノの持ち主の正体を知った時、彼の身体はぴきりと凍りついた。

明人にとびかかったモノ。それはもちろんシルヴィアであり、今明人が掴んでいるモノは彼女の豊かな胸 即ちおっぱいだっただ。

思わず男の本能でにぎにぎとその弾力を確かめてしまった明人。

「あん、いやん」

だがシルヴィアの艶のある声で彼の頭は再起動を果たした。

そして慌てて周囲を窺えば、和人にはもちろん茉莉とミツキがしがみ付き、毅士にはなぜかブラウン姉妹が抱きついていていた。

皆、裸。全裸。すっぱんぼん。

明人同様、和人も絶賛混乱中のようで、普段は冷静な毅士もさすがにこの状態では冷静ではいられず、ブラウン姉妹を身体にぶらさげた状態でおろおろとあちこちを見回している。

このままでは色々な意味で不味いと判断した明人は、シルヴィア以下全員を一旦そのまま女湯に押し込んだ。

なぜ女湯に押し込んだのかと言えば、きっとそこには彼女たちの着替えがあるだろうと判断したからだ。

「幽霊？」

「そう、幽霊！ 本当に出たんだから！」

先程は恐怖のあまり口も利けなかった茉莉が、ようやく言葉を取り戻したものの、いまだにがたがたと震えながら己の両肩を抱いて叫ぶように告げる。

明人たちは無我夢中でしがみつく女性陣を何とか女湯に押し込み、落ちつかせて服を着させる。もちろん、その間明人たちは外で待機していた。と、彼女たちから先程の奇行の理由を聞き出した。そしてシルヴィアたちは真つ青な顔で幽霊が出たと告げたのだ。

「幽霊なあ？」

はなはだ疑わしそうに言いながら、和人は視線をミツキに向ける。

「うむ、確かに何かいたな。それが何かまでは確認しておらんが…」

そう告げるミツキは思案顔だ。

どうやら彼女は幽霊の正体を探る事よりも、露天風呂を飛び出したシルヴィアや茉莉を追いかける事を優先したようだ。

そして茉莉が裸で和人にしがみ付いたのを見て、対抗心から思わず自分も裸のまま彼にしがみ付いたのだった。

「取り敢えず、シルヴィアさんはホテルの支配人に連絡を。支配人立ち会いの元、露天風呂の女湯を搜索してみましょう」

そう切り出したのは毅士。さすがにオーナーがいるとはいえ、ホテル関係者に何の断りもなく女湯に出入りするのは気が咎める。そこで支配人に訳を話し、立ち会ってもらった上で女湯の搜索が行われた。

ベリルには誰にも気づかれないようにホテルの周囲の搜索を頼んだ。身体が小さく空も飛べる彼は、こういう事に打ってつけたと毅士が判断したからだ。

そして今のところ、幽霊に関するようなものの発見はないようだった。ただ、笑いながら走って行く緑川の姿なら見かけたらしい。

しばらく後、駆けつけた支配人と一緒に、和人たちは懐中電灯片手に女湯を探索した。

普段立ち入る事のない禁断の園にどきまぎしつつ、明人と毅士は周囲を探索する。

だが和人だけは、いまだに震えが収まらない茉莉に抱きつかれていて探索どころではなかった。

そんな茉莉に対抗してミツキもまた和人から離れないものだから、なおさら身動きの取れない和人は露天風呂の隅っこで大人しくしている事にした。

懐中電灯に光が左右する光景を眺めていると、ふと和人は身体に暖かくて柔らかいものが接触している事に気づいた。

現在、和人の右腕には茉莉が、左腕にはミツキがしがみ付いている。そしてその両腕と脇腹に当たる先程の感触。

左はふよんふよんと弾力良く。右はふわふわとちよつと物足りなく。

一体何だろう、と考えた和人がその正体に気づくまで0.5秒。そしてその0.5秒後には一瞬で真っ赤に茹で上がった。

そう。もちろんその正体は二人の胸。

先程は急いで着替えたため、二人は下着を着けていないらしい。つまりノーブラ。

そのため二人の柔らかな胸が、浴衣越しとはいえほぼダイレクトにむぎゅむぎゅと和人の腕と脇腹を刺激する。

さつきは二人の全裸による視覚攻撃。今度は腕と脇腹を柔らかく襲う触覚攻撃。

何か言わなきゃまずい。何とかして二人に離れてもらわないとまずい。色々な意味できつとまずい。

そう考えつつも、心のどこかではいつまでもこの状態でいたいと思っているのも事実であり。

取り敢えず辺りが暗くて助かった。この暗さならきつと自分が真っ赤になっっている事に二人は気づかないだろうから。

そう思いつつ、極力両脇の二人の事は考えないようにして、和人は探索を続ける兄たちをずっと眺めていた。

「何も発見できなかった？」

和人の言葉に、明人はゆっくりと頷いた。

あれから数刻後。場所をホテルのロビーに移動した和人たちは、調査した兄や毅士からその結果を聞かされた。

彼らは念入りに露天風呂を調べたが、誰かが入り込んだような痕跡は何も見つけられなかったのだ。

「なんせここの露天風呂はホテルの屋上だ。外から入り込むのは極めて難しい。かといってどこかに潜むようなスペースもない。ある意味でこの露天風呂は「密室」と言ってもいいだろう」

背の低い目隠しの外は若干のスペースが空いているものの、その向こうはホテルの外壁である。もちろん、出入り口は一つだけ。そ

の出入り口からシルヴィアたちが飛び出して、その後は明人たちがその場から離れた事はない。

毅士はそういう意味で、この場は密室に等しいと言いたいのだろう。

「解放された密室」。そんなどこかのミステリイにでも出てきそうな言葉が和人の頭を過った。

「じゃあ、茉莉やミツキたちが見たのは……？」

明人も和人もそして毅士も、この土地には幽霊に纏わる伝説がある事を思い出した。

海岸にある洞窟に幽霊が出る。そんな噂が昔からこの土地には伝わっているのだという。

「さつき兄ちゃんが言っていた洞窟って、ここから遠いのか？」

弟の問いに首を傾げる兄。なんせこの辺りの土地勘がないのは彼も同様なのだ。

だが、和人の問いにまだ同席していたホテルの支配人が答えてくれた。

「もしかして、幽霊の出る洞窟とは『磯女の洞窟』の事ですか？」

それならこのホテルのすぐ近くです。ホテルの所有するビーチから東に行った岩場の陰にあります。満潮時には水没してしまいますが、干潮時なら中まで入れますよ」

「磯女？」

支配人の説明に首を傾げる和人。もちろん明人以下誰も心当たりがなさそうだった。

「磯女とは海辺に出没するという妖怪の一種だ。主に九州地方の民間伝承で登場する。濡れ女、海姫などとも呼ばれ、見た目は上半身は美女だが下半身は蛇のようになっていたりとか、幽霊のようにぼやけているとか様々。共通する点としては髪が長いという点がある。その髪を使って血を吸うとも言われているな」

唯一の例外はやはり毅士だった。

そのどこから仕入れてくるのかといつも和人が疑問に思う知識量は、この場においても遺憾なく発揮された。

「海外でも下半身が蛇の美女という怪物は結構ピュラーだな。ラミアとかナーガとか聞いた事くらいあるだろう？」

おお、あるある、と相槌を打つ和人や茉莉。何故かシルヴィアやブラウン姉妹まで首を縦に振っていたりしたが。

「茉莉たちが見た幽霊ってのはどんな姿だったんだ？」

「く、暗くてよく判らなかつただけ……き、気づいたらボクたち以外の人が温泉にいたんだよ」

その時の様子を思い出して再び震え出す茉莉。

彼女たちの話を統合すると、どうやらシルヴィアたち以外の女性がいっつの間にか会話に参加しており、その事に気づいた全員がゆっくりとそちらを振り向けば、確かに彼女たち以外の人物がそこにいたという。

そしてその人物の髪は長かった、と全員が供述した。

この中で一番髪が長いのはミツキだ。彼女の髪は尻まである真っ直ぐな銀髪だが、そのミツキよりも長かったらしい。そして光の加減からその色はおそらく黒だろうとシルヴィアが証言した。

「ほ……本当に磯女が紛れ込んでいたんじゃ……」

「ごくり、と唾を飲み込んだ和人が言う。

そしてその一言に茉莉は、ひっと短く悲鳴を上げて和人に再びしがみ付く。当然、ミツキも対抗して和人に態とらしくくつついていく。

二人にしがみ付かれて狼狽える親友に溜め息を零しつつ、毅士は腕を組んで考え込む。

「明人さん。一度のその『磯女の洞窟』を調べてみませんか？」

「おいおい毅士。おまえまで本当に幽霊がいると思ってるんじゃないだろうな？」

「幽霊がいるかどうかはともかく、ちょっと気になることがあります」

「気になる事？」

「はい。まず、その洞窟が『磯女の洞窟』と呼ばれている事。いつの時代からそう呼ばれているのかは不明ですが、そもそも磯女が民間伝承に登場するのは主に九州地方です。ここはその九州地方からは極めて遠い」

このホテルが存在するのは本州のほぼ真ん中である。九州からはかなりの距離がある。

そしてその洞窟が『磯女の洞窟』と呼ばれているのは、近年になってから磯女らしき姿が目撃されたからではないかと毅士は言う。

「だが、磯女という妖怪はそれほど有名な存在ではない。現に明人さんも和人も知らなかったぐらいだ。これが子泣き爺や砂かけ婆といった存在ならば誰でも知ってるだろう。だから少なくとも磯女という妖怪の存在が、限定的とはいえ知られるようになってから……少なくとも戦後以降から『磯女の洞窟』と呼ばれるようになって

たのではないか、と思うんです」

毅士の推論に耳を傾ける一同。そしてそれはそんな時だった。

（ 聞こえるか、茉莉。私だ。ベリルだ ）

「あ、ベリル？」

茉莉は一瞬そのままベリルから伝わる話を皆に伝えようとしたが、その場にホテルの支配人がいる事を思い出し、慌てて和人だけを連れてロビーの片隅に行く。

「ベリルからの連絡か？」

茉莉の様子からそれらしいと悟った和人。だが茉莉は和人の問いには答えず小さく驚きの声を上げた。

「どうした、茉莉？」

「い、今、ベリルから連絡があっただけ……」

不審げな和人の問いに、茉莉は青ざめた顔で答える。

「す、砂浜で緑川さんが倒れているって」

03・幽霊（後書き）

『怪獣咆哮』更新。

夏っぱく怪談ふうな展開にしてみました。もっとも、本格的なホラー展開にはなりません。

最近はテレビでもあまり怪談やらなくなったなあ。昔は夏といえは怪談番組を必ず放送したのに。どうしてだろう？

ちなみに、ホテルの存在する場所は中部地方の太平洋側、だいた静岡県辺りを想定しています。

ともかく、今後もよろしくお願いします。

04 - 拉致（前書き）

遅くなって申し訳ありません。

ようやく『怪獣咆哮』の更新に漕ぎ着けました。

04 - 拉致

ベリルと魔術的に繋がっている茉莉まじりが先行する形で、白峰しろみね兄弟とミツキ、そしてシルヴィアは浜辺で倒れているという緑川みどりかわの元へと急いだ。

毅士たけしとブラウン姉妹はホテルで待機。今頃は万が一緑川が負傷していた場合に備えて、各種手当ての準備をしている筈だ。

街灯もない真つ暗な砂浜。波打ち際には夜光虫が青白く仄かに光る。一行はそんな暗闇の中を懐中電灯のだけを頼りに進む。

唯一、ミツキの朱金の瞳だけは少ない光源で周囲を見渡せる。彼女は星明かりさえあれば十分、昼間同様に活動できるのだ。

だからミツキは一行の最後尾に行く。周囲を見回して警戒しつつ、時に視覚以外の感覚も使用して油断なく進む。

やがて先頭に行く茉莉の持つ懐中電灯が放つ光の輪の中に、砂浜に俯せに倒れている人物が映し出された。

短い悲鳴を発しつつも、茉莉はその近くに浮遊するベリルの小さな姿を認める。

そして懐中電灯を移動させてその人物の顔を確認。間違いなく緑川のようなのだ。

「和人かずと！ 明人あきとさん！ 緑川さんがいたよ！」

その声に明人は速度を上げると、持っていた懐中電灯を茉莉に預け、倒れている緑川の傍らにしゃがみ込んで彼の安否を確認する。しばらく緑川のおちこちを確認した明人は、心配そうにこちらを見ている和人たちに微笑みかける。

「大丈夫。呼吸は安定しているし、見たところ外傷もなさそうだ。」

もつとも身体の中側まではここでは判らないけどな」

「じゃあ、取り敢えずホテルまで運ぼう……」

兄の言葉を受けて、和人が答える。しかし、その言葉が段々と小さくなっていき、その場にいた者たちは不思議そうに和人に注目する。

そしてそれに気づいた和人は、恐る恐る口を開いた。

「それでさ、兄ちゃん……どうやって緑川さんを運ぶんだ？」

和人のその一言に全員があつといった表情を浮かべた。

緑川は大柄だ。当然、それなりの体重がある。

明人と和人で二人がかりで運べないはないだろうが、それでも緑川の体重を考えると大仕事だ。

「しまったな……予め担架を準備してくるべきだった……」

緑川が倒れているのは判っていたのだから、それなりの準備をしてくるべきだった、と後悔しても後の祭。

こうなれば弟と二人がかりで何とか運ぼうと明人が決意した時、茉莉がひよいと右手を挙げて進言した。

「あのー……、ボクが運ぼうか？」

「え？ 茉莉くんが？ 一人で？」

言外にそれは無理だろうという雰囲気を滲ませる明人。だが茉莉はそんな明人に明るく笑いかけると、近くを浮遊していたベリルを呼び寄せた。

それに応じたベリルが、すうと茉莉と同化する。

「ほほう。魔力による筋力の増強か」

面白そうに呟いたのはミツキ。そしてこの場にいるもう一人の魔術のスペシャリストであるシルヴィアは、魔術を使用して緑川を運ぶという手段をうつかり失念していた。

魔術師としてそれでいいのかと言葉にはせずに悔やむシルヴィア。最近、白峰兄弟たちといると、魔術師としての自分を失念しそうになる。なぜなら、彼らの周囲にはトツプクラスの魔術師である自分を軽く超越した幻獣たちがいる。彼らの力に比べると、シルヴィアの力を以ってしてもどうしたって見劣りするのだ。

そんなトツプクラスの魔術師の苦悩をよそに、茉莉は軽々と緑川を担ぎ上げた。

「重くないか？」

「うん。大丈夫だよ。ベリルがサポートしてくれているからね」

心配そうな顔の明人に、茉莉は笑顔で答える。

浴衣姿の小柄な少女が、大きな大人の男性を担ぎ上げる。端から見ればなんともな光景だが、この場に居合わせた者でそんな事を今更気にする者はいない。

そして茉莉がんしょ、と可愛い気合いの声と共に歩き出すと、その茉莉に担がれた緑川が小さな呻き声を上げた。

当然、全員の注意が茉莉の背中の中の緑川へと集まる。そして呻く緑川がもぞりと動いた。いや、動いたのは緑川の腕だけだ。

何かを探すように宙を彷徨う緑川の両腕。そしてその両腕は、何かを思い出したかのようにいきなりひしつと茉莉を抱きしめた。

いや、抱きしめたのではない。正確には握り締めたのだ。茉莉のささやかな胸を。

和人たちが見守る中で、突如胸を鷲掴みにされた茉莉。しばらく自分が何をされているのか理解できなかつたが、ようやく自分の置

かかっている状況を理解する。

「みぎやあああああああああああああああああああああああ
あああつ！！！」

夜の海に響き渡る茉莉の絶叫。そしてその絶叫に負けない叫び声
がもう一つ上がった。

「こ……この感触はっ！！ ま、間違いなく貧乳の感触っ！！ う
おおおおおおお！ 貧乳最高おおおおおおおおおおおおお
！！！」

茉莉の胸に触れた事で意識を取り戻した緑川。

茉莉のささやかな胸に触れた事で、おそらく脳内を何か 彼に
とってすっげえイイもの が走り抜けでもしたのだろう。だがそ
れもすぐに再び暗転する事になる。

「ひ、貧乳って言うなああああああああああああつ！
！」

再度の絶叫と共に茉莉は緑川を放り投げた。ベリルによって筋力
の増強を受けていた茉莉は、緑川の身体を優に3メートルは上空に
舞い上げた。

そして緑川は頭から海に突っ込む。

その際、夜目の利くミツキだけは見ていた。放り投げられ、海に
突っ込む間際まで緑川の顔が何ともだらしなくにやけきっていた事
を。

もちろん、ミツキはそんな事は誰にも言わなかったが。

「ボク……ボク……今まで誰にも……和人にだつて触らせた事ないのに……そ、それなのに……ご……ごめん……ね？ 和人お……」
「あ、ああ。いい。気にするな。あれは事故だ。おまえに責任はない。だからもう泣くなよ。な？」

自分にしがみ付き、胸に顔を埋めて泣きじゃくる茉莉を、和人は必死に慰める。

明人とシルヴィアも苦笑しながらその光景を眺めている。

特に明人は、先程の茉莉の台詞から二人がまだ「そういう関係」には達していないと判り、内心ほつとしたり。

だがミツキは、和人と茉莉に一瞬だけ複雑そうな視線を向けると、うん、さすが和人だ。茉莉くんにみだりに手を出していないとは、俺の教育は間違っていないかった、などとぶつぶつ呟きながら頷いている明人に向き直る。

「のう、兄者殿」

「ん？ 何だ？」

「良いのか、と思うての。先程小娘が放り投げたあのうつけ男……浮かんでこぬぞ？ まあ、我にはあのうつけ男が浮かんでこぬとも一向に問題ないがの」

ミツキのその言葉に、明人とシルヴィアは思わず顔を見合わせる。先程茉莉が思わず緑川を放り投げてからかなりの時間が経つ。

もっとも「かなりの時間」とはいつても、それはほんの数分の事。だが、海に放り投げられた人間が数分も浮かんでこなかったとしたら。

その意味するところを理解した明人が、慌てて海に向かって走り出そうとする。

「待ちなさい！ 明人くんっ！！」

明人の足を、シルヴィアの鋭い声が止めた。

そしてシルヴィアの方を振り向いた明人は、彼女の足元に展開されて輝く魔法陣を見る。

シルヴィアが何らかの魔法を行使しようとしている事を理解した明人は、先程の制止の意味を問い質すのを諦めて静観する事を選ぶ。やがて、目を閉じていたシルヴィアがゆっくりとその瞳を露にする。

「緑川くんと思われる生命体が海の中を移動中よ。ただし、人間が泳ぐものとは考えられない程の速度だね」

今、シルヴィアが行使したのは探査ロケイトの魔術。術者の望むものの位置を掴むための魔術だ。

シルヴィアはどうやら先程のうっかりを余程気にしていたらしく、今回は素早く魔術という手段の行使に出た。

「海の中を移動中……？ それで緑川さんはどつちに？」

明人の問いに、シルヴィアは先程感じ取った方角を指差す。

その時、秋とはシルヴィアの眉間に皺が寄せられている事に気づいた。

「何か問題でもありましたか？ そりゃ、緑川さんが海の中を高速で移動中というのは十分問題ですが……」

「ええ。緑川くんの傍に、もう一つ生命体の反応があるのよ。そして……」

シルヴィアは黙って先程自分が指差した方へと視線を動かす。そして明人や和人たちもようやく気づく。シルヴィアの視線の先

に何があるのかを。

先程シルヴィアが指差した方向。

それはホテルの支配人から聞いた、『磯女の洞窟』^{いそおんな}が存在する場所と同じ方角だったのだ。

一夜明けて。

暗い夜の探索は危険と判断した明人は、明るくなってから改めて緑川を探す事にした。

そして、この件に関しては警察には一切通報しないことも。

シルヴィアたちが温泉で遭遇した幽霊。

緑川を拉致し、海中を高速で移動した何者か。

この二つが同一である可能性はあるが、だからといってその確証があるわけではない。だが、現時点で判明している事が一つだけあった。

それはこの件に明らかに人外が存在が関わっている事。

もちろんその人外とは幻獣。下手をすると怪獣の可能性だってある。

だから明人は警察の介入を避けた。

相手が幻獣か怪獣である以上、警察が介入しても被害が拡大するだけだ。

それなら、ミツキとベリルという二体の幻獣を擁し、魔術師であるシルヴィアもいる自分たちだけで対応した方がましだろうというのが明人の判断だった。

そして明人たちが明るくなってから目指した場所。それはもちろん『磯女の洞窟』。そこに何らかの手掛かりがある可能性は極めて高い、と明人とシルヴィア、そして毅士は考えていた。

幸い、本日の干潮は午前8時ちよつと前。朝から『磯女の洞窟』を探索するにはうってつけだった。

そして今、明人たちの前に、その『磯女の洞窟』がぼつかりと口

を開けている。

今、この場に居るのは明人、シルヴィア、和人、茉莉、毅士。そして幻獣であるミツキとベリルだ。

ブラウン姉妹は非常時の連絡要員としてホテルに待機。

彼女たちとシルヴィアの間には魔術によるパスが存在するので、携帯電話の電波が届かない洞窟内でも連絡が取れる。

そして明人は、この場に集まっている面々を一人ひとり見回すと口を開いた。

「では改めて隊列を確認するぞ。先頭は俺が行く。その後ろに毅士、シルヴィアさん、茉莉くんとベリル、和人、しんがり殿はミツキに頼む」

明人の言葉に頷く一同。その明人の手には、ホテルのロビーにあった土産物用の木刀が握られている。

はして幻獣相手に木刀程度が役に立つとは思えないが、他に武器がない以上仕方ない。それがないよりはましだろう。

洞窟の入口はけっこう広い。二人が並んで歩く事ができる程度の幅があり、高さも長身の明人の頭よりもかなり高い。

もつとも、この広さがどこまで続いているのかは疑問なのだが。そしていよいよ一行は、各々懐中電灯片手に洞窟内に足を踏み入れる。

足元はあちこちに塩溜まりがあり、岩に藻類がくっついていて結構滑る。

その事を後ろに注意しようと明人が振り返った時。

それは不意に現われた。

洞窟の奥から細長い何かが風を切って明人たち一行に向かって疾はしる。

しゅん、という風切音と共に空を疾ったそれは、あまりの速度に全く反応できなかった明人の脇を通り抜け、更にその奥に立っていた茉莉の胴体に一瞬で巻き付いた。

「え？」

茉莉自身、自分がどうなっているか判断できず、ただ呆けるのみ。そして茉莉以外の誰かが反応するより早く、それは再び洞窟の奥へと引き戻される。

当然、それが巻き付いた茉莉をも一緒に。

「茉莉？」

茉莉の後ろに立っていた和人は、急に茉莉が消えたようにしか見えなかった。

だが、次の瞬間には茉莉が何者かに連れ攫われたと理解し、他の誰よりも早く洞窟の奥へと向かって一步を踏み出した。

そして。

そんな和人に再び洞窟の奥から伸ばされた何か、茉莉の時と同様に和人の身体に巻き付いた。

「……このっ……！」

瞬時に自分の置かれた状況を理解した和人は、手にしていた懐中電灯を自分に巻き付いた何かに叩きつけようと振り上げた。

だが、その懐中電灯が振り下ろされるより早く、和人に巻き付いた何かやはり茉莉の時と同様に引き戻された。

そしてその場から消え去る和人の姿。

明人たちがようやく反応した時には、その場には和人と茉莉が手にしていた懐中電灯だけが、塩溜まりの中で光を放っていた。

04 - 拉致（後書き）

「ようやく『怪獣咆哮』更新です。

お待たせ致しました。おそらく次回もこれくらいの時間を必要とすると思いますが、見捨てる事なくお付き合いいただければ嬉しいです。

それでは、今後ともよろしく願います。

「うがつ!! 痛てええつ!!」

突如鼻に襲いかかった激痛に、和人は意識を取り戻して上半身を起こした。

だが、眼を開けた筈なのに何も見えない。まさか何らかの理由で失明したのか、と和人の心に恐怖心が湧きあがる。

そして再び痛み。今度は右手の小指だった。

和人の心の恐怖は更に大きくなる。自分は何も見えないのに、周りには何かが潜んでいて自分に攻撃を仕掛けてくる。このような情況で平静でいられるわけがない。

上半身を起こした状態で無意識のうちに後ずさる。その時、何気なく着いた左手の下で、かちりと小さな音と共に一条の光が煌めいた。

「え?」

一瞬だが光が見えた事で、和人の恐怖心が少し和らぐ。そして今まで何も見えなかったのは、別に失明したわけではなく単に周囲が真っ暗だったからだと悟る。

和人はゆっくりと先程光った辺りに手を伸ばす。この時になってようやく自分のいる場所がごつごつとした岩場である事にも気づいた。

やがて恐る恐る伸ばした手の先に、明らかに岩とは異なる質感のものが触れた。

慎重にそれが何かを指先で確かめる。大きさは直径3センチほど、

厚みは1センチほどの平べったい円形。その円形の片面には、更に小さな円形の何か。その何かに触れると、先程と同じく一瞬だけ光が走った。

和人はそれが何か思い当たった。それは彼が念のためにとポケットに入れておいた、小さなLEDライトのキーホルダー。どうやらポケットから零れ落ちていたようだ。

キーホルダーを拾い上げ、ライトのスイッチを押す和人。小さくも明るい光に照らされ、和人はようやく周囲の様子を知る事ができた。

今彼がいるのは直径5メートルほどの円形空間で、あちこちに岩と塩溜まりがあった。

そして光の中を横切る小さな影。和人は慌ててライトを動かしてその影の正体を探る。

「……………何だ、蟹かよ……………」

どうやら先程和人を攻撃したのは、ここに住み着いている小さな蟹だったようだ。

ほっと安堵し、先程挟まれた指をライトで照らして確認しようとした和人は、この時になってようやく重大な事に気づいた。いや、気づかされた。

「……………どうして俺、素っ裸なんだ……………？」

そう。

何故か和人は全裸だった。

「……………潮が満ちて来たな……………」

毅士の一言に、明人とシルヴィアはそれぞれ足元に眼をやる。

確かに彼の言葉通り、先程は全くなかった海水が、今では彼らの踝を浸す程まで水位が上がっていた。

和人と茉莉が不意に何者かに拉致されて約一時間。干潮時を狙ってこの『磯女の洞窟』にやって来た明人たちだったが、一時間の時間経過に水位は徐々に上がって来ていた。

「ここでこうしても仕方ないわね……」

そう呟くシルヴィアの視線の先には大きな塩溜まり。いや、これは単に塩溜まりではなく、洞窟の通路が水中に没していると考えるべきだろう。

和人たちが拉致され、慌てて後を追って『磯女の洞窟』に足を踏み入れた明人たち。だが、『磯女の洞窟』は、30メートル程進むとそこで行き止まりになっていた。

いや、正確には洞窟は下方へと伸びており、その洞窟全体が水没していて明人たちはこれ以上進めないでいたのだ。

「ここは一度も度つて体制を立て直すべきね」

「で、ですが、それでは和人と茉莉くんが……っ!!」

「あなたの気持ちは判るわ。だけど、ここでこうして突っ立っていったって始まらないのも事実よ」

シルヴィアの言葉に明人は黙り込む。彼だつてシルヴィアの言葉が正しいのは理解しているのだ。

シルヴィアから視線を逸らしぐつと黙り込む明人に、それまでじつと海水を注視していたミツキが振り返った。

「兄者殿たちは一度戻るがよい。ここから先は我が一人で主を探しに行く」

そう言つとミツキは明人たちが見つめる中、何の躊躇いもなく身に付けているものを脱ぎ捨てて下着姿になる。

「ど、どうするつもりなんだミツキ？」

慌ててミツキの裸身から視線を逸らし、若干顔を赤く染めた明人が問う。

「我は幻獣よ。この程度の海水、潜り抜けるのは造作もない。故にここから先は我一人で行く。それに我と主は繋がつておる。漠然とだが、主がどこにいるのか判るしの」

「そ、それじゃあ、和人は無事なんだなっ!？」

思わずミツキに視線を戻し 慌てて再び視線を逸らした明人は、弟が無事だと判り安堵の息を吐いた。

「ああ。我には判る。主は無事だ。お主にも判つておるのだろうか？」

そう問つたミツキの視線の先にはベリル。

「もちろん、私にも茉莉が無事だと判るとも。だが、私ではこの先には行けそうもないがな」

鳥型の幻獣であるベリルは、水に入る事ができない。それ故か、彼の言葉には若干悔しそうな響きが込められていた。

「なに、主を助けるついでだ。あの小娘も助けてやるさ」

不敵に笑つたミツキは明人たちが見詰める中、するりとそのしな

やかな肢体を暗い海水へと潜り込ませた。

「……潮が満ちて来たな……」

期せずして、和人は親友と同じ台詞を吐いた。

今、和人がいる岩に閉ざされた空間にも、徐々に海水が浸水してきていた。

和人が意識を取り戻してから体感時間で約30分。体感時間なのでもちろん誤差はあるだろうが、干潮を過ぎて徐々に潮が満ちて来ているようだ。

この30分で和人は、今自分がいる空間を大体調べ終えていた。直径5メートルほどのこの空間から伸びる通路は二つ。一つは今もじわじわと水位が増してきている水没した海中の通路。

和人は謎の触手のようなものに巻き付かれ、強引に洞窟の奥へと引っ張られた後、自分が水中に引きずり込まれて意識を手放したのを覚えていた。

そこから察するに、自分はその水没した通路を通ってこの空間に連れ込まれたのだろう。

そしてもう一つの通路はこの空間から上方へと伸びているようだった。

壁にこびり付いたフジツボの位置から、このまま水位が上がればこの空間がほぼ水没するのは明白。ならば和人の取る選択肢は一つのみ。

「こっちの通路を進むしかないか……」

和人は通路の前まで進み、その奥をライトで照らしてみる。通路はそれなりの幅と高さがあり、和人が普通に立って歩いても問題なさそうだ。

そして彼の持つ小さなLEDライトでは、その通路の奥を見渡すことが不可能な程、先に続いているようだった。

更に裸でいるという事実が和人を不安にさせる。得体の知れない場所で裸でいるという事がどれだけ不安な気持ちにさせられるのかを、和人は嫌という程味わっていた。

海中の通路がどれだけ続いているか判らない以上、和人が進むべき道はもう一つの通路のみと言っている。

自分がそこを通ってここに連れられて来た以上、それ程長い通路ではないだろうが、手持ちの小型ライト一つで海中の通路を泳ぐのはいくら何でも危険過ぎる。

それにこの小型ライトは防水されたものではない。幸い今は無事に使えているが、水中でもきちんと思えるかどうか判ったものでもない。

以上の事から、やはり和人の下した決断は残された通路を進むというものだった。

「仕方ない……行くか……。本当はこういう場合、下手に移動しないのが鉄則なんだけどな……」

誰に告げるでもなく呟いた和人は、そろそろと行き先の判らない通路を進み始めた。

和人が立ち去ってしばらく。

それまで彼がいた円形の空間の、水中に没していた通路の水面が不意にゆらゆらと揺れた。

やがて揺れる水面を破って、海中から何かがずりりと這い出して来る。

完全な闇に閉ざされた空間に這い出して来た『それ』。『それ』は身体中をぬめぬめとした鱗で覆われていて、鋭い角の生えた頭を

ぐるりと周囲を見回すように巡らせた。

和人が立ち去ってから時間が経過した事で、大人の膝上ぐらいまでの水位の海水が空間の半分程を侵していた。

『それ』はそこに何も無いのを確認したのか、そのままずると海中から這い出ると、先程和人が進んだ通路を鱗に覆われた四肢でひたひたと進んで行った。

緩やかな登りとなっていている通路をゆっくりと歩く和人。小さなLEDライトで得られる視界は極めて狭く、1メートル程先を小さく照らすのみ。

加えて通路はあちこちが石や岩でごつごつとしており、裸足の和人は怪我をしないように尚更ゆっくり歩を進める必要があった。

そうやって進むことしばらく。不意に和人の耳に、かつん、という硬質な音が響いた。

「な、何だ……っ？」

和人は音のした方にライトを向けるが、小さなライトではその正体確かめるには至らない。

意を決した和人は、ゆっくりと音のした方へと足を運ぶ。

やがてライトが照らす小さな円形の中に、通路を塞ぐような大きな岩が浮び上がった。

だが通路の横の壁と岩の間に若干の隙間があり、辛うじて先へと進む事はできそうだった。

和人は身体を横にして、壁や岩に肌を擦らないように注意しながらその隙間を抜ける。

そうやって隙間を何とか抜けた瞬間、再び小さな音が和人に耳に飛び込んだ。

今度聞こえた音は先程のような硬質なものではなく、まるで息を

飲み込んだかのようなもの。

(な、何かいるのか……?)

慌ててライトを向ける和人。そのライトの明かりの中に、思いもしないものが浮び上がった。

いや、思いもしない、というのは間違いだ。これまで頭のどこかではずっとその事を考えていたのだから。

和人がここにこうしている以上、彼女もまた無事でどこかにいる可能性は高かった。

そして今、小さな明かりに照らされているのは、彼が予想した通りの姿の彼女。

通路を塞ぐようにしていた岩の影で、膝を抱えてしゃがみ込んでいたのは間違いなく茉莉だった。

「茉莉……?」

「え……和人……?」

和人の声に、茉莉が顔を上げる。そしてその顔がぼんつという音が聞こえそうな勢いで真っ赤に染まる。

「?」

一瞬不思議そうな顔をする和人。だが、自分が今どんな姿にいるのかに思い至り、彼もまた茉莉同様全身が染まる程赤くなった。

今、彼は身体を横向きにして、岩と壁との隙間を潜り抜けたところだった。

背中を壁側に、身体の前を岩側にして。

そして茉莉は和人とは反対側の岩と壁の影にしゃがんでいたのだ。つまり。

茉莉からすれば、自分の方を向いた和人の姿が、小さな明かりの中臙げに見えていた。

そう。今の和人はオープンフロント状態。茉莉からはその全てが見えていたのだ。

そして茉莉もまた。

自分の名を呼ぶ和人の声に、茉莉は思わず立ち上がってしまった。立ち上がってしまったのだ。自分を照らす小さな光の中で。もちろん、茉莉も和人同様全裸だった。

互いに互いの全てを見てしまった二人は、淡い光が照らす中、悲鳴を上げる事さえ忘れて呆然と互いを見詰め合っていた。

互いの全てをじっくりと。

05 - 洞窟（後書き）

『怪獣咆哮』更新。

ここまででは何とか順調に週一回のペースで更新できています。が、いつまでこのペースが続くやら……。

何か『辺境令嬢』とか『魔獣使い』の方が書きやすく、ついついそつちを書いてしまうので『怪獣咆哮』が遅れるという悪循環……。いや、何とか『怪獣咆哮』も書いていますよ？ ええ。

そんなわけでこれからも頑張って書いていきますので、今後よろしくお願ひします。

一旦、ホテルへと戻った明人^{あきと}たちは、残っていた毅士^{たけし}とブラウン姉妹に事の一連を伝えた。

「　　どうやら、この一件には確実に幻獣が関係していますね」

「ええ。私もそう思うわ」

「ですが、怪獣　　という線は考えられませんか、シルヴィア師？」

今回の一件に幻獣が絡んでいると結論づけた毅士とシルヴィアに対し、ブラウン姉妹は怪獣の関連も視野に入れるべきではと提案する。

だが、その案は師匠であるシルヴィアに否定される。

「今回の件　　^{みどりかわ}緑川怪士長の誘拐や、^{かずと}和人くんたちの拉致に、怪獣

は関与していないでしょうね」

「その根拠は？」

全く迷う素振りもなく断言するシルヴィアに、アンジェリーナは確認の意味も含めて尋ねる。

「怪獣には知能と呼ぶべきものがない。怪獣にあるのは本能だけよ。だから怪獣が人を攫うという行為をするとは思えない。それが根拠ね」

「ですが、知能に関してはアルナギンゴの例もありますが？」

「　　あ」

ベアトリスの的確な突っ込みに、ぼかんとした顔を隠そうともし

ないシルヴィア。どうやらここでも彼女のうっかりが炸裂したようだ。

確かに大半の怪獣には本能のみである。だが、中にはアルナギンゴのように魔術を操る怪獣も存在し、そのような怪獣は知能を有しているというのが最近になって明かになった。

「だが、今回に限っては怪獣の関与はないと考えていいと思います。確かに知能を有する怪獣も存在しますが、怪獣に人を攫う必要性があるとは思えません。怪獣が人間を必要とするのは、その第一の目的が捕食ですからね。それなら攫わずともその場で捕食してしまえばいい」

緑川が生きたまま連れ去られたのはシルヴィアが魔術で確認しているし、和人と茉莉に関しても、彼らと契約している幻獣たちの証言から無事である事は明らかだ。

だから毅士は、和人たちが連れ攫われたのだが捕食目的ではないと言いたいのだ。

そして毅士の意見に、その幻獣であるベリルもまた同意した。

「毅士殿の言う通りだろう。あの場にいた中でわざわざ茉莉と和人殿を標的にしたのは、おそらく二人の魔力が高かったからだ。あの二人の魔力は明人殿やシルヴィア殿よりも高いからな。だが、懸念がないわけではない」

「懸念……?」

「あの二人は契約者だ。そしてあの洞窟に潜む魔獣がその事に気付かぬはずがない」

心配そうな明人に、ベリルは重々しく告げる。

「最悪、あの二人は殺されるかもしれない」

真つ暗な洞窟の通路をほぼ塞ぐように存在する岩。

その岩のこつちと向こうで、和人と茉莉は互いの持つ情報を交換しあっていた。

なぜ二人が岩の両側にいるのかといえば、例え真つ暗な中でも二人とも裸でいるため、傍にるのが恥ずかしかったからだ。

「じゃあ、闇雲に歩いているうちに、ここに来ちまったってわけか？」

「うん……。眼が醒めたら辺りが真つ暗で……。もしかして急に失明したんじゃないかって焦ったよ」

茉莉まつりの話の聞くに、どうやら彼女も和人が目覚めた所と同じ場所で意識を取り戻したようだ。

そして偶然蹴飛ばした石が他の石にぶつかり、その時飛び散った火花で自分が失明したのではなく、真つ暗な中にいるのだと気付いたと言つ。

そして近くに和人がいる事に気付かず、手探りで歩いているうちにこの通路に入り込み、やがてこの岩にぶつかったところで物音がしたので、そのまま岩陰に隠れていたとの事だった。

「あー、きつとその物音つてのは俺が歩いた時に立てた音じゃないか？ どうやら茉莉が気付いてから、それほど時間をおかずに俺も気付いたんだな」

「うん。ボクもそう思う。でもあの時はそれが判らなくて、怖くなくてここにしゃがみ込んでいたんだ」

茉莉の取った行動は本来誉められた行為ではない。あの場合、下手に動くよりも同じ場所で見つとしておくべきだった。そうすれば

遠からず目覚めた和人とすぐに合流できたであろう。

だが、和人はそれも仕方のない事だと思う。

自分は偶然LEDライトを見つけられたので、彼女よりも冷静に行動できたが、もし茉莉と同じような状況であれば、きっと和人も手探りで歩き回っていただろう。

まあ、何はともあれ、こうして合流できたのだからよしとするべきだ、と一人心中の中で判断する。

「でもどうしてだろ？」

「何がだ？」

「どうして、ボクたちをそ、その……は、裸にしたのになって思っ
て……」

確かにそれは和人も疑問だった。

相手が何者かは知らないが、自分たちに怪我を負わせる事なく拉致した以上、何らかの用があるのは明らかだ。

だが、果たしてそれと今二人が裸でいるのとどのような関係があるのだろうか。

それだけはどう考えて和人には判らない。

(普通、裸にする目的は性的な……)

その考えに至った瞬間、和人の脳裏に先程の光景が甦る。

淡いLEDライトの中に浮かび上がった茉莉の裸身。確かに胸の起伏は乏しいが、だからといって彼女の身体にまったく魅力を感じないわけではない。

年上のシルヴィアやミツキ 見かけはともかく、ミツキの年齢は1000を超えている とは違った、同年代の少女の裸身。

それはシルヴィアやミツキとはまた、違う意味で和人には魅力的に見えた。

もちろん、和人が茉莉の裸を眼にしたのは今回が初めてではない。それどころか、初めて出会った時に彼女は全裸だったのだから。それから一緒に暮らすようになって。やはり一緒に暮らしている以上、ちらちらと茉莉の肌を眼にする機会があった。

茉莉も意図的に肌を晒しているわけではない。と、和人は思いたい。が、やはり一つ屋根の下で暮らしている以上、何かとそれを眼にする事が多々あるのだ。

何かを拾う際に屈んだ時に見えてしまう胸元。振り返った際に翻ったスカートから覗く太股。風呂上がり髪をタオルで纏めている時のうなじなど。和人が思わずどきりとさせられる光景は結構よくあるのだ。

その茉莉が今、岩を挟んだ向こう側に全裸でいる。

その事を改めて意識した時、和人の心臓の鼓動はテンポが一気に倍になったかのように荒れ狂う。

きつと今、自分の顔は真っ赤になっているだろう。と、和人の冷静な部分がそう感じていた。

「……どうしたの、和人？ 急に黙り込んだじゃったけど？」

「あ！ いや、いや、何でもない！ ちよ、ちよっと考え事してただけだ」

不意に近くで響いた茉莉の声に、思考の海から浮上した和人は慌てて答える。

だから和人は気付いていなかった。茉莉の声が近くで響いたという点に。

そして和人がその事に違和感を感じた時、彼のいるすぐ傍でかつんという石が転がる音がした。

反射的に和人はLEDライトを音の方へ向ける。

一条の小さな光が走り、彼のすぐ傍に白く輝く何かを一瞬浮かび上がらせる。

「私と茉莉は繋がっている。だから判るのだ。彼女は無事だ。そして茉莉が無事である以上、和人殿もまた無事である公算が高い。だが……」

小さな頭をくりつと傾げて、ベリルは不思議そうに告げる。

「先程からなぜか……茉莉が極度に緊張しているのを感じるのだ」「それは危険を感じているからではないの？」

「いや、そのように切迫したようなものではなく……緊張と同時に極度の高ぶり……即ち興奮もしているようなのだ」

ベリルの言葉に、シルヴィアを始め全員が首を傾げる。

だが、ベアトリスが思わずといった感じでぽつりと呟いた。

「洞窟の中……暗闇……若い男女が二人つきり……」

顔を朱に染め、一人何やら悦にいったようににやにや笑みを浮かべて身悶えするベアトリス。

そんな彼女に生暖かい眼差しを送る一行の中、明人だけ顔色を変えていた。

「は、早まるな和人おっ！！ 早まってはいかあああああんっ！！
！ おまえたちにはまだ早いっ！！ 色々と早いっ！！ 自分を大切にしろおおおおおおおっ！！ 高校生らしい節度ある付き合いを
っ！！」

最後の方は既に言葉にならない明人の叫びが、虚しくホテルの部屋に響いたのだった。

「……ねえ、昨日ボクが言った事、覚えている……？」
「き、昨日……？」

腕の中の柔らかな感触に、和人の心拍数は更に跳ね上がる。

「……うん。昨日ボクたちが緑川さんを探しに行つて……緑川さんをボクが担ぎ上げた時……」

和人の記憶が甦る。あの時、不意に覚醒した緑川が、茉莉の胸を掴みあげたのだ。

「……あの時、ボク、言ったよね？ 誰かに胸を触られるの、初めてだつて……」

「あ、ああ……確かにそう言っていたな……」
「あれは事故みたいなものだったけど……それでも初めてで……ちよつとシヨックだったんだ……そ、それで……お、思ったんだ……」

腕の中の茉莉。その彼女の体温が不意に上昇したように和人は感じた。

「……あんな形で触られるぐらいなら……もつと前に和人に触つて貰えば良かったな……つて……」
「あ、ああ……え、ええええええっ！？ ちよ、ちよつと、おまえ、何言つて……っ！？」

慌てふためく和人をよそに、茉莉は更に言葉を続ける。

そして先程和人が感じた茉莉の体温の上昇は更に高まっていた。

「……だから……ボクの色んな『初めて』……和人にあげる……ね

？ も、貰ってくれるか……な？」

そして茉莉は、まずは、と呟いて和人の腕の中で身じろぎする。
次の瞬間、和人は自分の唇に暖かく甘い何かに触れるのを感じた。

「……えへへ。ボクの……ボクの初めてのキス……だよ？ 今度こそ、正真正銘、初めてを和人にあげられた……ね？」

更に早くなる和人の心臓の鼓動。そして自分の心臓以外の激しい鼓動を、和人は腕の中の少女からも感じられた。

茉莉がぐつと和人に体重をかける。

自分の胸に茉莉の柔らかい何かを押当てられている事に、和人は軽いパニックを起こしながらも確かに気付いた。

「もつと……もつと、ボクの『初めて』……貰って……ね？ ボクは和人に……貰って欲しいんだ……」

和人の頭の中は真っ白になり、何も考えられなくなった。

06 - 暗闇 (後書き)

『怪獣咆哮』更新しました。

前回から少々間が空いてしまい申し訳ありませんでした。

なかなか話が進まず、試行錯誤しているうちに時間が……。

あと、つつい書きやすい『境界令嬢』とか『魔獣使い』の方を書いてしまつというのもありまして。ええ。

今後もがんばりたいと思いますので、お付き合いよろしくお願ひします。

07 - 磯女

肌と肌で直接感じる茉莉の体温。

耳元で聞こえる彼女の僅かな息使い。

彼女から立ち上る甘い体臭。

そして自分の胸に押しつけられる柔らかな二つの果実の感触。

それらを感じた和人の頭は、何も考えられないほど真っ白になった。

このまま茉莉を自分のものにしてしまえと叫ぶ雄の衝動。

こんなところで事に及んでもいいのかと訴え続ける理性。

最初は均衡を保っていた両者だったが、徐々に天秤は衝動の方へと傾いていく。

この事で和人を攻めるのは間違いというものだろう。

彼は17歳の健康な男性なのだ。衝動が理性を駆逐したとしても仕方がないというもの。

そしてついに天秤が衝動へと傾ききる時。彼の耳が小さな物音を捉えた。

反射的に手にしていた小型のLEDライトを音のした方へと向ける。

暗闇を切り裂く一条の光。そしてそれは光の中に確かにいた。

思わず出そうになった声を必死に飲み込む和人。横目で腕の中の茉莉を見れば、彼女も両手で口を押さえ悲鳴を押し殺していた。

簡潔にそれを表すならば、全身を鱗で覆われたウーパールーパーといったところだろうか。

体長は1メートルほど。のっぺりとした平たい顔と寸胴なオタマジャクシといった外見の胴体。そしてそれを支える短い四肢。頭の横から突き出した一对の角らしきもの。

のっぺり顔のウーパールーパーもどきの口が開く。その中には細かいが鋭そうな牙がびっしりと生えていた。

そしてそのウーパーもどきの後ろには、更に同じようなウーパーもどきが何匹も蠢いている。

和人は慌てて茉莉と一緒に立ち上がる。そして彼女の手を引いて走り出した。現れたウーパーもどきたちは、明かに和人たちに敵意を抱いているのが感じられたからだ。

もう裸でいるとか足元に気をつけるとか関係なく。今はLEDライトの小さな光を頼りに走るしかない。

ウーパーもどきたちは和人がやって来た方から押し寄せて来る。残された道はこの通路を登って行くしかない。

この先に何があるのか。そんな不安を押し殺し、和人は茉莉の手を決して離すことなく必死に走り続けた。

鋭い爪が鱗に覆われた身体を切り裂く。

水中でふるわれた爪は普段ほどの鋭さはなかったが、それでも相手の身体に深い傷を負わせた。

二度三度と痛みにも身体を震わせるそれ。だがやがてそれはまるで溶けるかのように消え失せる。

だが、それは一体ではない。今消滅した一体の穴を埋めるように、他の個体が二、三体群がって押し寄せて来て、その細かく鋭い牙が生えそろった口をぱくりと開く。まるで自分を喰らおうかとするように。

ええい、しつこい奴らよ！

水中では声に出すことはできないので、せめて心の中で悪態を吐く。

慣れない水中で必死に身を振り、押し寄せるそれをぎりぎりです。

擦れ違いざまに再び爪をふるい、二体のそれを消滅させる。

だが、それでも自分を包圍するそれらの数は一向に減らない。減ったようには見えない。

その事が彼女　ミツキの心に更なる苛立ちを呼び起こす。攫われた和人と茉莉を追って水中に身を躍らせたミツキ。

しばらくはそのまま水中を何事もなく進んでいたのだが、突然ミツキの鋭い感覚にひっかかるもの出現した。

しかもそれは明かに彼女の対しての敵意を抱いて。

そしてそれらは現れた。彼女の周囲の水中に、まるで湧き出るかのように唐突に。

1メートルほどの体長。細長く寸胴の身体。扁平な頭に短い四肢。それは間違いなく和人たちの前に現れたものと同じのものであったが、ミツキにはその事を知る術がない。

そして現れたそれらは、一斉にミツキに襲いかかって来た。

慣れない水中とはいえ、それらはミツキの敵ではない。だが、相手の数が多すぎた。気づけばミツキは完全にそれらに包圍されている状態だったのだ。

そんな状態に陥り、ミツキは苛立ちながらも迫るそれらを鋭い爪で切り裂いていく。

それに彼女が苛立つのは目の前のそれらだけが原因ではなかった。ミツキの主である和人。彼とミツキは心の奥底で繋がっている。

その主と繋がっている心の部分が、先程から何やらざわめきたっているのだ。

彼も何かに襲われているのかも知れない。そう思うと、尚更に彼女の心はささくれ立つ。

苛立ち紛れに振るわれた爪が、更に数体のそれを切り裂き消滅させる。

そしてできた空間の穴にミツキは己の身体を強引に割り込ませる。一秒でも早くこいつらの包圍網をくぐり抜け、主である和人の元へと駆けつけるために。

どれくらい走っただろう。肺が酸素を求めてせいせいと喘ぐ。両足が休息を要求してがたがたと震える。

相変わらず上り調子の坂道をLEDライトの僅かな光源を頼りに走る二人。背後からはざわざわという気配が途切れる事なく追いかけてくる。

だが、やがて二人の前方に小さな光明が見えた。

「み、見て、和人！ 光がつ！！」

和人の背後、手を引かれながら走っていた茉莉がそちらを指差して叫ぶ。

和人が前方を見れば、確かに光が見えた。萎えかけていた足に力が戻る。

「あそこまで走れっ！！」

「うんっ！！」

どうやらそれは茉莉も同様のようで、二人が走る速度が加速する。

「あ、あれって、ひよっとして外かな？」

「判らん……。だが、もしかするとそうかもな」

茉莉の顔に笑顔が浮かぶ。零れてくる光のお陰で、もうLEDライトがなくても彼女の表情を見分けられるぐらいはできるようになっていた。

そして二人は光へと飛び込む。

久しぶりに感じた光はとても眩しく感じられた。だが、やがて目が慣れて来ると、その光は太陽の光ほど強くない事に和人と茉莉は気づいた。

「……外じゃ……なかつたね……」
「どうやらそのようだな……」

彼らが飛び込んだ場所は、四方と天井を岩に囲まれていた。そしてその岩肌の所々が発光し、丁度朝まずめ程度の明るさで周囲を照らし出していたのだ。広さはちょっとした体育館二つ分ぐらいだろうか。

「ねえ……これって光苔って奴かな？」

茉莉は発光している岩肌を興味深そうに眺めている。

「判らないな……判らない以上、無闇に触るなよ？ 何か毒性があるかも知れない」

「えっ！？ ど、毒っ!？」

毒があると聞いた茉莉は、飛び退くように岩肌から離れる。

「ほ、本当にこれ、毒があるの？」

「だから判らないって。判らない以上、毒がないとは言いきれないだろ？」

茉莉の質問に、和人は絶体彼女の方を見ないようにしながら答えた。

そんな和人に疑問を感じる茉莉。だが、和人の背中を見ているうちに、どうして彼が自分の方を振り向かないのかその理由を悟った。

(そ、そうだった……ボクたち、裸だったんだっけ……)

どうやら茉莉は、自分たちが全裸でいる事を忘れていたらしい。予想以上に遅しい背中。きつちりと筋肉のついた両腕。そしてきゅっと引き締まったお尻。

それらが薄明かりの中、はっきりと目に飛び込んで来て、茉莉は改めて自分たちの格好を思い知らされたのだ。

赤面しつつ和人から視線をそらす茉莉。だが、ちらちらと時々どうしても彼の方を見てしまうのはご愛敬。

和人の方もまた、振り返って茉莉の裸身を見てみたいという衝動と必死に戦っていた。

互いに背を向け合いながらも、相手の気配を必死に探る二人。何とも滑稽というか微笑ましいというか。

だが、そんなほんわかした雰囲気もそこまでだった。二人が登ってきた通路から、ざわざわとした気配が漂って来たのだ。

「くっ！ もう来たのか！」

和人は周囲を見回してみる。どうやら先程彼らが登って来たもの以外に通路はないようで、ここは完全な行き止まりのようだった。

「とりあえず奥へ！ ここにいたら危険だ！」

「う、うん！」

再び茉莉の手を握り駆け出す和人。

しかし、ここには通路もなければ身を隠せそうな物陰もない。あるのはただがらんとした空間のみ。

それでも二人は必死に奥へと走る。幸い先程のウーパーもどきの足は遅く、二人の足でも十分距離を離す事ができた。

しばらくすると先程の通路から溢れるように現れるウーパーもどき。その数は10や20ではきかない程になった。

そしていくら広いといっても有限の空間である以上、和人と茉莉

はあつと言つ間に壁際へと追い詰められてしまふ。

壁際に背後に茉莉を庇いながら、徐々に押し寄せてくるウーパーもどきを見詰める和人。

ウーパーもどきの数は余裕で50を超えているだろう。

どンドンと押し寄せる異形の怪物。逃げ場もない。正しく絶体絶命の危機。

いくら和人が怪獣や幻獣といった超常の存在と接した経験があるとしても、恐怖からパニックに陥つても不思議ではない状況である。だが、和人の理性は辛うじて保たれていた。背中に感じる暖かい温もりが、彼の理性を繋ぎ止めている最大の理由であつた。

しかし、例え理性が残されていようとも、今の状況を打破する術は思いつかない。

武器となるようなものどころか、衣服さえない全裸の状態。こんな状態であるウーパーもどきと戦うのは自殺行為以外の何者でもないだろう。

それでも。例え自殺行為でしかないとしても。

和人は拳を握り締めた。少しでも茉莉を守るため、力尽きるまで抗おうと。

いよいよ、ウーパーもどきの波が足元まで押し寄せる。

和人は覚悟を決めて一步を踏み出した。

「か……和人？」

和人の覚悟を悟つたのだろうか。背後から茉莉の心配そうな声が響く。

和人は少しだけ振り返つてにこりと笑つと、改めて拳を握り締めてもう一步踏み出す。

茉莉の体温が背中を感じられなくなる。それが和人が覚悟を決める最後のスイッチ。

最も近くまで這い寄つたウーパーもどきを蹴り飛ばそうと、和人

は足に力を込める。

そして蹴り足を振り上げようとした時。和人の攻撃の意思を察知したウーパーもどきの一体が、その短い四肢からは想像もできないような跳躍を見せた。

和人の目線まで高々と舞い上がったウーパーもどきは、くぱつと口を大きく開いて和人を飲み込もうとばかりに飛びかかる。

和人は反射的に一步後ずさった。その一步が結果的に和人を救った。

和人の目の前を何かが掠めるように横切ったのだ。

「え？」

それまで和人のいた空間を掠めるように横切ったそれは、和人も茉莉にも見えない速度で空中のウーパーもどきを地面で蠢いていたもの共々薙ぎ払う。

それで、跳躍したウーパーもどきを易々と両断し、和人たちまで後少しという所まで迫っていたウーパーもどきたちも数体が宙を舞った。

宙を待ったウーパーもどきたちは、そのまま空中に溶け込むように消えていく。

その何かは数度閃き、乾いた炸裂音が響かせる。その度にそれはウーパーもどきたちを一方的に蹂躪する。

打ち払われ、断ち切られ、そして叩きつけられ。ウーパーもどきたちは片っ端から消滅していく。

その光景を呆然と見詰めていた和人と茉莉は、ようやく今目の前で蹂躪の限りを尽くしているものが、細くしなやかな鞭のようなものであると思いついた。

同時に、それがどこから振るわれているのかも。

「上……？」

そう呟いたのは茉莉だったが、和人も同じ事を思っていた。振り仰いだ二人の視線の先で、何かが天井にへばり付いて蠢いているのが薄暗い中で何とか確認できた。

「……………あ、あれ何……………？」

「判らない……………でもきつとあれは……………」

幻獣。

言葉にこそ出さないものの、二人の見解は一致していた。

問題はあの幻獣が自分たちにとって敵対的な存在かどうかだ。

じつと天井で蠢く影を見詰める和人。ふと気づけば周囲に満ちていたざわめきや、ウーパーもどきを薙ぎ払う鞭のようなものが翻る音がしなくてついていた。

改めて周囲を見回せば、あれ程ひしめき合っていたウーパーもどきの姿が一体残らず消え去っている。

「あ……………あれだけいたのに、こんな短時間で全部片付けたのか……………」

おののくように和人は呟いた。そして再度天井を見上げ

「い、いない？」

先程まで天井で蠢いた影。だが今はその影が存在しない。

どこに行ったのかと天井に視線を這わせる和人。その和人の背後から、茉莉の震える声が彼の耳に届いた。

「か、和人……………あ、ああああ、あれ……………っ！」

背後から伸ばされた茉莉の腕。その指は和人の前方を指していた。和人は茉莉が指差す方へと視線を移動させる。そしてそれはそこにいた。

漆黒の髪をざんばらに長く伸ばし、真っ赤な唇をにいと歪めて。

一見ただけでは女性。それもかなりの美人に分類されるだろう。その身に衣装らしきものは一切纏わず、その均整の取れた美しい裸体を惜し気もなく晒して。

豊かな胸の双丘が揺れるたび、その先端に息づく赤く可憐な果実も魅惑的に震える。

だが。

だが、問題はその女性の下半身だ。

彼女の腰から下は、細かな鱗に覆われた大蛇のそれ。

「い…磯…女……」

そう。

その姿は確かに、タベ毅士たけしから聞かされた磯女のものだった。

そしてその女性　磯女は、和人の眩きが聞こえたのかにたありと笑った。

07 - 磯女（後書き）

『怪獣咆哮』更新しました。

前回の更新から一週間……と二日経ってしまいましたけど。

今後も何とかがんばって、一週間に一度は更新したいと思います。

よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0997v/>

怪獣咆哮

2011年10月6日16時56分発行